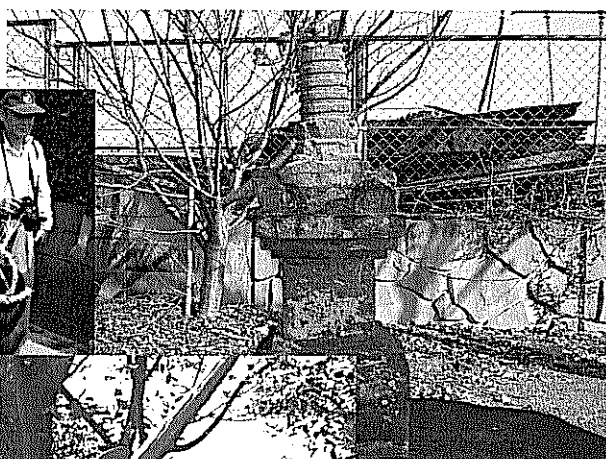
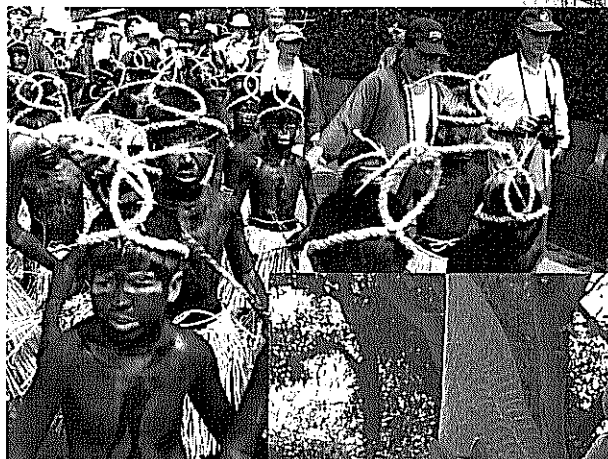


筑後市の文化財

—平成16年度版—

久富の盆綱曳き行事



前津熊野神社 宝篋印塔



羽犬像 (羽犬塚小学校前)

水田天満宮

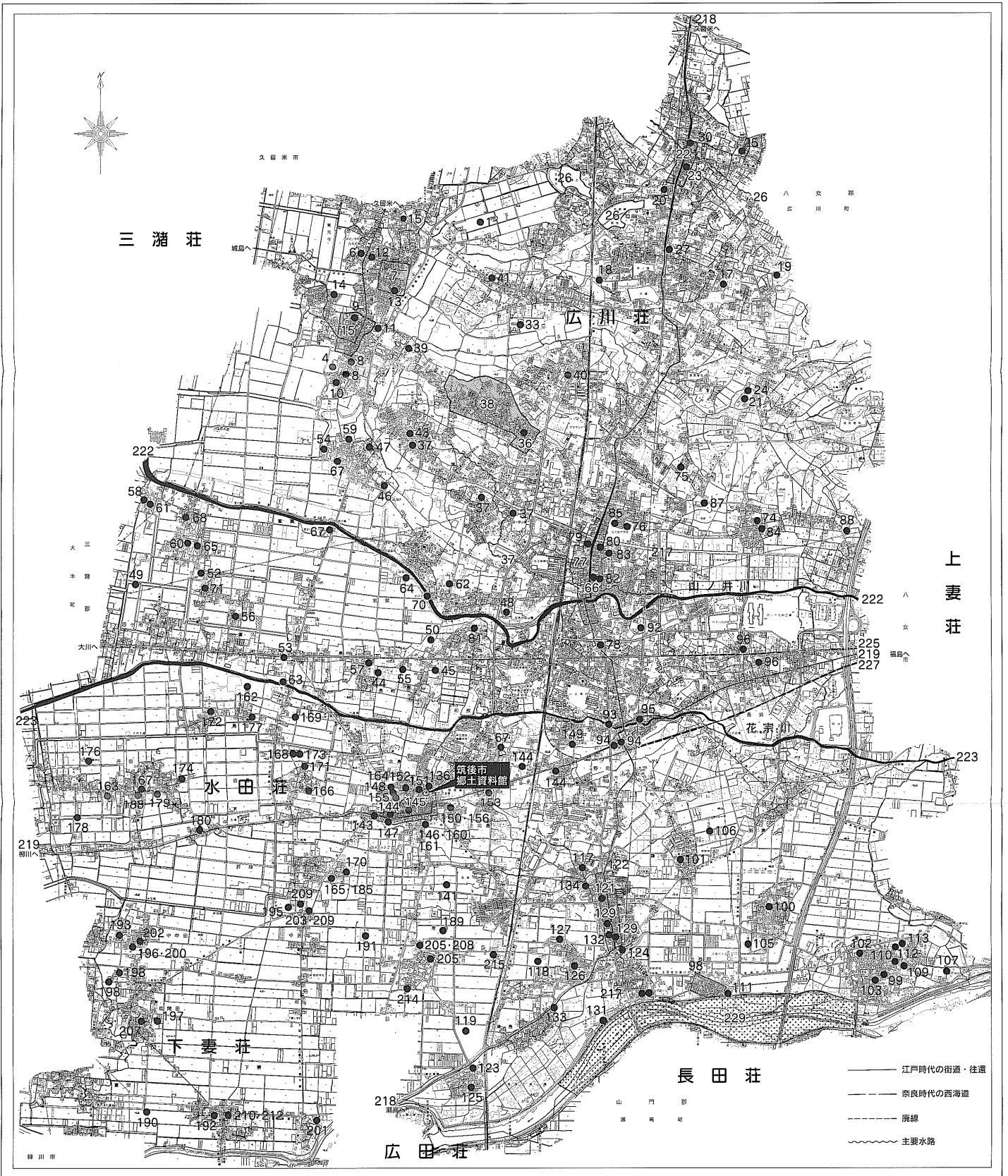


溝口竈門神社の千燈明

2004
筑後市教育委員会

筑後市の文化財マップ

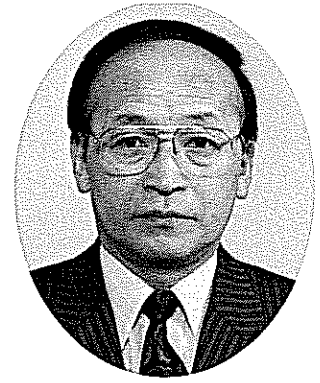
平成25年3月現在



この地図は、平成25年3月現在のもので、2013年9月現在のものであり、変更がある場合があります。

地域の文化財を今一度

振り返ってみませんか？



自然豊かな筑後の地に人々が生活を始めたのは古く、後期旧石器時代・およそ2万年前のことと考えられています。弥生時代に入ると生活の拠点となるムラも営まれ、奈良時代以降は交通の要衝として特色ある発展を遂げてきました。

この恩況あふれる豊かな風土にあって、この地では明治・大正の頃より教育者・近本甲五郎を中心に郷土史への関心が高まり、昭和26年には筑後郷土史研究会が発足いたします。筑後市教育委員会では昭和40年代より郷土史研究会と共に『神社仏閣調査書』や、各校区ごとにまとめられた郷土史に関する冊子を発行し、共に筑後市の歴史と風土に関する基礎調査を行ってきました。それから古いものでは30年以上過ぎ、希少本となったこれらの冊子を気軽に手に取る機会は少なくなったように感じます。また、長い年月の間に保存状況の変化したものもみられ、文化財に関する新たな冊子を望む声も多くなってきました。

この度、筑後市制50周年ということもあり、ここに新たな冊子を刊行する機会に恵まれたことは時宜を得たことであります。今回の冊子は郷土史研究会の故・右田乙次郎氏が編集された以前の刊行物、その他文化財の保護と教育普及に努められた各先生方の刊行物を要約したものとなります。紙面の都合上、残念ながら割愛した部分もありますが、筑後市の文化・風土を代表するものを紹介することができたと考えております。

この本によって、多くの皆様に郷土の歴史を知っていただくと共に、郷土の文化財保護の一助となることを、切に希望いたします。

平成17年3月31日

筑後市教育委員会

教育長

城戸 一男

筑後市の文化財 目次

西牟田

1. 田佛遺跡	2
2. 三瀨荘	2
3. 西牟田氏	2
4. 西牟田城跡	2
5. 西牟田町	2
6. 寛元寺	3
7. 霊鷲寺跡	4
8. 正覚寺跡	4
9. 真光寺	4
10. 流天満神社	4
11. 町三柱神社	5
12. 寛元寺天満神社	5
13. 鷲寺松尾神社	5
14. 久保三島神社	6
15. 田中天満神社	6
16. 六助どん	6

筑後北

17. 前津鯉ノ谷遺跡	8
18. 蔵数長原山遺跡	8
19. 石人山古墳	8
20. 瑞王寺古墳	8
21. 欠塚古墳	9
22. 一条町	9
23. 長照寺	9
24. 欠塚の仏堂	9
25. 一条和泉守墓所	10
26. 千間溝と溜め池群	10
27. 赤坂焼	10
28. 赤坂のハゼ林	11
29. 鶴田陶司	11
30. 原田万吉	11

31. 赤坂の化け猫	12
32. 欠塚の狐	12

松原

33. 蔵数遺跡群	14
34. 蔵数の子持勾玉	14
35. 広川荘	14
36. 坂東寺焼	14
37. 久富用水	14
38. 坂東寺熊野神社	15
39. 宗西寺跡	15
40. 山の地藏さん	15
41. 三光坊(山光坊)墓所	16
42. 熊野観音堂 元亀四年銘板碑	16
43. 久富の盆綱曳き	16

三川

44. 長崎坊田・空山・石塚遺跡	18
45. 長崎遺跡	18
46. 高江遺跡	18
47. 高江窯跡	18
48. 若菜森坊遺跡	18
49. 四ヶ所古四ヶ所遺跡	18
50. 長崎坊田遺跡	19
51. 高家郷	19
52. 富久家屋敷跡	19
53. 二反田長者屋敷跡	19
54. 高江廃寺	19
55. 石塚寺跡	19
56. 最福寺跡	20
57. 安養寺	20
58. 万才薬師堂	20
59. 明八社	21

60. 江口雷神社	21
61. 万才天満神社	21
62. 滑石経	21
63. 田中家古墓群	21
64. 淵ノ上村跡	22
65. 江口組大庄屋 田中家	22
66. 吉武助左衛門	22
67. 益田素平	22
68. 大鶴友吉・田中弥太郎	23
69. 高江の狐	23
70. 夜啼橋	24
71. 仙談塚	24
72. 万才のおこり	24
73. 千畳敷の故事	24

羽 犬 塚

74. 前津遺跡	26
75. 前津中ノ玉遺跡	26
76. 葛野駅家	26
77. 羽犬塚宿	26
78. 藤島の一里塚	28
79. 宗岳寺	28
80. 願長寺	29
81. 了源寺	30
82. 羽犬塚六所神社	30
83. 羽犬塚秋葉神社	31
84. 前津熊野神社 宝篋印塔	31
85. 福岡青年師範学校	31
86. 羽犬の伝承	32
87. ハッサクさん	32
88. 独沈さん	32
89. 中村彦次	33
90. 道手の小太郎	33

91. 和泉山の狐	34
-----------	----

筑 後

92. 山ノ井川口遺跡	36
93. 二本松郷場跡	36
94. 上妻・下妻郡境石	36
95. 二本松白瀧神社	37
96. 平井鋳物師	37
97. 二本松六部碑	38

古 川

98. 長田宿	40
99. 溝口城跡	40
100. 溝口館跡	40
101. 宗清寺	41
102. 光讚寺	41
103. 福王寺	42
104. 妙光寺跡	42
105. 久恵八幡宮	43
106. 鶴田天満神社	43
107. 溝口竈門神社	43
108. 溝口の古文書	44
109. 溝口六地藏	44
110. 桑鶴恵比須像	45
111. 北長田老松神社 庚申塔	45
112. 横枕覚助	45
113. 井上三綱	45
114. 北長田のあやつり人形と紙燈籠	46
115. 長田河原の戦い	46
116. 久恵の河童	46

水 洗

117. 裏山遺跡	48
-----------	----

118. 志遺跡群	48
119. 津島九反坪遺跡	48
120. 広田荘	48
121. 市ノ塚	49
122. 尾島町	49
123. 今寺穀留番所	49
124. 興満寺	50
125. 光明寺	50
126. 志天満神社	52
127. 志冥宿稲荷神社	52
128. 津島東毘沙門神社	52
129. 尾島石造夫婦恵比須坐像	52
130. 夏目漱石句碑	53
131. 尾上柴舟歌碑	53
132. 下川三郎右衛門	53
133. 秋津島浪右衛門	54
134. 酒井義篤	55
135. 船小屋を訪れた文人達	55
136. 近本甲五郎	55
137. 船小屋鉾泉の由来	56
138. 志の由来	56
139. 甕蒙山	56

水 田

140. 平霊石	58
141. 狐塚遺跡	58
142. 水田荘	58
143. 水田城跡	58
144. 水田焼	58
145. 山梶窩	59
146. 来迎寺	60
147. 浄弘寺	61
148. 下北島大日如来堂	61

149. 野町日吉神社境内 社日神祠	61
150. 上北島印鑰社	61
151. 水田天満宮	62
152. 下北島大神宮	64
153. 上北島天満神社	64
154. 野町春日神社	65
155. 水田中町板碑	65
156. 大地の六地藏	65
157. かめかぶり地藏	65
158. 城崎家文書	65
159. 水田和傘	65
160. 水田の勤王志士	65
161. 大鳥居信全墓所	66

古 島

162. 島田彼岸田遺跡	68
163. 下牟田館	68
164. 折地組大庄屋 下川家	68
165. 正観寺	68
166. 常念寺	68
167. 浄光寺跡	69
168. 中島観音堂	69
169. 道島観音堂	69
170. 折地太神宮	69
171. 古島老松神社	69
172. 北牟田玉垂神社	70
173. 中島天満神社	70
174. 井上玉垂神社	70
175. 井田上玉垂命神社	70
176. 井田下御霊神社	70
177. 北牟田六地藏	70
178. 井田下六地藏石塔	71
179. 井上の「ふだらくさん」	71

180. 江崎権之丞	71
181. 大藪三河守基足	71
182. 中島忠蔵	71
183. 吉武友作	71
184. 田中静次郎	72
185. 坂本友蔵	72
186. 下川秀樹	72
187. 古島の河童	72
188. 井田の荒五郎	72

下 妻

189. 常用遺跡	74
190. 富安遺跡	74
191. 梅島遺跡	74
192. 下妻郡	74
193. 中牟田館跡	74
194. 下妻荘	75
195. 中折地内栗遺跡	75
196. 中牟田城跡	75
197. 吉田大膳城跡	75
198. 井口紀伊守墓所	75
199. 富安下番所跡	76
200. 中牟田天満神社	76
201. しめの神	76
202. 西光寺	76
203. 地光寺	76
204. 川口薬師堂	77
205. 発勝寺跡	77
206. 了国寺跡	77
207. 馬間田永禄十二年銘板碑	77
208. 大正院	77
209. 中折地組大庄屋 太田黒家	78
210. 水田謙次	78

211. 古賀簡二	78
212. 水田寛作	79
213. 與田準一と『赤い鳥』	79
214. モヘジ観音	79
215. やんぼっさん	80
216. 水天宮の鏡	80

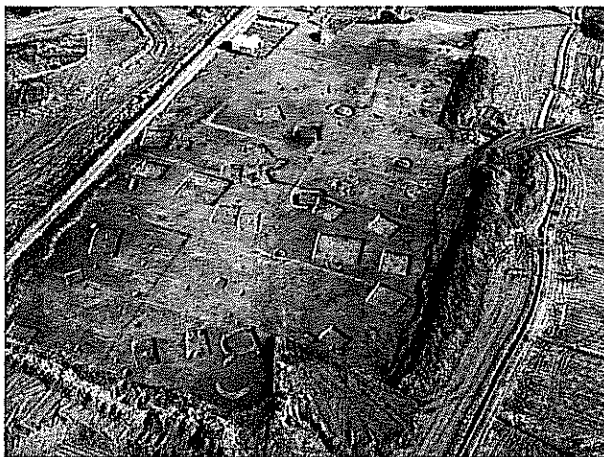
広 域

217. 西海道跡	82
218. 薩摩街道	82
219. 福島往還	82
220. 柳河田中藩	82
221. 久留米有馬藩	83
222. 山ノ井堤	83
223. 花宗川	83
224. 久留米かすり	84
225. 南筑軌道	84
226. 三潁軌道	84
227. 国鉄矢部線	85
228. カササギ	85
229. 船小屋のゲンジボタル	85
230. よど	86

にしむた
西牟田

(1) 田佛遺跡

昭和62年(1987)調査。弥生時代後期～古墳時代初頭(約1900～1700年前)にかけての村の遺跡で、住居跡・周溝状遺構・落とし穴などが見つかっています。



田佛遺跡全景

(2) 三瀧荘

かつての三瀧郡一帯にあった大荘園で、領主は宝荘厳院。「源平争乱」の際は高い生産力と平家との親密な関係から、一時鎌倉幕府の介入を受けました。後に西牟田氏・荒木氏・横溝氏などが地頭職として下向、「元寇」の際は御家人への恩賞地とされ、その後豊後大友氏が横領、戦国時代には消滅してしまいました。

(3) 西牟田氏

西牟田氏の初代藤原家綱は、鎌倉時代三瀧郡西牟田郷の地頭として伊豆三島(静岡県)より下向してきた御家人で、以後領地の西牟田を名乗り勢力を広げました。「元寇」の時は家永が「防塁」建築に従い、「弘安の役」(1281)で肥前鷹島(長崎県)で武功を挙げたと言います。戦国時代には「筑後15将」のひとつとなり

ますが、筑後国は周辺勢力が激くぶつかる争乱の地となり、西牟田氏もその流れに呑まれていきます。最後の領主・家親は肥前龍造寺氏の配下となり、天正14年(1586)薩摩島津氏に敗北、豊臣秀吉の「九州仕置」で領地を没収されます。その後西牟田氏は肥前蓮池に移り、龍造寺氏、つづいて鍋島氏に仕えました。

(4) 西牟田城跡

流区に所在したという水城で、西牟田氏の居城。規模は不明ですが、度々激しい攻防戦がありました。後に西牟田氏は豊後大友氏に攻められ、居城を生津城、城島城(久留米市)と移します。



流 西牟田城跡(推定地)

この他西牟田氏に関する城館跡としては、弥吉上紘入道館(流)、西牟田館(現真光寺、以上筑后市)、西牟田本村館跡(西牟田氏の居館)、西古賀館(以上久留米市)、福岡館、笹淵館、横溝館、蛭池館(以上大木町)などが伝えられています。

(5) 西牟田町

町区を中心とした一帯で、西牟田氏の城下町として栄えますが、戦国時代末の

争乱で荒廃してしまいます。
西牟田町の再興に力を注いだのは久留米二代藩主有馬忠頼で、産業育成のための優遇政策を行いました。結果、西牟田町は手工業の盛んな町として再生し、現在に至っています。



西牟田町

(6) 寛元寺

寛元元年(1243)、西牟田家綱(行西)により建立され、「靈鷲寺」・「正覚寺」と共に「西牟田三ヶ寺」として信仰を集めて来ました。歴史ある寺院に相応しく、多くの文化財が伝わっています。

本堂の天井には市内唯一の天井絵である墨絵の雲龍が描かれています。これは、狩野左京之進によるものです。左京之進



寛元寺 本堂

は幕末期、久留米藩の御用絵師・三谷家の三男に生まれ、慶応年間には真木直人(外記)らと勤王活動に活躍しています。

観音堂の「乳婦観音」は元は鷲寺区にあった松源寺の本尊で、明治の頃ここに移されました。この観音には母乳の出の悪い婦人が祈願すれば祈りが通じるといわれ、厚い信仰を受けていました。ところがある時火災にあい、観音像は焼けこげてしまいましたが、かろうじてその姿を留めていたといわれています。



寛元寺 乳婦観音像

「寛元寺文書」は中世文書で、22通が県の有形文化財(書籍)となっています。境内にある変わった形の二基の宝篋印塔は、「西牟田弥次郎家綱夫妻墓所」で、永



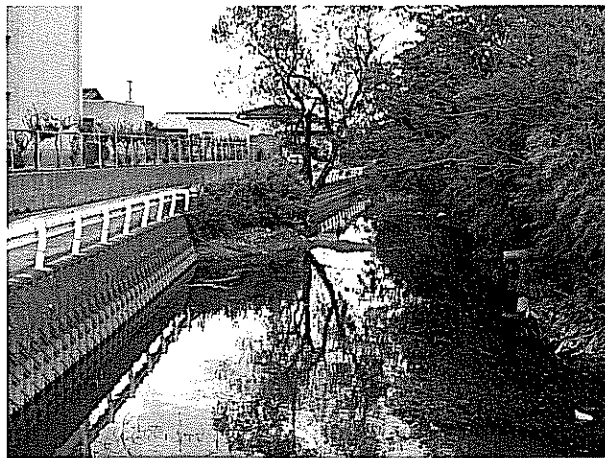
寛元寺 西牟田弥次郎家綱夫妻・西以三墓所

正9年(1512)、二人の供養の為に新たに作られたものです。

隣には「西以三」(?~1698)の墓所があります。彼は医師で西牟田(久留米市)に住み、馬間田以三とも名乗りました。彼は文学・史籍にも通じ、天和2年(1682)に書き上げた大作『筑後地鑑』は筑後国全域を扱った地誌であります。

(7) 霊鷲寺跡

鷲寺区にあった大寺院で、乾元元年(1302)、西牟田永家によって建立されました。後二条天皇より勅額を、後土御門・後柏原・後奈良天皇からは綸旨を賜るなど格式高い寺院でしたが、延宝8年(1680)、「松崎藩」の成立時に松崎(小郡市)へ移転しました。現在は掘割が当時を伝えるのみとなっています。



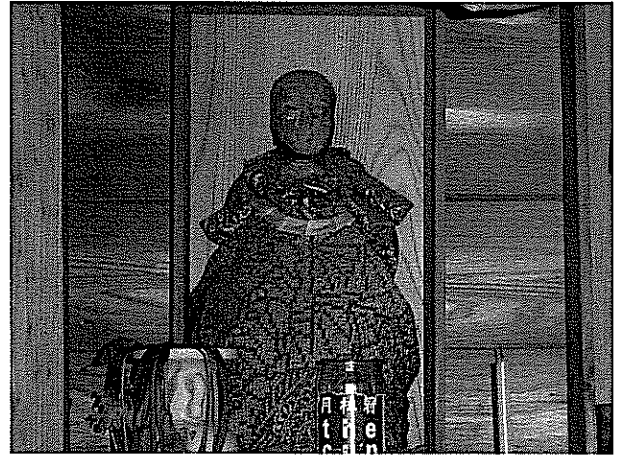
霊鷲寺跡 (掘割)

(8) 正覚寺跡

流区にあったという寺院で、西牟田家綱夫人の菩提所として建立、地藏菩薩像を本尊としました。

この像は「水引地蔵」と呼ばれ、天正(1573~75)の頃、日照りに苦しむ寺の和尚のため、一晩で田んぼに水を引いて

きたという伝承を持ち、今は流区の仏堂に祭られています。正覚寺は延宝8年(1680)の文書を最後に、歴史から姿を消しています。



流 水引地蔵

(9) 真光寺

町区にある寺院で、寺となる前は西牟田氏の家老長松右京の「西牟田館」であったといひます。天正15年(1587)、西牟田氏の流れをくむ宗円が生津村(久留米市)の円教坊(今の長専寺)からこの地に移り住んだのが始まりといひます。



真光寺 (西牟田館跡)

(10) 流天満神社

流区の氏神で、寛元元年(1243)西牟

田家綱た いえつなによって勧請かんじょうされ、以来西牟田郷いらいにしむたごうの総天神そうてんじんとされてきました。神社の片隅かたすみに建つ「永祿元年銘板碑」は、傷みが進み銘文が読めなくなっていますが、上段に阿弥陀三尊種子あみださんぞんし、下段に「永祿元年」(1558)の年号と「藤原」の銘がありました。西牟田氏は藤原氏の末流であり、この板碑は西牟田氏ゆかりの人物の供養塔ではないかと推定されています。



流天満神社 永祿元年銘板碑

(11) 町三柱神社

町区まちの氏神うじがみで、大正13年(1924)、本町ほんまち(久留米市三潞町西牟田本町)の三島神社さんしまじんしゃの分霊ぶんれいを受け、地域の秋葉神社あきばと毘沙門天びしゃもんてんを合わせて祭っています。

かつては春の大祭として、本町の三島



町三柱神社

神社との間で「西牟田の稚児浮立」(御神幸祭)が行われていました。浮立は神前で行う「おがみうち」、決められたところで行う「本浮立」、道を行進しながら行う「道浮立」の三種からなっていました。

(12) 寛元寺天満神社

寛元寺区かんげんじの氏神うじがみで、「寛元寺」の鎮守ちんじゆに西牟田家綱た いえつなによって勧請されたといえます。祭神は菅原道真ですが、7月15日には祇園祭り(素盞鳴尊を祭る行事)も行われています。



寛元寺天満神社

(13) 鷲寺松尾神社

鷲寺区わしでらの氏神うじがみで祭神は八色玉依姫はっしきたまよりひめ。西牟田永家が「靈鷲寺」を建立した際、鎮



鷲寺松尾神社 石造物群

守として勸請したといい、その関係からか境内には「靈鷲寺」ゆかりと伝えられる石造物が多く集められています。

社殿北側にある板碑群は永正十五年(1518)銘・元亀四年(1573)銘・六地藏石幢の3つから成り、いずれも戦国時代のもの、西牟田氏との関連が考えられています。

「六地藏石幢」は「靈鷲寺」の跡地にあったもので、笠だけが残され、15・6世紀のものと考えられます。これは市内に多い肥前型六地藏と違い、肥後系の特色を持っています。肥後系六地藏は他には八女郡内に1・2例ほどが知られるのみで、残りは悪いものの、貴重な資料といえます。

(14) 久保三島神社

祭神は大山積命。西牟田家綱の家臣久保殿がこの地に勸請したと伝えられます。三島神社は西牟田家綱が伊豆にいた頃から信仰していた神様で、西牟田氏が活躍した地域によく見られます。



久保三島神社

(15) 田中天満神社

祭神は菅原道真と素盞鳴尊。西牟田家

綱入部の際、家臣高橋次郎が屋敷に祭つたのが始まりといえます。この神社は願いごとが叶わないことがないといわれ、信仰を集めたことが、江戸時代の学者・西以三の書いた板書に記されています。この板書は現在田中区の人達によって大切に保管されています。

(16) 六助どん

昔、六助どんという臆病者が西牟田にいました。夏の暑い夜、草むらの中から「六助どんなポンポコかい」という声が聞こえてきました。辺りを見回しても誰もいません。それから毎晩同じ声がするようになり、六助どんは布団をかぶって夜どおし震えていました。

ある日、六助どんは友だちに相談し、みんなに家に泊まってもらうことにしました。すると「六助どんなポンポコかい」と声がします。みんなが外を見ても誰もいません。家に入ると声がする、外を見ても誰もいない、そんなことが繰り返され、そのうちみんなあきらめて酒を飲み始めました。するとまたあの声がします。酒の入った若者たちは「聞こえん、聞こえん、チンチカチン」と皿や茶碗をたたきながら言い返しました。「六助どんなポンポコかい」、「聞こえん、聞こえん、チンチカチン」。一晩中こんなやりとりが繰り返され、明け方になると外が静かになりました。若者たちが外に出ると、そこには腹を叩き過ぎた大きなタヌキが倒れていたということです。

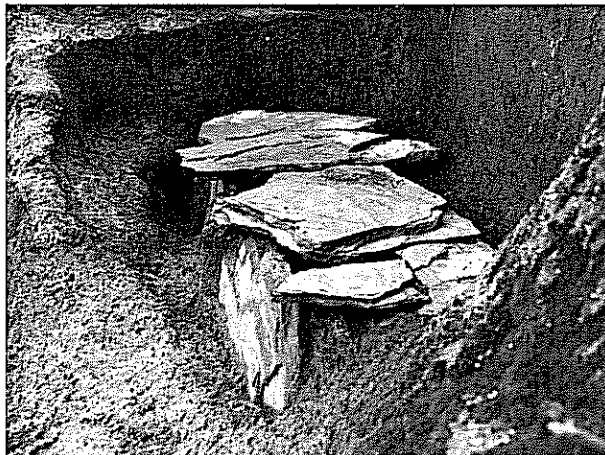
ちくごきた
筑後北

(17) 前津鯉ノ谷遺跡

筑後市北部にある縄文時代早期（約8,000年前）の遺跡です。本格調査は行われていませんが、この頃筑後市域に広範に人が生活していたことを示す遺跡として貴重です。

(18) 蔵数長原山遺跡

弥生時代の墓地で昭和51年（1976）道路改良工事の際に甕棺が、平成4年（1992）には農作業中に箱式石棺が見つかっています。



蔵数長原山遺跡 箱式石棺

(19) 石人山古墳

広川町から筑後市にかけて所在する大型の前方後円墳で、国の指定史跡。採集された埴輪などから5世紀中ごろと考えられ、「磐井の乱」を起こした筑紫君磐井の祖父にあたる人物が葬られたと考えられています。石室には線刻で飾られた家型石棺があり、その前に被葬者を守るかのように石人が置かれています。これは「石人堂」と呼ばれ、「悪いところを叩くとそこが治る」というまじないが広まったため、大きく崩れてしまっています。耳納山系から西へと延びる八女丘陵上

には筑紫君により「岩戸山古墳」などの大型前方後円墳や円墳・装飾古墳などが作られ、「筑紫君の奥津城」と呼ばれています。市域では「石人山古墳」や「欠塚古墳」が筑紫君系の墳墓と考えられます。

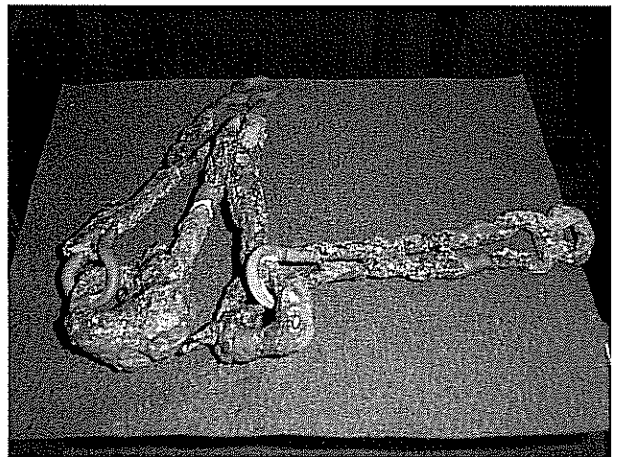


石人山古墳 石人

(20) 瑞王寺古墳

昭和59年（1984）調査。小型の円墳で、ここからは珠文鏡・鉄製馬具・鳥型埴輪や人物埴輪などが出土しました。

この古墳は5世紀中ごろに作られ、「石人山古墳」より新しいと考えられています。位置的には古代豪族筑紫君と水沼君の勢力圏の中間にあり、出土馬具もあまり見られない百濟製であるなど多くの謎を持ちます。古墳は現在消滅しています。



瑞王寺古墳 出土馬具

(21) 欠塚古墳

筑後市を見下ろす丘陵上に位置する前方後円墳です。平成元年（1989）調査。以前から土取りや石抜きなどに会い、大きく崩れてはいましたが、竪穴系横口式石室を持つなどの特徴が分かりました。

この古墳は遺物から5世紀後半のものと考えられます。この頃は筑紫君は浮羽の的臣に対抗するため、久留米市域に拠点を移していたと考えられています。そのため欠塚古墳の被葬者は、当時八女地方を守っていた一族の一人ではないかと考えられています。



欠塚古墳

(22) 一条町

薩摩街道の街道筋にある、江戸時代の元禄二年（1689）頃に開かれた在郷町です。当初は「盛徳町」といい、町の範囲は今の盛徳とほぼ同じ。周囲を堀や土居に囲まれ、さらに竹や杉が植えられていたといえます。町の中を通る街道は出入り口に構え口（門）が作られ、南北に榎形と呼ばれるカギ状の曲がり道がありました。一条町は久留米御井町への南北交通のほか、八女から久留米大善寺町の川港をつなぐ東西交通においても重要な

場所であり、賑わいを見せていました。



一条町

(23) 長照寺

一条町の中に所在します。開基した時期は分かりませんが、戦国時代にはその名が見られます。しかし、豊臣秀吉の九州仕置の後に上妻郡（今の八女郡の大部分）を領したキリシタン大名毛利秀包の弾圧を受け、廃寺となってしまいました。その後文政6年（1823）に再興を遂げ、今に至っています。



長照寺

(24) 欠塚の仏堂

かつては欠塚集落の南側にあり、十三仏（初七日から三十三回忌まで行われる

仏事を見守る仏。室町時代に成立した信仰) やその他石仏石神を祭ったお堂です。この付近にはかつて朱塗りの箱式石棺が複数あったといいますが、現在その所在は分からなくなっています。

仏堂自体は「欠塚古墳」の脇に移され、今も大事にされています。

(25) 一条和泉守墓所

一条和泉守は戦国時代の人で、筑後15将の一つ、山下城(立花町)上蒲池氏に仕え、この辺りを領有しました。彼は智徳城(広川町下広川小学校そばの小山)に入り、龍造寺氏に備えましたが、天正7年(1579)城は落ち、和泉守は天正13年(1585)の戦いで戦死したといえます。



一条和泉守墓所

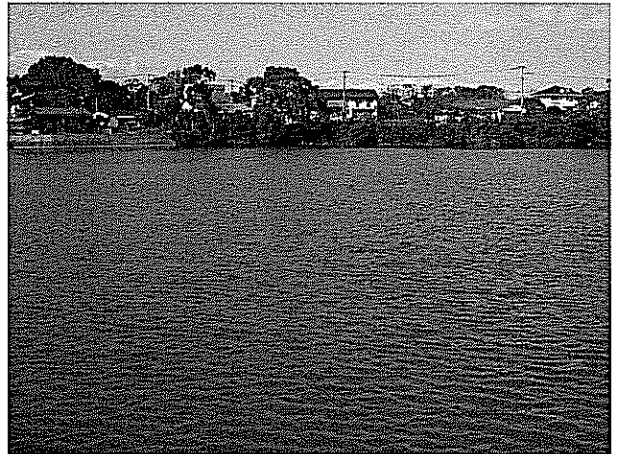
(26) 千間溝と溜め池群

筑後地方は水稲耕作が盛んですが、西牟田郷は常に水不足に悩んでいました。元禄年間(1688~1704)、西牟田の平田半兵衛はこれを解消すべく、広川町五ノ家から水を引くことを計画します。久留米藩は当初、この計画が難工事であるため反対しますが、半兵衛の死をも覚悟した決意に動かされ、これを許可しました。

こうして完成した水路は、「千間溝」と呼ばれました。

「千間溝」の完成後も、水を確保するため多くの溜め池が作られます。このとき「千間溝」には溜め池に水を供給するという新たな役割が与えられ、松尾溜池(井原堤)、天堤、宗津(銭亀)溜池へと連なる大灌漑施設が完成しました。

今でも「千間溝」と溜め池群は重要な水源として西牟田・蔵敷の水田を潤しています。



天堤

(27) 赤坂焼

江戸時代から昭和にかけて、赤坂の国道沿いに陶器を焼いた窯がありました。最初に窯を開いたのは水田村出身の次郎吉で、文化13年(1816)陶器を作る粘土を求め、この地に移り住んだのが始まりといわれています。窯はその後三原富次・緒方家と続けられ、天保年間(1832~36)には第9代久留米藩主有馬頼徳の御庭焼・柳原焼の焼成を行いました。その作風はシソ釉の地に他の釉薬を掛け流し、「赤岡」「赤坂」の銘を持ちます。肥後小代焼は「赤坂焼」の工人が始めたといえます。残念ながら現在は生産されてお

らず、^{かま}窯も残されていません。また^{みはら}三原^{あか}富次が窯を開いた場所には「赤坂神社
(別^{たなはた}名七夕神社)」が建てられ、^{おきつひこ}置津彦
命・^{おきつひめのみこと}置津姫命と共に^{やきもの}焼物の神・^{はにおやのかみ}土祖神が
祭られています。

「^{あか}赤坂^{やき}焼」で作られた^{すや}素焼きの^{つちにんぎょう}土人形
を、「^{あか}赤坂^{にんぎょう}人形」、別^{べつめい}名「ててっぼっぼ
(^ふ不器用・^ふ不細工の意)」といいます。筑
後市の「^{みずたにんぎょう}水田人形」を参考^{さんこう}に始められ、
粘土^{かたねん}を型にとり^{こふん}焼上げた後、^{しよく}呉粉や食
用色素^{ようしきそ}で彩色^{さいしよく}を施したもので、^{こまいぬ}狛犬やハ
ト、^{たいくさま}大黒様など数十種類^{とく}があります。特
に^{つちぶえ}土笛は^{そぼく}素朴な音で、昔は^{した}子供達に親し
まれていました。「^{あか}赤坂^{にんぎょう}人形」は現在も国
道沿いの一軒^{みんげいがんぐ}が今に伝えており、筑後を
代表する^{みんげいがんぐ}民芸玩具^ぐとなっています。



赤坂人形

(28) ^{あか}赤坂の^{ばやし}ハゼ林

江戸時代後期、^{かくち}日本各地で多くの^{とくさん}特産
物が^{ぶつ}生み出されました。久留米藩では和
ロウソクの生産^{すず}が^{すず}勧められ、各地^{げんりょう}に原料
となる^うハゼが^う植えられていきました。現
在は和^{せいさん}ロウソクの^{げんしよく}生産も減少し、^うハゼ林
も見られなくなりました。赤坂の^{あか}ハゼ林
は江戸時代の^{さんぎょうし}産業史^{かた}を語る、^{しょう}数少ない証
人^{にん}となっています。



赤坂のハゼ林

(29) ^{つる}鶴田^{どうじ}陶司

鶴田陶司(1840~1864)は^{はんい}藩医の子
として^く久留米^め城下に生まれ、^{みちのり}道徳とも^{たか}孝
良とも^{よし}名乗りました。若くして家^つを継ぎ、
性格は^{やさ}優しく^{まさしつ}気質は^{せつど}節度を持ち、^{せいせきゆう}成績優
秀^{しゆう}でその^{さいのう}才能^{みと}を認められていました。

彼は^{そん}尊王の志^{のう}を持ち、^{ごんしん}水田に^{ごんしん}謹慎して
いた^{まさ}真木保臣^{やすおみ}に^し師事^ししました。^{ぶんきゆう}文久2年
(1862)、^{だつしゆつ}保臣の^{だつしゆつ}水田脱出の時、^{ほか}彼は他の
同志と共に^{だつばん}脱藩、^{きやうとふし}京都伏見の^{てら}寺田屋^だで保
臣らと^{こうりゆう}合流し、「^{てら}寺田屋の変」に^{へん}遭遇、
幽囚^{ゆうしゆう}となって^く久留米に送られました。そ
の後^{ゆる}許され、^く久留米^め藩親兵隊の一人とし
て^{ふた}再び^{ぶんきゆう}上京します。文久3年(1863)京
都を^{だつ}脱し、^{なか}中山忠光^{なかつきやう}卿を^{かつ}担いで^{やまと}大和
(^{なら}奈良県)に^{きよへい}拳兵^{やまと}します(大和義拳・
てんちゆうぐみらん やぶ ばくふ とら
天誅組の乱)。しかし^い破れて^い幕府側^いに捕わ
れ、翌年(1864) ^{めいじ}処刑^{ついで}されました。

明治35年(1902)、^{ついで}追贈^{ついで}され^{ついで}従五位。
墓は^{はか}京都^{きやう}霊山^{りやう}清閑寺に、^{つる}鶴田家の^{いはい}位牌は
^い一条の^い長照寺^いにあります。

(30) ^{はら}原田^{まんきち}万吉

一条町^{いちじょうまち}の北側^{すいいち}に、「日本^{とくしよく}随一の特色ある
学術^{がくじゆつしよく}植物園^{ぶつえん}」と^{しょう}称された「^{はら}原田^だ植物園」
がありました。ここを^{はら}開いた^だ原田^{まんきち}万吉

(1871~1943)は、若い時から各地の山野に赴き標本を採集、50年にわたり研究を進め、九州博物学会長としても活動をされました。氏はダリヤやツツジの他、当時の日本各地の植物を園に集め、資料もカニ200・貝類6,000・蝶や昆虫2,000、世界各地の化石標本10,000点以上と総数30,000点といわれます。氏は72才で亡くなりますが、その研究成果を出版したいという意志をもっており、最後まで博物学への情熱をいっていました。氏の蒐集した標本は、昭和19年、大分県日田市に乞われて移されました。

(31) 赤坂の化け猫

慶応年間(1865~66)、赤坂で身寄りのない老女が身の周りの世話をする娘と暮らしていました。娘は大の猫好きで一匹の猫を飼っていましたが、老女は大の猫嫌いで、いつも猫をいじめていました。ある日、地蔵さんに供える水を猫が飲んだのを見て、老女は猫を捕まえ台所で燃やしていた木を猫の後ろ足に押し付けました。猫は悲鳴をあげ逃げますが、運悪く裏の井戸に落ち死んでしまいました。

その夜、物音で目のさめた老女が台所に行くと、台所の品々が老女に向かって近寄って来ました。それから毎晩台所の品々が音を立て、雑巾が老女の寝ている顔を撫でるようになり、老女はついに寝込んでしまいました。

この話を伝え聞いた藩主は「いたずらを止めよ、さもないと動物はすべて殺すぞ」とお触れを出しましたが、騒ぎはおさまりません。そこで村をあげての獣狩りが行われ、多くの動物が捕らえられました。最後に近くの山の上で、化け物の

正体と思われる大きな猫が射止められました。その後、化け猫騒動は収まり、村に平和な日々が戻って来ました。

(32) 欠塚の狐

昔、欠塚には「お梅さん」という女狐がおり、よく人をばかしていました。

ある夜、村人がソバ畑の小道を通っていると「そんな川の中で何をしているのですか？」と、美しい娘の声がありました。そんな馬鹿なと思って見ると、膝から下は水の中。村人はあわてて這い上がり、濡れた着物をかたくしぼり尻からげして、川をそろそろと渡り始めました。実は村人はお梅さんにばかされており、他の者が教えるまでソバ畑をうろうろしていただけでした。

ある時、大工の徳さんというものが、お梅さんを懲らしめてやろうと思い、夜畑の中に立っていました。すると案の定、向こうの方から美しい娘がやってきます。徳さんは娘を誘い、村の若者達と羽犬塚一番の料理屋に上がり、ドンチャン騒ぎを始めました。すっかりお酒に酔って眠ってしまった娘を布団に寝かせると、徳さん達はそっと店を出ていきました。

翌朝目を覚ました娘は、店の者に代金を請求され、うろたえてしまいました。そのはずみで狐の姿に戻ってしまったお梅さんは、店の番頭さんに捕まり、散々な目に遇いました。

それからお梅さんは、人をばかすのはこりごりだとすっかり改心したということです。

まつ
松

ばら
原

くらかずいせきぐん
(33) 蔵数遺跡群

八女丘陵から派生した微高地に広がる弥生時代後期(1900~1700年前)の遺跡です。南斜面の筑後北中学校からは集落(蔵数森ノ木遺跡、1988年調査)、東部は墓域(蔵数東野屋敷遺跡、1985・1995年調査)が見つかっています。



蔵数森ノ木遺跡

くらかず こもちまがたま
(34) 蔵数の子持勾玉

昭和35年(1960)、県道工事の際に見つかりました。子持勾玉は基本的に祭祀に使われたと考えられます。筑後地方では小郡市下岩田、久留米市小森野、八女市祈寿院、浮羽郡での出土が知られますが、大変珍しいものです。

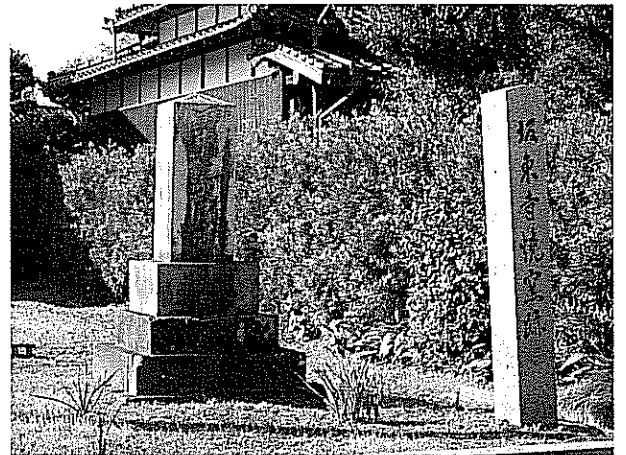
ひろかわのしょう
(35) 広川荘

筑後市北部を含む荘園で、紀伊(和歌山県)熊野山の所領でした。広川荘は坂東寺熊野神社を中心に栄えますが、中世の戦乱で豊後(大分県)大友氏などの横領により崩壊してしまいました。

ばんどうじやき
(36) 坂東寺焼

柳川の蒲池焼の流れをくむ窯です。窯

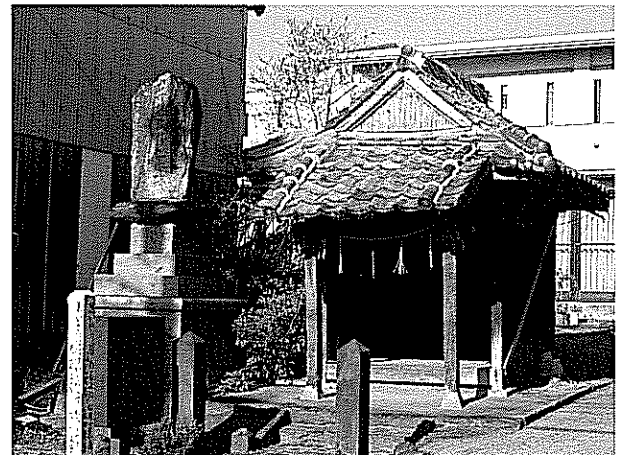
元の田中家は初代久留米藩主有馬豊氏より藩内の焼物の支配権を有する総焼物司に任じられました。その作風は蒲池焼に似て、素焼きのカワラケや半田土鍋・風炉・火鉢などを得意としました。現在は途絶え、記念碑が建てられています。



坂東寺焼記念碑

ひさどみようすい
(37) 久富用水

江戸時代、久富は水の便が悪く、小さな溜め池に頼る状況でした。これに立ち上がったのが中島安平です。彼は地形を調べ、徳久に井堰を設け水を引くことを計画、藩へ工事の許可を求め、3度目の申し出で許可を得ました。事業は完成までに30年もかかり、村では工事から離れる者も出て来ました。安平は私財をなげ



久富 用水神社

うって人を雇い、これを完成させました。安平はこの他に「四十八堀」という溜め池を作り、その一部がまだ残っています。

安平は80余歳で亡くなり、久富の共同墓地に葬られました。また村では「用水神社」を建て、彼の遺徳を讃えています。

(38) 坂東寺熊野神社

坂東寺は延暦年間(782)、伝教大師・最澄の開基という伝説を持ち、本尊は薬師如来。熊野神社は保延4年(1138)紀伊(和歌山県)より勧請されました。これは地方へ分霊された最初のものと言われている。両者は広川荘の中心として栄え、後に熊野神社は坂東寺の鎮守社となります。明治の神仏分離により坂東寺はいったんは廃寺となりますが、それ以前の両者に境を引くことは不可能で、その敷地は熊野集落の大半になります。

寺の境内にある「石造五重塔」は貞永元年(1232)とあり、筑後地方最古の紀年銘を持つものです。初段に四方仏、各層に梵字を刻み、密教の教えを表します。また、神社参道の池にかかる石造「眼鏡橋」は元禄10年(1697)、肥前石工により造らた県下で2番目に古いものです。

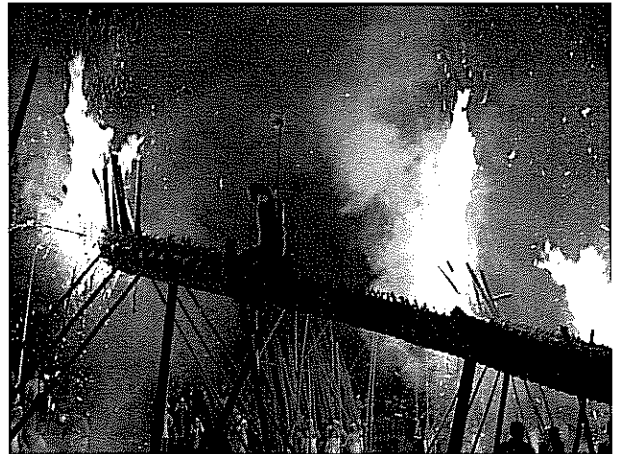
共に福岡県指定有形文化財。



坂東寺 本堂 (旧薬師堂)

神社東側の五重塔の傍に「六地藏石幢」があります。仏龕式の六地藏像で、大型の宝珠を載せた、波形の流れを持つ勾配の大きな屋根を持ちます。これは筑後型と呼べるもので、明和元年(1764)の銘をもち、この形式では古いものです。

熊野神社で1月5日の夜行われている「鬼の修正会」(別名鬼夜祭)は福岡県指定無形民俗文化財となっています。神事は子供による「小松明」、鬼の面を付けた宮司を追い立てる「鬼追い」、さらしと禪姿の氏子により行われる「大松明」の3つにより構成され、うち「鬼追い」は熊野地区の氏子のみで行われる非公開の神事です。



熊野神社 鬼の修正会

(39) 宗西寺跡

宗西寺は坂東寺熊野神社の主要な5つの末寺のひとつで、元藏数の辺りにあったと伝えられています。現在は小さなお堂があり、「元藏数の観音堂」として信仰を集めています。

(40) 山の地藏さん

熊野琴平神社の北東にある小さな御堂で御神体は石碑。これはこの辺りを治め

りょうしゅ にほんまつどの はか
 た領主「二本松殿」の墓と伝えられます。
 えきびょう
 昔この辺りに集落がありました。疫病
 は や
 が流行ったために移住したといひ、移住
 先の地名がかつての領主の名をとって
 「二本松」となつたと伝えられています。



山の地蔵さん (山地蔵堂)

さんこうぼう さんこうぼう ぼしよ
 (41) 三光坊 (山光坊) 墓所

中世の無縫塔で、三光坊という僧侶の
 はか
 墓といわれています。彼は坂東寺熊野
 じんじゃ まつじ こうじゆぼう いんきよ
 神社の末寺光聚坊を隠居後、ここに隠居
 寺を作り多くの僧兵を集めました。肥
 ぜんりゅうぞうじ せ ぼろ
 前龍造寺氏に攻め滅ぼされてといひます。

かつては古井戸や寺屋敷の跡もあつた
 といひ、三光坊の人魂が出るといひて新
 ぶん しょうかい
 聞に紹介されたこともあります。



三光坊墓所

くまの かのんどう げんき よねんめいたび
 (42) 熊野観音堂 元龜四年銘板碑

熊野観音堂の前にある板碑で、胎蔵界
 たいざうかい
 大日如来の梵字を刻んだものです。銘文
 だい にちによらい ほんじ きぎ
 から元龜4年 (1573) に造られた逆修塔
 ぎやくしゆとう
 (生前の供養塔) と分かります。

ひさどみ ほんつな ひ
 (43) 久富の盆綱曳き

8月14日の盂蘭盆に行われる施餓鬼行
 うらぼん せ が き
 事です。この日は地区の子供達が身体を
 からだ
 すす
 煤で黒くして地獄の釜番の鬼に扮し、綱
 じごく かまばん おに ふん つな
 を引き回し地獄の亡者を引き上げるもの
 ひ もつじや
 で、最後は地区の天神堂で足を踏みなら
 てんじんどう
 して終わる、他の地域にはない、特色あ
 ちいさ
 るお祭です。

祭の由来は、地区の徳随寺 (1532開基)
 とくずいじ かいき
 かんえい ほんどうこんりゅう さい
 で寛永3年 (1626) の本堂建立の際、仏
 こじ なら もんとしゅう ほんつな ひ
 教の故事に倣って門徒衆で盆綱曳きを始
 かんえい だいきょうさく な
 めたとも、寛永18・19年の大凶作で亡く
 れい なぐさ かんえい
 なつた子供達の霊を慰めるために寛永20
 年から始まつたとも言われています。ま
 たりゅう
 た、民俗学からは綱＝龍をいじめ、天
 じん かなり おこ らい う
 神＝雷を怒らせることで雷雨を呼ぶ、
 あまご
 雨乞いの祭りではないかとも言われてい
 ます。

福岡県指定無形民俗文化財。



久富の盆綱曳き

ふた
二

かわ
川

ながさきぼうた そらやま いしづかいせき
(44) 長崎坊田・空山・石塚遺跡

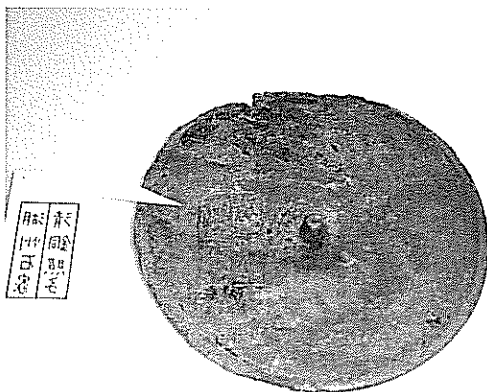
長崎にある縄文時代の遺跡です。戦後すぐの開発で破壊を受けています。平成3年(1996)長崎坊田遺跡の調査では縄文時代前期(約6,000年前)の曾畑式、野口式土器の小片が出土し、この遺跡を推察する資料となっています。

ながさきいせき
(45) 長崎遺跡

長崎集落に所在する弥生時代の遺跡です。石鍬や土器が採集され、一部は筑後郷土資料館に収められています。

たかえいせき
(46) 高江遺跡

高江の東に広がる弥生時代を中心とした遺跡で、昭和32年(1957)箱式石棺7、粘土槨2基が見つっています。この他にも墳墓や住居跡があったといいますが、詳しい記録は残っていません。また平成2年(1990)には、中世の墓が見つかり、銅製湖州鏡が出土しました。



高江遺跡出土 湖州鏡

たかえかまあと
(47) 高江窯跡

高江集落の北側に位置し、昭和31年に調査されました。平安中期と言われます

が、詳しい記録は残っていません。

わかなもりぼういせき
(48) 若菜森坊遺跡

8~9世紀を中心とした大集落遺跡で、平成3~4年(1992~1993)ザンクス筑後の建設に伴い調査されました。竪穴式住居が隙間なく見つかり、出土品の中には当時の高級官僚が着用する石帯(ベルトの飾り)が出土するなど、当時の一般集落に見られない特徴を持っています。この一帯では古くから遺跡の存在が知られており、石組炉や甑(蒸し器)・巴形銅器が出土したと言われています。

学界には、下妻郡(筑后市西南部~柳川市東部)の郡衙(役所)がこの地にあったという説もあり、市内で注目されている遺跡のひとつであります。



若菜森坊遺跡

しかしよこしかしよいせき
(49) 四ヶ所古四ヶ所遺跡

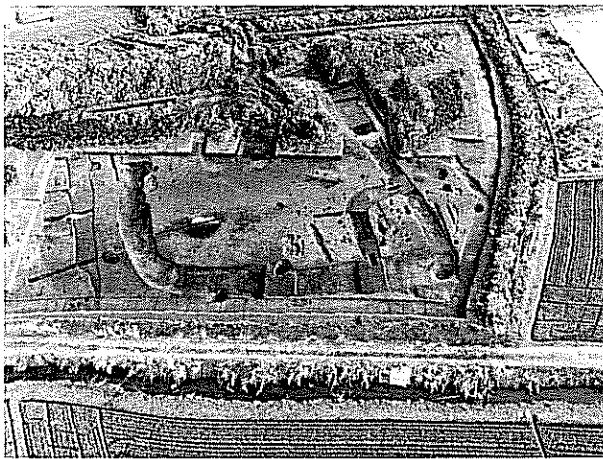
平成4年(1992)調査。鎌倉時代の集落跡と江戸時代のクリーク跡からなる複合遺跡です。四ヶ所集落は時代によって移動していると考えられ、近くの四ヶ所遺跡と共にその移り変わりを知る上で貴重な資料となっています。



四ヶ所古四ヶ所遺跡 出土漆器

ながさきぼうたいせき
(50) 長崎坊田遺跡

平成3年(1996)調査。中世後半の居館跡と考えられています。この辺りは中世広川荘と水田荘の境界にあたり、両荘はしばしば境界争いを起した事が知られています。この居館は当時武士(あるいは僧兵)が相手ににらみを利かせるためにいたのではないかと考えられます。当時の境界線に近い国道442号沿いにはこのような遺跡や地割りが多く見られます。



長崎坊田遺跡

たかやのごう
(51) 高家郷

古代、三潞郡は8つの郷から成り、うち5つの郷の場所が確定、不明な3つのうちに「高家郷」があります。この郷は

歴史学では「たかえ」「たかや」などの呼び方が示され、筑後市の高江に比定する考えが示されています。

筑後市は古代の上妻郡・下妻郡・三潞郡からなりますが、その境はほとんど確定されておらず、地域の歴史を考える上で重要な説となっています。

とみひさけやしきあと
(52) 富久家屋敷跡

島田吉衛門という武士が開いたといわれています。吉衛門は明智光秀の配下で、光秀滅亡後安芸(広島県)毛利家に仕えました。その後豊臣秀吉の九州仕置の軍勢に参加し、高良山で草野氏と戦い大怪我を負い、ここに寄り住みました。それから吉衛門は富久姓を名乗り、3代与右衛門の時今寺(津島西)に移って代々今寺村の庄屋を勤めたといひます。

にたんだちょうじゃやしきあと
(53) 二反田長者屋敷跡

近江源氏の流れをくむ佐野家の屋敷跡です。佐野家は肥前(佐賀県)蓮池藩の家老職を勤め筑後に隠棲、賓客の待遇を受けたといひます。遺物としては「二反田長者屋敷」石碑と門戸があり、石碑は上富久の観音堂内に、門戸は筑後郷土資料館に納められています。

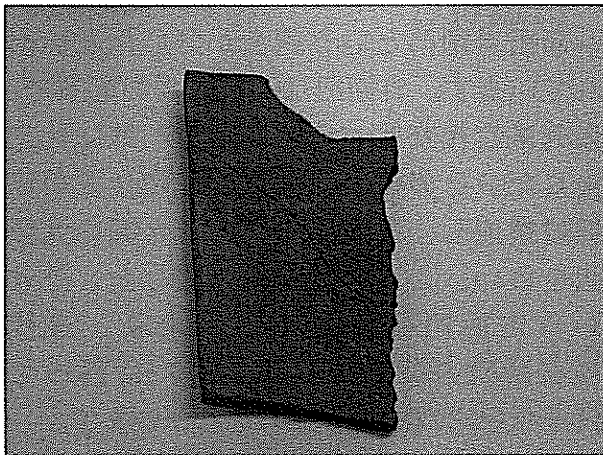
たかえはいじ
(54) 高江廃寺

高江の集落の西に位置する遺跡です。「妙建寺」や「坊田」の地名が残る他は、詳しいことは分かっていません。

いしづかてらあと
(55) 石塚寺跡

長崎地区に寺があったという記録はなにもありません。しかし、耕地整備の終わった昭和9年(1934)頃、奈良時代の

寺院に使われていた「布目瓦^{ぬのめがわら}」が見つかり、長崎地区全体に寺院があったのではと言われ始めました。しかし、瓦の特徴が水田で焼かれていた「赤瓦^{あかがわら}」と区別できないこと、古い寺院のものといわれる礎石が中世の五輪塔^{ごりんとう}の転用であるなど疑問点や矛盾点が多く、現在その存在は疑問視されています。



水田の赤瓦

(56) 最福寺跡^{さいふくじあと}

熊野坂東寺^{くまのぼんどうじ}の主要な末寺のひとつです。この遺物は現在下富久八幡宮^{ほうきやういん}に宝篋印塔^{ほうきやういんとう}を見ることができます。下富久にはこの他に寺の存在を示す地名が多く残されています。



下富久八幡宮 宝篋印塔

(57) 安養寺^{あんようじ}

庄島地区にある寺院です。その開基は寺伝では天文3年(1534)浄清和尚^{じやうせい}開基、明治28年に見つかった棟記^{むねぎ}には天正8年(1580)三河松下城主松下若狭守長則^{みかわまつした まつしたわかさのかみながのり}(長間^{ちやうけん})開基と記されていました。

境内の北西側にある永正15年(1518)銘の板碑^{えいしやう}は安養寺の開基伝承より古く、別の所から移されたと考えられます。現在は銘文が土に埋まりその内容は分かりません。



安養寺 永正15年銘板碑

(58) 万才薬師堂^{まんざいやくしどう}

万才天満神社^{てんまんじんじや}の道向いにあるお堂で、薬師如来^{やくしにょらい}と日光^{にっこう}・月光菩薩^{がっこうぼさつ}が祭られている。



万才薬師堂

ます。ここは寛文^{かんぶん}10年（1670）頃まで
禅宗^{ぜんしゅう}の広厳寺^{こうげんじ}というお寺でした。

(59) 明八社^{みょうはっしゃ}

高江の天満神社の境内に祭られている
祠で、別名「妙見さん」ともいいます。

むかし高江に「けんぎゅうさん」とい
う人が住んでいました。この人が亡くな
ると、村に疫病^{えきびょう}が流行り、多くの人が亡
くなりました。人々は恐れおののき、早
速^{そく}彼のお墓を建て手厚くお祭りしたとこ
ろ、疫病は収まったといいます。

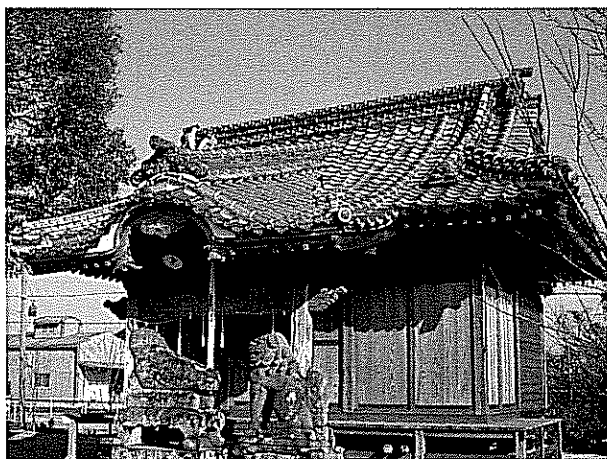
今の明八社は農業の神様として、地域
の人に親しまれています。

(60) 江口雷神社^{えぐちかみなりじんじゃ}

江口の氏神で、寛正^{かんせい}5年（1464）坂東
寺より勧請された古い神社です。ここの
獅子舞^{ししまい}は、昔地区内で若死する人が続い
たため、昭和54年（1979）再興されたとい
います。また境内にある「たらちねの
井戸^{そば}」の傍には、その清らかさを讃える
石碑が建てられています。

(61) 万才天満神社^{まんざいてんまんじんじゃ}

萬歳の氏神で、菅原道真^{すがわらのみちざね}を祭っていま



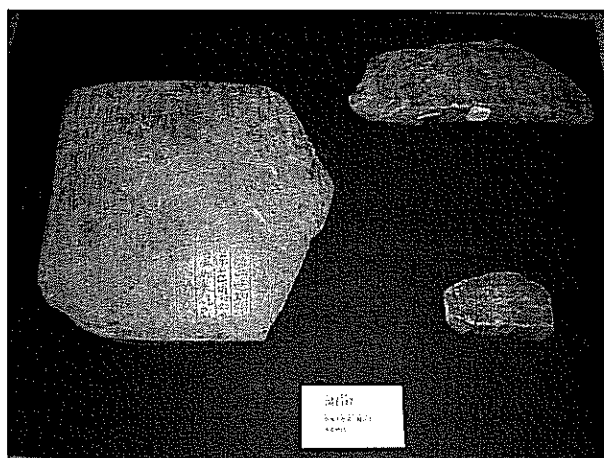
萬歳天満神社 社殿

す。この神像の銘文^{めいぶん}によると、神社は
堀川天皇^{ほりかわ}の承德元年^{しょうとく}（1097）創建で、市
内で一番古い天満神社であることが分か
りました。残念なことにその他の記録は
焼失^{しょうしつ}してしまっています。

(62) 滑石経^{かっせきぎょう}

江戸時代、若菜八幡宮^{はちまんぐう}の境内で出土し
たといいます。滑石経は「王平三年^{おうへい}」
（仁平3年（1153）の誤りか）の銘があ
る甕^{かめ}に入れられ、瓦の形をした石に法華
経^{ほけ}を刻み、タマネギ状に組み合わせてあ
りました。その後元の場所に戻されまし
たが、いつの間にか持ち去られ、今では
4枚の所在が知られるのみです。一部は
筑後市郷土資料館に納められています。

福岡県指定文化財（考古資料）。



滑石経

(63) 田中家古墓群^{たなかけこぼぐん}

昭和21年～22年（1946～47）、花宗川^{はなむねがわ}
の堤防改修工事の際に見つかり、墓4
基・享祿三年^{きやうろく}（1530）銘板碑、地藏像2
基、宝篋印塔^{ほうきやういんとう}3基が確認されました。出
土品は現在、堤防そばのブロック製のほ
こらに祭られています。

(64) 淵ノ上村跡

若菜の西側にあった集落です。戦国末期、西牟田氏の残党が西牟田城落城後に移り住んだといわれています。その後人口の減少が続き、廃村となっています。

(65) 江口組大庄屋 田中家

田中家の祖先は藤原氏といえます。初代田中安芸守利勝は、戦国時代肥後隈元城主に仕えますが浪人、天正14年(1586)、豊後大友氏の配下として筑前宝満・岩屋城攻防戦に参加。この時深手を負い、家臣らと江口村に移住、入門して宗慶と号します。慶長5年(1600)、筑後国主となった田中吉政より名字と刀を下賜、若菜・富重に井堰を作り水の便を図ったといえます。子の利家の時、武士を棄て農村に帰化。この時から田中家が江口村の庄屋職を務めることとなります。孫の利実の代に2代久留米藩主有馬頼忠の命で承応2年(1653)下広川21ヶ村の大庄屋に就任、代々大庄屋を務めました。江口大庄屋はその後江口井堰の建設や赤坂焼の再興などに力を注いだことが知られています。田中家の墓地は現在江口集落の東側に移され、地域の発展に尽く



江口村大庄屋田中家古墓群

したその名を今に伝えています。

(66) 吉武助左衛門

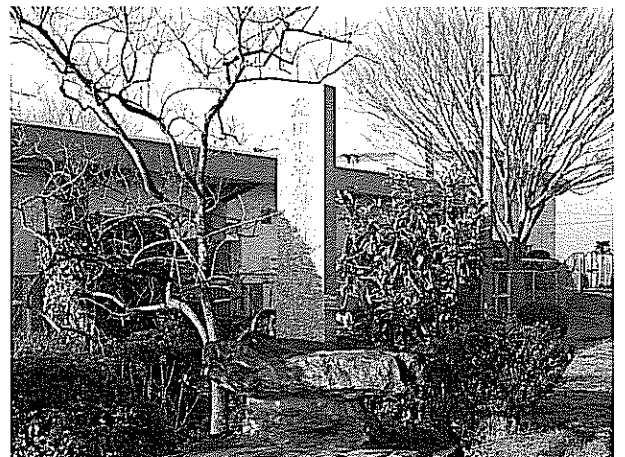
吉武助左衛門(1824~1906)は三潞郡田川村(久留米市三潞町)の生まれ。羽犬塚の山口嘉助(人馬問屋の管理者)の養子となり、山口嘉兵衛を名乗りました。その後嘉助に男子が生まれたため、家をこれに譲り、弘化2年から安政5年(1845~1858)まで四ヶ所の庄屋(里正)となり、その後羽犬塚に帰り住みました。

助左衛門は水田で謹慎生活を送る真木保臣に師事し、文久2年(1862)保臣と薩摩藩士大久保利通との会談に自分の住宅(人馬問屋)を提供、保臣の水田脱出に際しては従者の一人として付き従いました。彼はこの間『薩摩日記』をしたためており、これは真木保臣研究の欠かすことの出来ない資料となっています。

(67) 益田素平

益田素平(1843~1898)は、江口出身とも高江出身とも言われる農学者です。江口村庄屋の家に生まれ、元治元年(1864)庄屋職を受け継ぎました。

その頃農家では、原因不明の稲枯れに悩まされ、彼はその解決のため独学で研



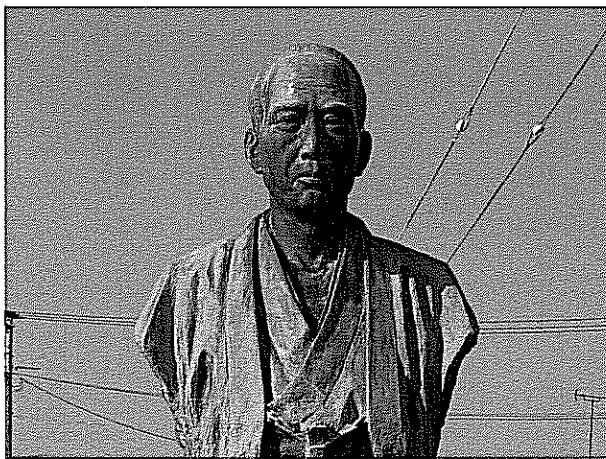
益田素平旧家之碑 (高江)

究を始めます。そして、原因が三化性螟虫という虫であり、稲の収穫後切り株を燃やすことで次の年の虫の数を大きく減らすことができることを突き止めました。

この方法は福岡県下で一斉実施されることとなりますが、作業の負担が大きく不満を持つものが続出、明治13年(1880)、「筑後稲株騒動」と呼ばれる大暴動が発生します。農民達は螟虫駆除を勧めた人々の家を次々と襲いますが、素平は自分の方法こそが多くの村を救うことができると信じていました。騒動は一週間続き、逮捕者800人、罰せられたものは100人以上になりました。

その後素平の研究は螟虫被害に苦しむ各地に広められ、稲株焼却法以外の駆除法や各地の実体にあった道具も開発されていきました。素平は明治22年(1889)、二川村村長となり、村をあげて螟虫駆除を研究しつづけました。二川村の取り組みは26年(1893)全国に紹介され、素平はその功績により各界から表彰を受けました。彼の方法は農薬の発明まで、欠かすことのできない農作業として広く行われていました。

素平は明治31年(1898)61歳で亡くなり、高江の共同墓地に眠っています。



益田素平胸像 (上北島)

家のあった高江橋のたもとには記念碑、上北島のJ A敷地内には胸像が置かれ、その遺徳を讀んでいます。

(68) 大鶴友吉・田中弥太郎

江口の地藏堂に二人並んで祭られている像があります。これは三八山新四国を開いた大鶴友吉・田中弥太郎です。大鶴友吉は信心深く、明治31年(1898)四国詣りに出発、各地で御身像と霊場の土をもらって帰って来ました。そして田中弥太郎とともにこの地方に新四国霊場を作ることを思い立ち、西牟田宝勝院や今寺光明寺の支援と多くの協力者の手助けにより、三瀨・八女・山門の各地に御神体と霊場の土を奉納、ここに「三八山新四国」が開かれました。



大鶴・田中胸像

(69) 高江の狐

高江には「げげ女」と「与一兵衛」という古狐がいました。

げげ女は高江の東北の大羽という所にいた女狐で、このあたりの狐の長でした。いたずらが大好きで、酒を飲んでここを通るものはよい騙し相手でした。げげ女は祭り帰りの村人が大好きで、ほろ酔い

か げん
加減で帰る村人が手に持つお土産を後ろ
りょうわき
両脇から引き止めていました。村人達は
さいそく
「またげげ女が催促してる」といってはお
りょうり
土産の料理を分けてやっていました。

与一兵衛は高江の北西の浦に住んでいた大狐でした。与一兵衛も女に化けて人をだましていましたが、強そうな人が通るとこそこそと隠れるような気の弱いところもありました。

ある時与一兵衛はげげ女に恋をし、人をばかすのも忘れるほど熱をあげたといひます。この恋の結末は分かりません。

また高江の西側には七ツ墓と呼ばれた所があり、ここでは狸や狐がよく人をばかしていたそうです。

(70) 夜啼橋

若菜の山ノ井川にかかる橋の名で、夜この橋を渡ると赤ん坊の泣き声がするという伝承があります。また、近くの民家に男女の墓石があり、二人の悲恋の伝説があるともいひます。しかし、いずれも詳しい由来は伝わっていません。



夜啼橋

(71) 仙談塚

ひさとみ えぐち
久富から江口に入った所にある観音堂

で、「仙談塚の観音堂」と呼ばれています。むかしこの地方に、英彦山権現の沙門坊の山伏が奉賀（正月のお祝い）にやって来ましたが、お布施が思うように集まらず、この地で自殺してしまいました。

その後江口村では病が広まり人々が次々に亡くなりました。村人達は大変恐れ、山伏が自害した場所に観音堂を作り、日を決めて毎年供養するようになったといひます。

(72) 万才のおこり

万才地区には高井良の姓が多く見られます。高井良氏は戦国時代、三瀨郡大木町蛭池を本拠とした武士で、西牟田氏に仕えました。ある時豊後（大分県）大友氏との戦いに参加、これに勝利し「万才」と叫びながら凱旋したといひ、この地名になったといひます。

(73) 千畳敷の故事

山ノ井川の萬歳橋を北に渡った所を「下六条」といひ、ここに寺があったといひう言い伝えがあります。ある時ここから壺が掘り出され、その中にはお金がいっぱい詰まっていたといひます。今も道筋には「ぶざい天」が祭られています。

はいぬづか
羽犬塚

(74) 前津遺跡

前津集落東側に広がる弥生時代の遺跡です。本格的な調査は行われていませんが、近年その範囲は西側に大きく広がり、時代も奈良時代まで続く複合遺跡の可能性が出てきています。

(75) 前津中ノ玉遺跡

昭和60年(1985)・平成8年(1991)に調査。8世紀頃の集落遺跡で、人々が堅穴式住居から平地式住居へ生活スタイルを変化させていく過程を物語っています。また古代の「葛野駅屋」を考える上でも重要な遺跡のひとつです。



前津中ノ玉遺跡

(76) 葛野駅家

奈良時代は「律令」に基づく中央集権国家の建設が進められ、その方針は地方へも影響を与えました。九州には「西海道」と呼ばれる官道が作られ、伝馬を備えた駅家が各地に設けられました。市域では西海道が中央を縦断していることが知られており、駅家として「葛野駅家」があったと考えられ、その候補地として羽犬塚・前津が挙げられています。平成8年(1996)の羽犬塚中道遺跡の調

査では「郡符葛(野)」と書かれた墨書土器が見つっています。



羽犬塚中道遺跡出土の墨書土器

(77) 羽犬塚宿

羽犬塚は中世後半にはすでに宿場町として知られており、江戸初期に柳河藩田中家か久留米藩によって整備されたと考えられています。

久留米藩は松崎宿(小郡市)・府中宿(久留米市)と共に「筑後三宿」の一つとして重視され、「御茶屋」が設けられました。「御茶屋」は参勤交代の大名および各国下向中の幕府要人が宿泊する施設で、現在の羽犬塚小学校敷地内にありました。管理には「御茶屋守」が置かれ、世襲で行いました。文化9年(1812)には西国



羽犬塚町

測量中の伊能忠敬一行が利用しています。御茶屋は明治5年(1872)に廃止され、建物は次々と売却されてしまいました。現在、御茶屋の庭にあったというソテツが羽犬塚小学校校庭と筑后市役所正面に移されています。



羽犬塚小学校内のソテツ

羽犬塚宿の旅籠(宿泊施設)は8軒で、他の2宿より少なめです。うち6軒の所在地が現在知られています。旅籠は町家(民家)が茅葺きの平屋であるのに対し、瓦葺きや二階建てにすることも出来ました。旅籠では休泊、食事の提供だけでなく、籠や荷物付運びの世話、飛脚・旅用品の手配なども行っていました。

宿泊施設には旅籠の他に木賃宿があり



旅籠 鮎屋跡

ました。ここは食料持参が原則で、調理をしてもらうか自炊を行っていたようです。木賃宿は記録が残っておらず、その所在地は分かっていません。



人馬問屋跡

六所宮入口には「人馬問屋」があり、人馬継立役が置かれました。ここでは公用の人員や物資の運搬の他、私用の運搬を馬士や下馬に取次ぐことも行っていました。また、ここでは幕末に久留米藩の志士真木保臣と薩摩藩士大久保利通の会談が行われたといわれています。

御茶屋から南に約100mほど進んだ所には武家屋敷風の「惣会所」がありました。惣会所は町行政一般と人馬継立役の管理事務を行っていたと考えられます。また羽犬塚宿では別に「牛馬会所」が設けられており、春と秋の牛馬市の手続きなどを行う管理事務を行っていたといわれています。牛馬会所は現在その所在地は分かっていません。また、定期的に牛馬市が開催されるなど、他の在郷町にはないにぎわいを見せていました。

羽犬塚町には藩の法令を領民に知らしめる為の掲示を行った「高札場」がありましたこれは「制札場」ともいい、現在

の羽犬塚小学校向いの脇道の入口にあつたといいます。筑後市域では他に尾島に高札場が設けられたといいます。



高札場跡

羽犬塚町の南北の出入り口には、^{さくと}賊徒が集落内に一気に侵入するのを防ぐ目的で「柵方」という曲がり道が設けられています。北側は規模が小さく、現在国道209号の下に完全に隠れ、南側の藤島にのみ見ることが出来ます。



藤島の柵方

(78) 藤島の一里塚

一里塚は江戸時代、^{えど}距離の目安に整備されたもので、おおよそ一里（＝約4km）ごとに作られました。大半に目印として

^{えのき}榎が植えてありました。久留米藩では城下の高札場を起点に整備されました。筑後市では一条・秋松（藤島）・今寺・北島（上北島）にあるとされていますが、一条と藤島以外の一里塚は現在どの辺りに所在したかは知られていません。



藤島の一里塚

(79) 宗岳寺

羽犬塚にあり、^{けいちよう}慶長元年（1596）、^{ぜんどうじ}善導寺の僧久伝により開かれた浄土宗の寺院です。その境内には多くの石造物を見ることが出来ます。

境内に入ると^{ゆうじごりんとう}有耳五輪塔があります。これは羽犬塚の地名伝承に語られる「^{はいぬ}羽犬の墓」と言われています。作風から^{てんぶん}天文～^{けいちよう}慶長期（1532～1614）に作られ



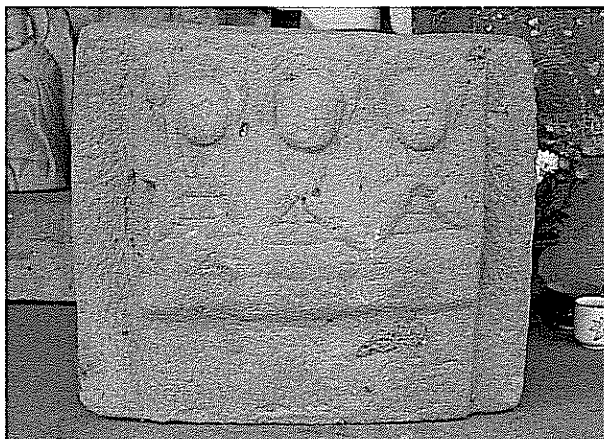
宗岳寺

たと考えられますが、火・水を表す石以外は失われ、他の石塔の残欠を積み重ねて復元しています。また、「犬之塚」の文字も後から刻まれたものです。



宗岳寺 羽犬の墓

左手の石造物群の中にある「一石五輪塔」は高さ40センチほどの小さなものです。五輪塔は空・風・火・水・土の各石を別々に作ることが多く、一つの石材で全ての石を作っているのは珍しいものです。その作風から、天文～慶長期（1532～1614）に作られたと考えられます。「地蔵三尊板碑」は石材の加工の具合から、元来は左右壁と床材をもった石殿型のもので推定されます。地蔵三尊像は久留米市大善寺町宮本、八女郡黒木町上田本に室町中～後期のものがあり、宗岳寺のも



宗岳寺 地蔵三尊像板碑

のも同じ時期の作と考えられます。また、この地域の地蔵信仰は彫像板碑から肥前型六地藏石塔へ変化しますが、宗岳寺のものはその変遷過程を知る上で、貴重な資料でもあります。また「六地藏石塔」は室町時代末～桃山時代のものと考えられ、八角形の台座の上に祭られています。この地蔵には豊臣秀吉が自ら刻んだという言い伝えがあります。



宗岳寺 伝豊臣秀吉奉納六地藏石塔

(80) 願長寺

羽犬塚にあり、天正13年（1585）、玄誓により開かれた浄土真宗大谷派の寺院です。玄誓はもとは櫛原寿一郎利長という武士で、豊臣秀吉の臣下となり細川を名乗りました。その後本願寺顕如上人



願長寺

の弟子となり玄誓^{げんせい}と号します。そして秀吉の九州下向に従い、この地にやってきました。その時秀吉はこの地域に寺院がないため、ここに寺を建てるようにと玄誓に命じ、寺領50石を与えたといひます。

(81) 了源寺^{りょうげんじ}

和泉西にあり、寛元3年(1245)、了空^{りょうくう}により建てられた浄土宗^{じょうどしゅう}の寺院です。この境内は勤王家真木直人^{きんおうかまきなおと}(1821~1901)の墓所となっています。

真木直人は勤王家真木保臣^{きんおうかまきやすおみ}の末弟で、成人後分家し外記^{げき}と称しました。保臣謹慎後は久留米水天宮^{くろめすいてんぐう}の本家を助け、勤王家として保臣の指示のもと肥前・肥後の志士らと連絡を取っていました。文久2年(1862)保臣の水田脱出後、直人も京都に向かいますが途中捕らわれます。翌年兄と共に許され、保臣は京都へ向かいました。8月18日の政変で保臣が京都から長州に入ると兄と合流します。元治元年(1864)の「禁門の変」に参加、保臣の遺命により戦場を脱出しました。その後5卿に従い筑前太宰府^{ちくぜん}に行き、慶応3年(1867)上京しました。以後官途に就き隠岐県知事・大森県権知事・久留米県権少参事^{くろめ}教部大録^{めいじ}を歴任。明治32年



了源寺 真木直人墓所

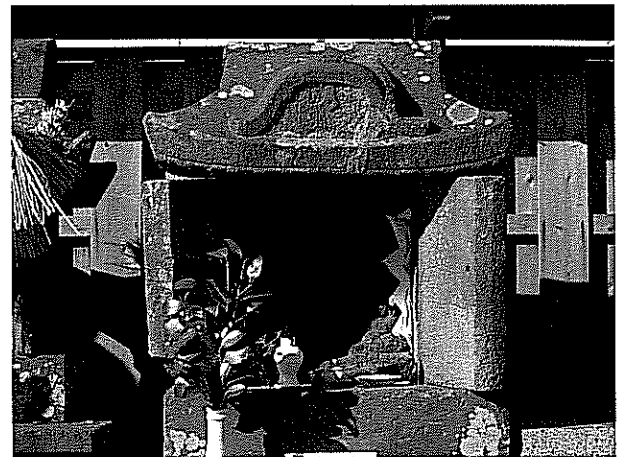
(1899) その功績により従五位を叙勲され、明治34年(1901)81歳で亡くなりました。

(82) 羽犬塚六所神社^{はいぬづかろくしょじんじや}

6柱の神様を祭り、「六所宮」「六所大権現^{だいくんげん}」とも呼ばれています。祀られている神様は資料によってまちまちなので分かりませんが、創建は承平年間(931~938)といい、『坂東寺縁起』によると百歳坊^{ひゃくさいぼう}という人の夢のお告げにより勧請されたといひます。その境内には筑后市域が南北朝時代の動乱の舞台であったことを示す遺物を見ることが出来ます。

境内の西側に祀られている5社の「羽犬塚蛭子宮^{えびす}」の内、「中町」えびすは男女双体像で、「正平十二年」(1357)と南朝の元号が記され、男神像は鯛を抱えておらず、古いえびす像の姿を持っています。男女双体のえびす様は福岡県福岡市櫛田神社、鹿児島県阿久根市・串木野市一帯、南筑後地方に見ることができる、珍しいスタイルのものです。また記された年号は、記年銘を持つえびす像としては最も古いものになります(日本最古のえびす像ではありません)。

境内東側の二重の石塔は、「正平」の年



羽犬塚六所宮 中町蛭子宮

号があるため「正平塔」と呼ばれています。現在のものは江戸時代の複製で、本物は久留米9代藩主有馬頼徳ありまよりのりにより持ち去られています。銘文の「正平十一年」(1356)は南朝側の年号で、筑后市域が度々戦場となっていた史実から南朝武士の墓ではないかと考えられています。



羽犬塚六所宮 正平塔

はいぬづかあきばじんじゃ
(83) 羽犬塚秋葉神社

火の神ひのかぐつち火之迦具土神を祭る神社です。江戸時代、羽犬塚で大火事が起こり、多くの人てんぼうが家を失いました。そこで天保年間(1830~1844)に久留米篠山城内の秋葉神社を分霊し、羽犬塚町の火事除けの神様として祭られました。秋葉神社に奉納された石灯籠にはこの由来を記した

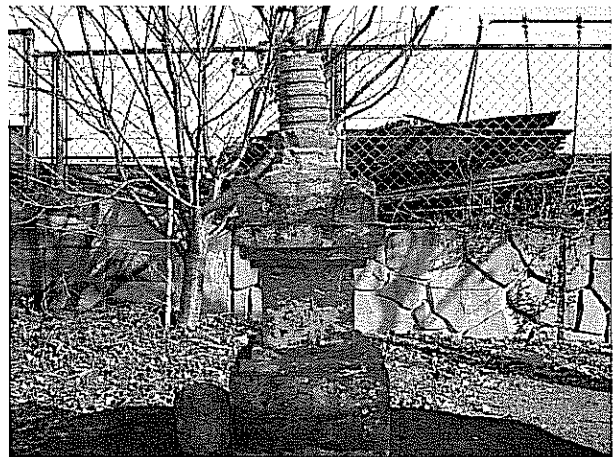


羽犬塚秋葉神社

銘文めいぶんが学者今村竹堂ちくどうによって書かれています。竹堂は新庄村(八女市)に私塾を開き、「上妻学こうづまがく」の祖として地域の学問を指導した人物です。

まえづくまのじんじゃ ほうきょういんとう
(84) 前津熊野神社 宝篋印塔

前津熊野神社は地区の氏神で、その裏手に宝篋印塔ほうじゆがあります。塔頂の宝珠を失っていますが、「明徳二辛未」(1391)の年号銘を持ち、市内でも古手のものです。この塔は古くから「とうさん祭り」の対象となっています。「とうさん」とは「殿さま」なまが訛ったものとも考えられ、この地区を治めた有力者の供養塔ではと考えられています。



前津熊野神社 宝篋印塔

ふくおかせいねんしはんがっこう
(85) 福岡青年師範学校

明治30年頃から、進学率の増加ともなに伴う教員不足が問題となり、その養成が急務となってきました。昭和10年(1935)、青年学校の制定と共に師範学校の設置が決められ、昭和17年(1942)、新しく羽犬塚に福岡青年師範学校が設置されました。この頃やまのい山ノ井の交差点付近に男子寮、八女工業高校やめこうぎょうこうこう近くの線路沿いに女子寮があり、教職を目指す多くの若者達が行き

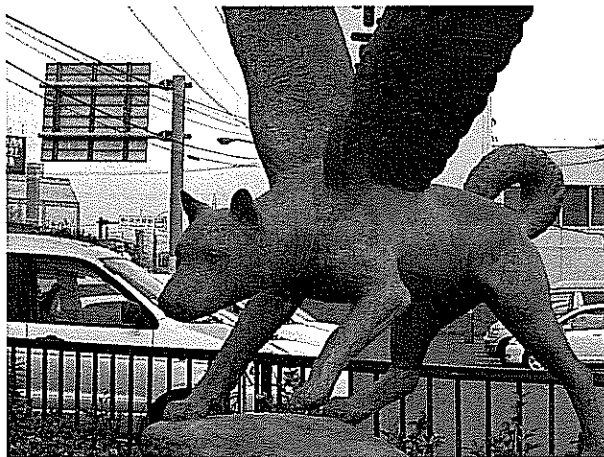
来していたと言います。昭和22年（1947）、師範学校は久留米市に移り、その歴史はわずか5年で終わりました。学校跡地は現在羽犬塚中学校の用地となっています。

(86) 羽犬の伝承

天正15年（1587）。薩摩（鹿児島県）の島津氏を討伐するため、豊臣秀吉は軍隊を九州に進めました。秀吉はこの時翼が生えているかのように速く走ることのできる愛犬をつれていました。しかし犬は病にかかり死んでしまいました。秀吉は大変悲しみ、犬の墓を作って弔いました。それから墓の作られた土地を「羽犬塚」と呼ぶようになったと言います。

また別の伝承では、この地で羽の生えた妖犬が人々を困らせており、秀吉がこれを退治しますが、妖犬の勇猛さを讃えて墓を建てたというものもあります。

羽犬塚の名称の由来は他に「馱馬塚」「駿馬塚」「端犬塚」「灰塚」の訛りなどありますが、秀吉の前から「はいんづか」と呼ばれていたことが知られています。

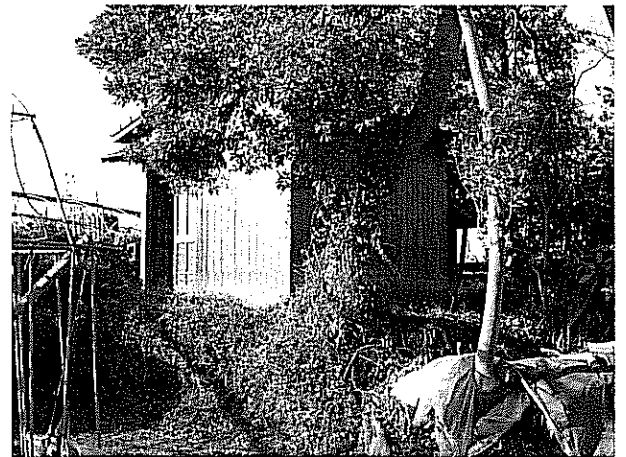


羽犬の像（山ノ井交差点）

(87) ハッサクさん

前津にある小さなお堂です。ここは8

月1日（八朔）の日にお祭をしているので「ハッサクさん」と呼ばれています。ハッサクさんは、ある家に不幸が続くため、お坊さんをお願いした所、祟りがあると恐れられていた藪の中から石碑が見つかり、この地に移されました。これは仏教の「補陀落渡海」の信仰により、宗教的自殺を遂げたお坊さん（ダラキさん）の供養塔です。また、このそばに祭られている「一部一石宝塔」は、ダラキさんが亡くなる前に法華経の文言を石に一文字づつ書いたものを、掘り出した後に洗い清めてここに埋納したものです。



ハッサクさんの祠

(88) 独沈さん

林村の氏神である熊野神社の境内に祭られています。独沈さんは江戸時代、長崎出身の行脚僧で、たまたま林村を通りがかりました。その時村人達が食べるものが少なく困っているのを見、彼はここに水田を拓くことを思いつきました。独沈さんは溜め池を掘り、用水路を引いて5・6反ほどの水田を作りました。林村の人々は喜び、慶応3年（1867）独沈さんへの感謝を込めてこの地にお祭りしたそうです。



前津熊野神社 独沈さんの祠

なかむらひこじ
(89) 中村彦次

中村彦次（1840～1911）は政治家で、上妻郡前津村の庄屋に生まれました。当時八女地方で高名だった継志堂けいしどうに学び、日本各地を遊学して回りました。明治維新に際しては国事に奔走し、維新後大楽源太郎事件（久留米藩難事件）に関与、名古屋の獄に1年間繋がれました。出所後は前津に戻り、風災に苦しむ人々の救済に励み、その後羽犬塚小学校の第3代校長に就任、八女地方の中学校設立に尽力するなど子弟教育に務めました。

明治11年（1878）上妻・下妻郡庁に出仕、同20年（1887）上妻・下妻郡長に就任、同22年（1889）には生葉・竹野郡長に転任します。明治25年（1892）第2回衆議院議員選挙に当選。明治34年（1901）～35年（1902）島根県知事と、約20年に渡り地方・中央の政治に携わり、その功績により正五位に叙されました。引退後は欠塚の鯉ノ谷に隠棲し、明治44年（1911）、72歳で亡くなりました。

どうて こたろう
(90) 道手の小太郎

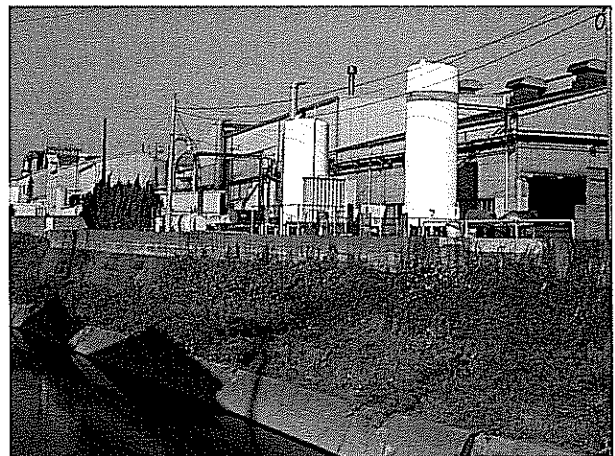
ラサ工業のあるあたりは「道手」とい
い、昔は榎や椎などが生い茂る森があり

ました。ここに小太郎という、女に化けるのが得意な狐が住んでいました。

ある時の春、物好きな男が、小太郎を懲らしめてやろうと思い、月夜の晩に道手に出かけていきました。すると、椎の木の下に、白い頭巾で顔を隠した美しい女が、おぼろ月の明かりを背に立っていました。「これが噂の小太郎だな」と思った男は下腹に力を入れて近付き、「この辺りに泊めてくれる宿はないか？」と声をかけました。女は「それなら私の所に」と自分の家に案内しました。部屋に案内された男は、出されたお茶やまんじゅうも馬のふんや尿に違いないと思い手を付けませんでした。やがて女は寝具を用意すると、隣の部屋で眠りについたようでした。

男はやおら起き上がり、自分の禪ぜんを解いて女の足と自分の足をしっかり結び付けて相手が逃げられないようにしました。そして、「道手の小太郎、騙されんぞ！」と大声をあげ、傍にあった木枕で女の頭あたまを殴り付けました。

悲鳴ひめいをあげたのは男の方でした。女と思ったのはひとまわりもある大きな榎の木で、手にしていたのは大きな石でした。男は禪を榎の木にしっかりと結び付けて



現在の道手（ラサ工業付近）

いたのです。あたりを見回すと、藁や枯れ草がたくさんあり、春の月が天中に輝いていました。

(91) 和泉山の狐

むかし、「和泉山」と呼ばれる広い竹藪があり、いつの頃からか、いたずら好きな狐が住み着きました。

ソバの花が月明かりに照らされ白く浮かび上がる美しい秋の月の夜、ほろ酔い機嫌の男が家路を急いでいました。ふと男は、ソバ畑の中を自分の着物を頭にのせ、禪ひとつになって歩いている男を見つけました。畑の中には狐がおり、大きなシッポを高くあげて左右に振っています。その動きに合わせてソバの花も左右に振れて波打っていました。裸の男は狐に騙され、川を渡っている気になったのでしょう。

やがて狐はどこかへ歩き出しました。ほろ酔い機嫌の男があとを付けてみると、狐は小川のほとりで立ち止まり、頭の上に川藻をすくいおきました。すると狐はみるみるうちに美しい娘になりました。男は呆然としてましたが、われに戻るとまた、美しい娘の姿となった狐の後をつけていきました。

しばらく行くと、まばらな雑木林となり、一軒のあばら屋が見えて来ました。娘はその中へと消えていきました。興味をもった男は、この家の人々が娘に化かされてどんな顔をするだろうと空想に耽りながら家の裏に回りました。すると都合良く格子窓がありました。男は思わず人さし指に唾を付け障子に穴をあけ、顔をくつつけてそっと中を覗き込みました。その時、「危ない！」と後ろで叫ぶ声に、

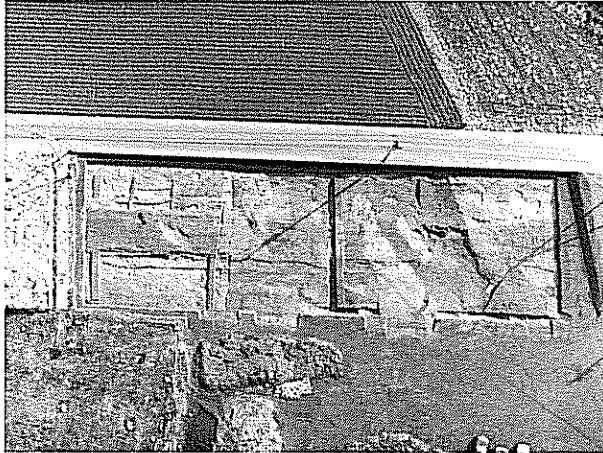
男ははっと我に返りました。男が覗き込んでいたのはなんと、馬の尻の穴だったのです。

ちく
筑

ご
後

やまのいかわぐちいせき
 (92) 山ノ井川口遺跡

奈良時代に作られた古代官道「西海道」の遺跡で、平成10年(1998)に確認調査が行われました。その結果、路面を作るための基盤工事の跡が確認され、古代の土木技術を研究する上での貴重な資料となっています。



山ノ井川口遺跡

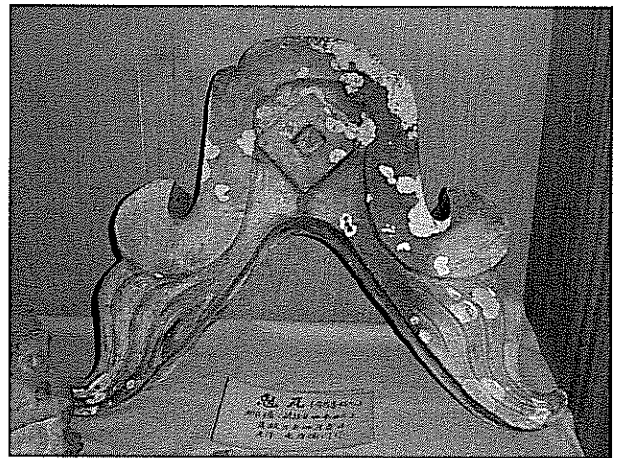
にほんまつごうばあと
 (93) 二本松郷場跡

久留米藩が徴収した年貢米の集積所で、藩の米蔵が建っていました。留守役などはなく、収納期にだけ役人が久留米からやって来ました。ここには上妻郡西部・下妻郡の年貢米が集められ、米は花宗川を利用して船で筑後川の川港へ運ばれた



郷場跡

後、大型船で大阪へと送られていきました。また近くには役人が宿泊する茶屋(旅の途中に休憩をとる施設で、一般の旅人は泊まることを禁止されていました)があったといます。久留米藩は五ヶ所に郷場を設置しますが、二本松のものがもっとも古いものになります。ここには昭和50年(1975)まで米蔵が残っており、筑後郷土資料館に蔵の鬼瓦が納められています。



郷場の米蔵の鬼瓦

こうづま しもづまぐんきょうせき
 (94) 上妻・下妻郡境石

文政2年(1819)、薩摩街道と福島往還沿いの2ヶ所に建てられました。これは一里塚と共に、当時の旅人の目印となっていました。現在は道路整備などの



郡境石 (薩摩街道沿い)

関係から本来の場所より少し動いた所に遺されています。

(95) 二本松白瀧神社

この神社の境内に「奇雲霊社」「玉鶴霊社」という、2柱の神様の石碑があります。この地は古くは「平家堂」といい、平家の落人伝説が伝えられていました。石碑は江戸時代の終わりに供養の為新たに祭られたと言います。ここに伝わる話は次のようなものです。



二本松白瀧神社

平家が壇の浦の戦いに敗れ、その一門が九州に逃れて来ました。その中に、夫の姿を探す玉鶴姫の一行がありました。一行が夫のいるという筑後にたどり着い



二本松白瀧神社 玉鶴霊社

た時、彼はすでに肥後（熊本県）へ旅立った後でした。そして背後には源氏の追手が迫っているとの知らせがとどきます。女の足では到底逃げられないと感じた姫は、敵に捕らえられるぐらいならと、ここで自害したといひます。

源氏の追手と平家の残党は花宗川のほとりで戦いとなり、多くの平家の武士が亡くなりました。この時神社の裏手の井手には平家の赤い旗が多く引っ掛かっていました。それからここを「赤井手」と呼ぶようになったといひます。



赤井手

(96) 平井鋳物師

平井鋳物師は鍋や釜・梵鐘などの鋳物を作る職人で、久留米藩内の鋳物師司として鋳物関連の商売を支配しました。

その由来は平井宇太という人物から始まります。宇太はもともと羽犬塚で鋳物を作っていました。町中で火を取り扱う商売をしていたためか、その屋敷は広大であったといひます。天正15年（1587）、薩摩（鹿児島県）の島津氏征伐のため、豊臣秀吉が羽犬塚を通過した時のことです。秀吉は羽犬塚を休憩を取り、その場所を宇太の屋敷に求めました。この時宇

太はお茶^{ちや}を献上^{けんじょう}、この時たいへん^{きげん}機嫌^{あつ}の
良かった秀吉^{ひでよし}は^{いもじのつかさ}鑄物師司^{しよく}の職^うを宇太^{うた}に与^{あた}
えたといひます。その後の領主^{りょうしゆ}である
田中家^{たなか}・有馬家^{ありま}もこれを追認^{ついにん}しました。

その後宇太は人家^{じんか}の増えた羽犬塚^{はいぬづか}を嫌^{きら}
い、寛永年間^{かんえい}（1624）、長浜^{ながはま}に転居^{てんきよ}しま
した。羽犬塚^{やしきあと}の屋敷跡はその後「御茶屋^{おちや}」、
羽犬塚^{はいぬづか}小学校^{ひらいげ}となっています。平井家^{ひらいけ}は
野町^{のまち}の八幡宮^{はちまんぐう}や長浜^{ながはま}の玉垂神社^{たまたれじんじや}の造営^{ぞうえい}な
どに力を尽く^{つく}しています。

現在、平井家^{ひらいけ}の長浜^{ながはま}での鑄物^{いもの}の工場跡^{こうば}
は長浜遺跡^{いせき}と呼ばれ、長浜屋敷跡^{ながはま}と共に
史跡^{しせき}となっています。



長浜玉垂神社

にほんまつろくぶひ
(97) 二本松六部碑

福島往還^{ふくしまおうかん}沿いに立つ墓石^{ほせき}です。これは
諸国巡礼^{しよこくじゆんれい}の旅^{たび}に出た越後国^{えちご}（新潟県^{にいがた}）出
身の市右衛門^{いちうえもん}という人が、天明7年^{てんめい}
（1787）旅^{とちゆう}の途中で亡^なくなったためここ
に埋葬^{まいそう}したものです。

ふる
古

かわ
川

ながたのしゆく
(98) 長田宿

現在の北長田になります。天徳4年(960)、時の筑後国司藤原氏の一族がここに移り住んだのが集落の起りといわれています。薩摩街道の宿場の一つで、かつては矢部川を渡るために必ず通る必要があり、渡船を係留した場所はいつしか「船小屋」と呼ばれるようになりました。豊臣秀吉の島津征伐の際は、矢部川増水のため軍が何日もここに逗留したといわれています。しかし久留米藩有馬氏は今寺(津島西)に番所を設置、街道筋を西側へ大きく曲げ、宿の機能は新たに開かれた尾島町へ移りました。

また北長田ではかつて藍染めがさかんに行われていました。その起りは文治元年(1185)、平家の一門・江間加賀守平範雅がこの地に技法を伝えたといえます。北長田の藍染めは江戸から大正時代にかけて「藍屋の長田か、長田の藍屋か」と謳われるほどになりますが、昭和初期には姿を消してしまいました。



北長田

みぞぐちじょうあと
(99) 溝口城跡

筑後15将のひとつ溝口氏の居城で、大字溝口字城が比定地とされています。文

献では正平6年(1351)、肥後(熊本県)の菊池武光が征西將軍宮・懐良親王を奉じて入城したのが初見です。溝口氏は下妻郡溝口を本拠とし、南北朝・戦国時代の文書にその名を見ますが、記録が少なく不明な点が多く残されています。溝口氏は天文19年(1550)、豊後国(大分県)の大友氏に叛きますが、城を落とされ衰退、その後も各勢力の下で働きますが、往時のような活躍はみられません。

溝口の中にある宝篋印塔は溝口氏の墓所といわれています。かつてはこの辺りには多くの墳墓が築かれていましたが、文化年間(1804~1818)には転倒した石塔が散在していたといえます。この頃、溝口村に疫病がはやり、多くの人々が亡くなりました。ある人に見立ててもらおうと、これは溝口宗清の祟りであると出たため、村人は倒れた石塔から残りの良い石材を選んで新たに塔を立て、毎年9月11日に供養を行うようになったといえます。



溝口氏累代の墓

みぞぐちやかたあと
(100) 溝口館跡

久恵の集落内、二重の堀で囲まれた区画で「大屋敷」という地名が付けられています。ここは城を失った溝口氏が隠生

した場所といわれ、東側には大きな門があったともいわれています。また、集落南西部には「殿様墓地」と呼ばれる所があり、江戸時代以降の溝口氏の墓所といわれています。

(101) 宗清寺

鶴田にある平宗清が創建したといわれる寺院で、当初は尾島市ノ塚にあったものが、戦国時代になり戦火を避けるため現在の場所へ移転したといえます。



宗清寺

平宗清は平安時代末の人で、伊勢平氏の出自といわれ、源頼朝の身柄を預かったといわれています。筑後地域には彼にまつわる伝承が伝わっています。平家全

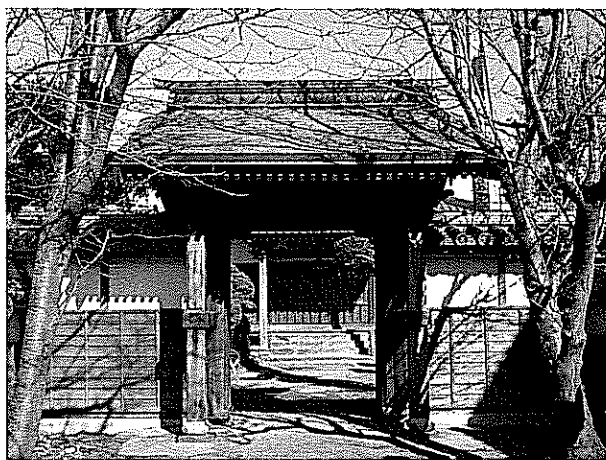


平宗清廟

盛の頃、平重盛の名代として津島西の光明寺に石造九重塔を寄進したといい、壇ノ浦を脱出した安徳天皇を平知盛とともに久留米まで護衛、その後尾島の地で平家一門の冥福を祈願したといわれています。宗清寺境内の北側には彼を祀った宗清廟が建てられています。

(102) 光讚寺

溝口の北側に位置する寺院です。ここは天文11年(1542)、清慶により開基したと伝えられています。この御本尊は五却思惟如来(通称「やせほとけ」さん)で、毎年1月16日と8月16日に御開帳が行われています。また境内には妙光寺から移されたという石刻大師座像と大日如来像、勤王家古松簡二の墓所などが見られます。



光讚寺

古松簡二は医師清水潜龍の子として溝口に生まれ、医術を学びました。文久3年(1863)脱藩上京し、筑波山義拳に参加。後京都に入り、父の生まれた上妻郡福島町古松町にちなみ古松簡二を名乗ります。慶応2年(1866)長州征伐の際に長州入りを試みますが幕府軍に捕まり、

以後3年を^{ひろしま}広島^{ろうごく}の牢獄^すで過ごします^{めい}。明治^{だいらくげん}維新^{たいらくげん}後は久留米^{くろめ}に戻りますが、大楽源^{たいらくげん}太郎^{たろう}事件^{じけん}（久留米^{くろめ}藩^{はん}難^{なん}事件^{じけん}）に関わり東京^{とうきょう}に送られました。明治15年（1882）、獄中^{ごくちゆう}にコレラ^{りゅうこう}が流行^{りゅうこう}、簡二^{かんび}は囚人^{しゅうじん}の看病^{かんび}に務め、自身も感染^{かんせん}、亡くなりました。明治22年（1889）、大赦^{たいしゃ}により罪名^{ざいめい}消滅^{しょうめつ}、従四位^{じよ}に叙せられています。



古松簡二墓所

(103) ^{ふくおうじ}福王寺
溝口にある寺院^{みぞぐち}で、中世後期^{ちゆうせいこうき}の創建^{そうけん}と伝えられます。本尊^{ほんぞん}は九州^{くわうしゅう}弘道^{こうどう}の導師^{どうし}日親^{ひしん}による開眼^{かいがん}といひます。桃山^{ももやま}時代^{しやうしよくじゆんれい}、諸国^{しよこく}巡礼^{じゆんれい}の途中^{とちゆう}にここに立ち寄った日源^{ひげん}は、村の興廢^{こうはい}ぶりに心を傷め、故郷^{こきやう}から一族^{いちぞく}の者を呼び寄せ、福王



福王寺

寺^{せい}で製紙業^{せいしぎやう}を始めました。時の領主^{りやうしゆ}たちは彼ら^{かれら}を保護^{ほご}し、製紙業^{せいしぎやう}はついに九州一円^{くわうしゅう}に広まりました。筑後^{ちくご}地方^{ちくご}の製紙業^{せいしぎやう}は昭和47年（1972）、「筑後^{ちくご}の手すき和紙^{ててわし}」として県の無形文化財^{むけいぶんかざい}に指定^{ししてい}されました。溝口区^{みぞぐち}の共同納骨堂^{きゆうどうのうこつどう}には井上三綱^{いのうえさんこう}により日源^{ひげん}が人々に製紙業^{せいしぎやう}を伝える姿^{すがた}が描かれ、福王寺^{ふくおうじ}境内^{きん}には彼^{かれ}を讃^{たた}えた碑文^{ひぶん}と銅像^{どうぞう}が建てられています。また、ここに伝わる「福王寺文書^{ふくおうじ}」は八女^{やめ}の「矢加部家文書^{やかべ}」と共に、筑後手すき和紙^{ちくご}の歴史^{れきし}を伝えるものとして現在^{いま}大学^{だいがく}に保管^{ほかん}されています。

福王寺^{ふくおうじ}はその後、荒れ寺^{あられでら}となりましたが、江戸時代^{にっしやう}中期^{ちゆうき}日修^{ひしゆ}により再興^{さいこう}され、現在^{いま}に至^{いた}っています。



日源上人像

(104) ^{みやうこうじあと}妙光寺跡

溝口^{みぞぐち}集落^{しゅうらく}の南側^{なんがわ}にあった禅寺^{ぜんじ}で、久留米^{くろめ}藩主^{はんしゆ}有馬豊氏^{ありまたやうじ}の入封^{にゆうふう}と同時に丹波^{たんぱ}福知山^{ふくちやま}から移って来ました。同じ溝口^{みぞぐち}の光讚寺^{こうざんじ}に移された石像^{かんぼう}から、寛保3年（1743）までは存続^{そんぞく}していましたが、文化^{ぶんか}年間（1804～1818）には廃寺^{はいじ}となっていたことが古伝^{こでん}により知られています。

くえはちまんぐう
(105) 久恵八幡宮

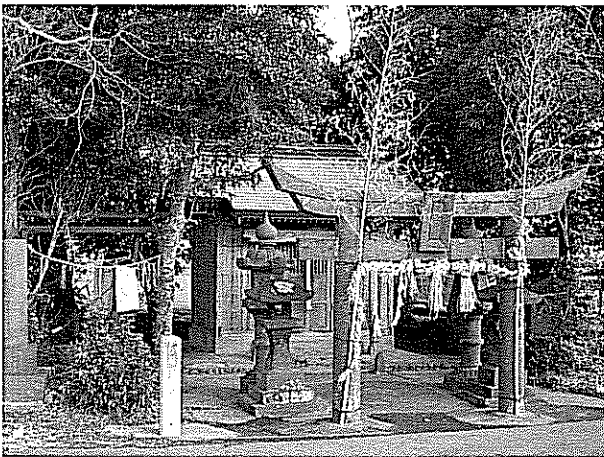
旧古川村で唯一の、郷社に指定された神社です。治承4年(1180)、溝口城主溝口常陸介高房により安房国(千葉県)男山より勧請したとも、山城国(京都府)八幡宮より勧請したともいわれています。元和年間(1615)より近隣16ヶ村の鎮守として信仰を集めました。以前は流鏝馬の行事も行われており、隣接する小学校南側に伸びる長い参道は、その頃の馬場であったといえます。



久恵八幡宮

つるだてんまんじんじや
(106) 鶴田天満神社

戦国時代、山下城主上蒲池氏によりこの地に勧請されたといえます。ここには



鶴田天満神社

頭(脳)の神様として信仰があり、神殿の石を撫で、靈験が表れて悪いところが治ったらお礼にすべすべした石を奉納します。

みぞぐちかまどじんじや
(107) 溝口竈門神社

溝口集落の東、矢部川に面した所に立つ神社で、別名溝口宝満神社。創建は長和3年(1014)、城主藤原武資が筑前国より勧請し、溝口城ができる前は集落西側の「古宮」にあったと言われていす。神社を囲う木々はその歴史を物語っており、竈門神社社叢として筑後市の文化財に指定されています。

竈門神社には特色ある祭りとして「千燈明祭」と「キセル祭り」が伝わっています。「千燈明祭」は秋に行われる火祭で、かつては水田・酒井田(八女市)のものと筑後三大千燈明祭の一つとして盛大に賑わっていました。祭りは五穀豊穡と疫病退散を祈るもので、矢部川で禊を行った後、ラッパの合図と共に一斉に点火されます。このお祭りは市指定文化財となっています。「キセル祭り」は筑後市の奇祭として特に著名で、竈門神社の秋の例祭として毎年12月13日に行われています。このお祭りは戦国時代(天正6年・



溝口竈門神社

1578)、^{みぞぐち}溝口^{しげまさ}城主^さ溝口^が重正が佐賀の^{りゅうぞうしたかのぶ}龍造寺隆信の^{こうげき}攻撃を受け城を^お追われた際、^{たけやぶ}近くの竹藪(降参ヤネ)に逃げ込み、竹を^つ切ってタバコを^す詰め、^つキセルの代り(鉄砲キセル)とした^{こし}故事に由来するとい^{なりぐみ}います。神事は次の年の座主となる隣組を決めた後、30センチほどの青竹のキセルでタバコを^す吸い、前夜矢部川で身を清めた男達が^た炊いたおこわと郷土料理をとり、酒を^く酌み^あ交^はわしながら、先祖の苦勞を^{しの}偲んでいます。



溝口のキセル祭り

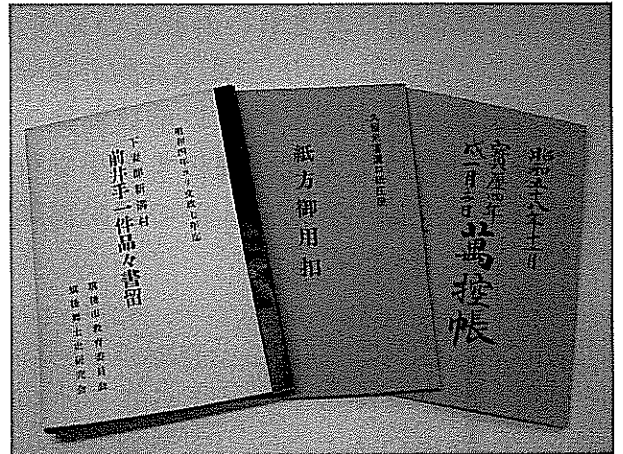
(108) ^{みぞぐち}溝口の^{こもんじょ}古文書

溝口には多くの文書が伝わり、そのうち2つが筑後郷土史研究会によって整理されています。

『^{まえいでいっけんしなじなかきとめ}前井手一件品々書留』は^{めいわ}明和4年(1767)から^{ぶんせい}文政7年(1824)までの水利^{はなむねがわ}関連文書で、主に^{しんじょう}花宗川流域の新庄組大庄屋(現八女市)、^な中折地組大庄屋(現筑后市)による^{しんみぞ}新溝村非道井堰の取り扱いに関するやり取りが記録されています。

『^{かみがたごようひかえ}紙方御用控』は^{あんせい}安政3年(1856)から^{めいじ}明治4年(1871)までの間、^{よこみぞ}溝口紙庄屋横溝家と久留米藩庁の間でやり取りされた文書です。溝口紙庄屋は当時16軒あ

った紙職人を^{たば}束ね、^{せつ}生産・^び設備・^{はんばい}販売などを世話する^{はんちよくぞく}藩直屬の^{きかん}機関でした。文書の内容も原料である^{ちよ}楮の仕入れから製品の出来具合、紙の^{せい}値段に関わることなど^{せいしきょうぜんぱん}製紙業全般にわたっています。



整理出版された古文書

(109) ^{みぞぐちろくじぞう}溝口六地蔵

^{みぞぐちかまどじんじや}溝口竈門神社への^{とちゅう}道の途中に祭られています。昔、^{ろくじぞうぐみ}溝口の六地蔵組では頻繁に火事が起き、いろいろ調べると子供達が川に六地蔵を投げ込んだことが分かりました。これを川から引き上げてお祭りした所、火事が^やびたりと止んだといいます。

地区では六地蔵として祭られています。正確には^{しめんせきぶつどう}四面石仏塔と言った方がよいものです。仏像の刻まれている長大で



溝口六地蔵

胴張りのある軸部は熊本の大慈禅寺に似たものがあり、肥後系統の作品かも知れません。

(110) 桑鶴恵比須像

明治になって祭られた恵比須さんです。筑後・八女地方には「夫婦恵比須」の像を見ることが出来、多くは男神は鯛を、女神は宝珠を持っています。桑鶴の恵比須さんは単体の男神が宝珠を持ち、新しいとはいえ大変珍しいものです。



桑鶴恵比須像

(111) 北長田老松神社 庚申塔

高さ50センチほどの凝灰岩に刻まれた庚申塔で、「庚申祭」(庚申待ちの訛り)と刻まれている珍しいものです。筑後地



北長田老松神社 庚申塔

方では江戸時代後期に庚申信仰が流行しますが、この石塔は「享保4年」(1719)の銘があり、最も古いものの一つになります。

(112) 横枕覚助

横枕覚助(1843~1890)は幕末の勤王家で、溝口西の庄屋横枕兎平(1741~1881)の三男として生まれました。文久3年(1863)、同郷の古松簡二と共に水田に謹慎する真木保臣を訪ね、勤王の志を強くしたといえます。

明治2年(1869)大楽源太郎事件(久留米藩難事件)に関わり東京・新潟の獄に繋がれ、明治7年(1874)出所しました。その後官途に就き、同19年(1886)正八位、同22年(1889)、大赦により罪名消滅。同23年(1890)最後の任地である山梨県北巨摩郡で亡くなりました。

溝口の共同墓地内に彼の供養塔があります。また、彼の獄中記などは『横枕家文書』として筑後市郷土資料館に納められています。

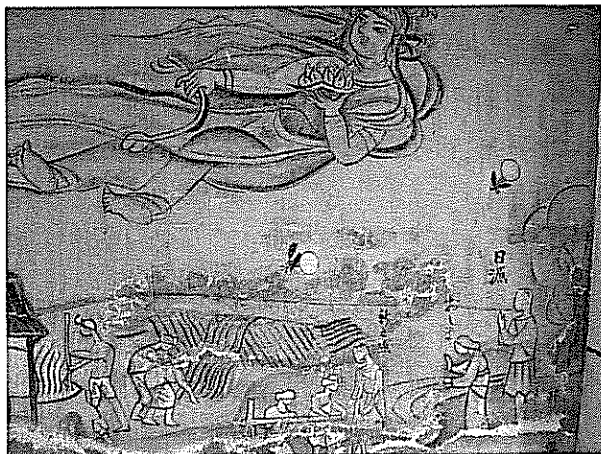


溝口 横枕覚助墓所

(113) 井上三綱

井上三綱(1899~1981)は溝口の生

まれて、その名は「みつな」ともいいます。大正の頃坂本繁二郎に師事し洋画を学びました。その後日本美術を洋画で表現する方法を研究し、日本絵の具（岩絵の具）を用いた屏風絵風の絵を多く残し、日本国内より欧米などで高い評価を受けています。また、師・坂本繁二郎との手紙には、東洋哲学的な美術論が述べられているといわれています。郷土には桑鶴共同納骨堂壁画、八女市庁舎銅板壁画などが伝えられています。



井上三綱の壁画（桑鶴）

(114) 北長田のあやつり人形と紙燈籠

戦前まで北長田で8月15日に行われていたお祭りでは、あやつり人形と紙燈籠が奉納されていました。8月に入ると若者達は上・中・下の3組に分かれ（のち2組）、それぞれ操り人形をつくっては各々の舞台上で演じてその出来を競っていました。人形舞台は釘を使わない特殊なもので、八女市の灯籠人形が県の指定文化財となる際に、参考の為調査されています。舞台は戦後も演目を変えて使われていましたが、昭和40年頃にそれぞれ売却されました。

この日に奉納される紙燈籠は、形は山鹿灯籠と同じだったといわれています。現在では木芯のものとなり、毎年紙を張り替えて奉納されているそうです。

(115) 長田河原の戦い

建武3年（1336）、九州に落ち延びた足利尊氏は、南朝方の菊池武敏と筑前国（福岡県）多々良浜に戦い勝利しました。利がないと察した菊池勢は肥後国（熊本県）に撤退を始めますが、尊氏はこれを追い、鶴田の地に陣を張ったという伝承があります。その地は『稿本八女郡史』に「往時垂井長左衛門の寓居せし屋敷なる由云ひ伝ふ」と記しています。

(116) 久恵の河童

筑後地方には河童の伝承が多く残されていますが、久恵にも河童にまつわる話があります。

昔、ある人が孫を連れて川べりにやって来た時、川から何か物音がしました。近寄ってみると、濁った川面に渦が巻いており、その中から河童が顔を出しました。たまたま孫が持っていたお菓子を河童に投げ与えると、河童はそれを受け取り食べながら川の中に消えていったといわれています。

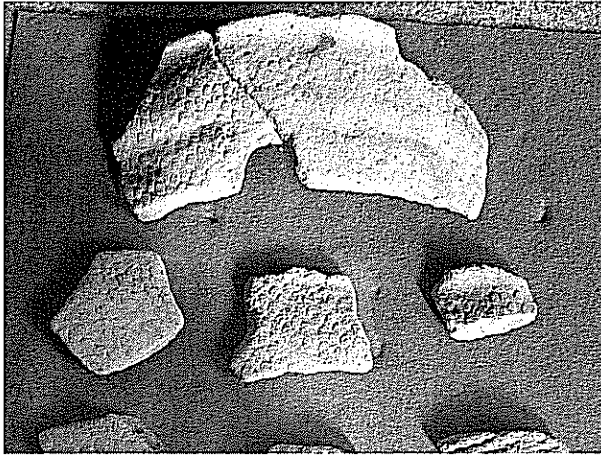
また、ある人は、幼い時川で遊んでみると河童に水の中に引きずり込まれ、尻の穴から体の中のを抜き取られて亡くなったといわれています。

すい
水

せん
洗

うらやまいせき
(117) 裏山遺跡

縄文早期（約8,000年前）と弥生後期（約1800年前）の複合遺跡です。郷土史家・岩崎光氏によって調査され、縄文時代の押型文土器や弥生時代の住居などが発見されました。現在遺跡地は裏山公園となっています。



裏山遺跡出土 押型文土器

しむらいせきぐん
(118) 志遺跡群

水洗小学校の西側に広がる縄文時代早期（約8,000年前）の遺跡です。ここからは押型文土器・石組み炉・落とし穴・石製品などが見つかりました。この時期の遺跡は外に鶴田遺跡群・裏山遺跡がありますが住居跡がないため、これらの遺跡



志前田遺跡 石組み炉

を狩りを行った時のキャンプ跡ではないかと考える研究者もいます。平成9年（1997）に志前田遺跡から見つかった石組み炉は、現在郷土資料館にて保存・展示が行われています。

つしまきゅうたんつほいせき
(119) 津島九反坪遺跡

松永川右岸に位置する弥生～古墳時代（約2200～1800年前）にかけての遺跡です。ここからは「溜井」と呼ばれる弥生時代前期（約2,100年前）の灌漑施設が見つかりました。これは国内でも古い部類に入り、当時からこの地域が水の確保に苦心していたことを物語っています。



津島九反坪遺跡 溜井

ひろたのしょう
(120) 広田荘

広田荘は下妻郡に440町を有した大荘園ですが記録はほとんど残っていません。この荘は後に瀬高荘・小河荘など5つの荘園に分かれたと考えられ、その存続期間は短かったと想像されます。瀬高町には「広田荘」と記された板碑と広田八幡宮があり、本郷・芳司のあたりを広田原と呼ぶことから、この一帯が中心と考えられています。市内では津島西の五柱神社の棟記（1855）に広田荘とあり、津島

ひがし はちまんじんじや
東の八幡神社も広田八幡宮の分霊である
ことから、この一帯が広田荘の一部では
なかったかという意見が出されています。



津島東八幡神社

(121) 市ノ塚

いちのづか
おしままち
尾島町の北側に位置し、次のような
伝承を持っています。

- ① 平家の残党の多くがここで打ち取られ、一の塚など複数の塚に葬られた。
- ② 平家の戦死者を弔うため、平宗清がここに道場（のちの宗清寺）を建てた。
- ③ 応安5年（1372）、菊池武光の死去に乘じ、筑后市ノ塚に陣を張った大友親世を菊池武朝が破った。
- ④ 天授2年（1376）、筑後に出陣した大友親世を菊池武朝が破り、この時浅山小次郎重綱が戦死した。
- ⑤ 天正4年（1576）、龍造寺隆信の軍勢が山下城・辺春城を攻略したものの敗れ、400人ほどの戦死者をだした。

この中でも著名なのは平家伝承でしょう。合戦に関する伝承が多いのは、ここが肥後（熊本県）へ通ずる街道筋のためです。また、江戸時代に町を開くため開墾した際、多くの武具・甲冑のたぐい出土したと言われています。



市ノ塚 供養塔

(122) 尾島町

えんぼう すいかい きら しもかわ
延宝2年（1674）、水害を嫌い、下川
さぶろう えもん かま ぐち ますがた
三郎右衛門が中心となり開かれた町です。
じゅうだん かま ぐち ますがた
町を縦断する街道は構え口や枳形を設け
ておらず、防火を考慮した町割りが行われ
ました。また、南側には公的な宿所とし
て常用より興満寺が移されています。
さんざんこうたい さいしんこうさく
参勤交代の際に各国の行列を最初に迎える
ため、地租の免除、商業振興政策、町
屋の修繕や入居者誘致などへの財政援助
などの地域振興策がとられました。



尾島町

(123) 今寺穀留番所

いまでら ばんしよ
江戸時代、柳河藩との境に設けられた
えいど やながわはん さかい もう
久留米藩唯一の番所で、物資や人員の
くるめはんゆいいつ ぶつし じんいん

不法な出入国を取り締まりました。また富安（筑後市）・川合・祈寿院（八女市）の三ヶ所に下番所を設け、矢部川筋の警備にあたったといひます。通常は飾り槍や鉄砲を備えています。諸大名の参勤交代の際には全て取り外し、有馬家の紋の入った陣幕も下ろされました。明治2年（1869）の版籍奉還に伴い廃止され、現在は宅地となっています。

(124) 興満寺

尾島町の南側に位置する寺院です。もとは常用に開かれますが、延宝2年（1674）尾島町での公用の休憩施設として現在地に移されました。尾島町は参勤交代途上の諸大名への見栄として整備されたため、興満寺も広い敷地を与えられたようです。境内には尾島の合戦に由来する中世武士の墓を見ることが出来ます。

浅山小次郎重綱は室町時代の高名な連歌師でもあり、九州探題今川了俊に従って九州に下向します。しかし、尾島で肥後の菊池武朝の軍勢に打ち取られ、後に供養塔が建てられました。伝承には彼を平家の武士とするものがありますが、辞世の句とされるものに「市ノ塚」とあり、地名の興りからこれが誤りであるこ



興満寺

とが分かります。

津留崎石見守は戦国時代の豊後（大分県）鶴崎城主で、大友氏の配下として筑後に出陣したと考えられ、墓志銘には天正5年（1577）とあります。この前後には肥前（佐賀県）の龍造寺氏が筑後に出陣していることから、この争いの最中に戦死したと考えられています。



興満寺 浅山小次郎重綱墓所

(125) 光明寺

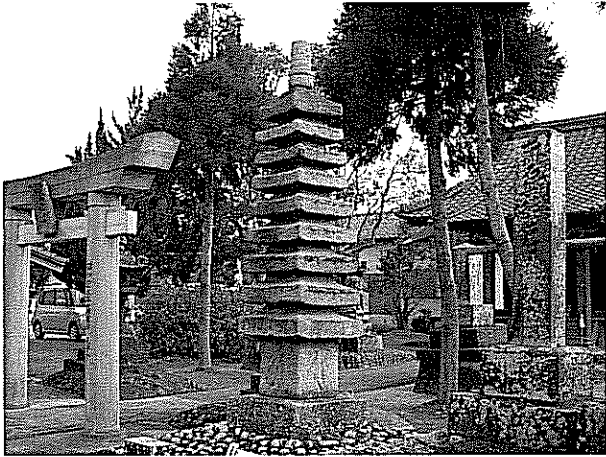
津島西にあり、市内で最も古い創建伝承を持つ寺院です。天平年間（729～748）、聖武天皇の勅願とされ、行基菩薩の開基創建、本尊の千手観音菩薩は行基の一刀三礼の彫刻で、勅により金光明経が



光明寺

納められ「^{こんこうみょうじ}金光明寺」と号しました。その後「光明寺」と呼ばれるようになり、平安末には末寺48坊という^{はんえい}繁栄を誇ります。ここにはその長い歴史を物語る^{ほんえい}伝承や文化財が多く残されています。

境内の「^{こうみょうじせきぞうくじゅうのとう}光明寺石造九重塔」は^{あんげん}安元年間（1175～1176）^{たいらのしげもり}平重盛が諸国36ヶ所の寺院に建立したもので、彼の^{みょうだい}名代として^{たいらのむねきよ}平宗清が^{ほうのう}奉納したと伝えられます。これは^{ろっこうさんけい}六甲山系の^{かこうがん}花崗岩製で、1290年前後の^{きない}畿内の作風に酷似しています。これは^{かまくら}県指定文化財として、^{かまくら}鎌倉中期の文化を今に伝えています。



光明寺 石造九重塔

楼門内に祭られた^{こうみょうじもくぞうにおうりゅうぞう}光明寺木造仁王立像は^{しょうとく}正徳5年（1715）に建立したものと



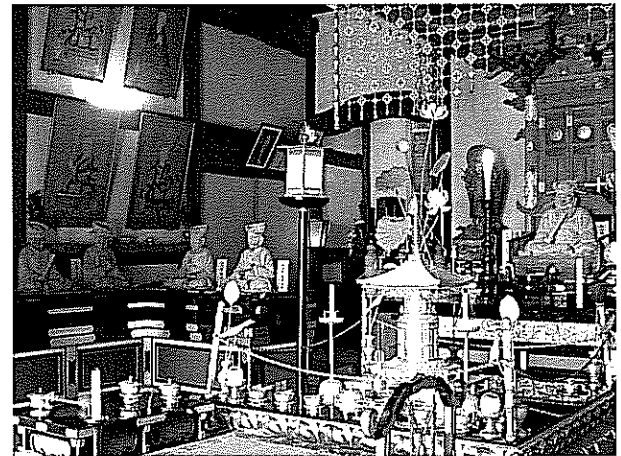
光明寺 木造仁王像（楼門内）

われています。^{めいぶん}銘文には「再興」「再建」とあり、^{うんぎょう}吽形には「^{たんけい}湛慶（^{たんけい}丹溪）」という人物の名が見えます。^{あぎょう}阿形は^{ひぜんさか}肥前佐賀、^{あぎょう}吽形は^{ひぜんさか}久留米の^{あぎょう}仏師によるもので、市指定文化財となっています。



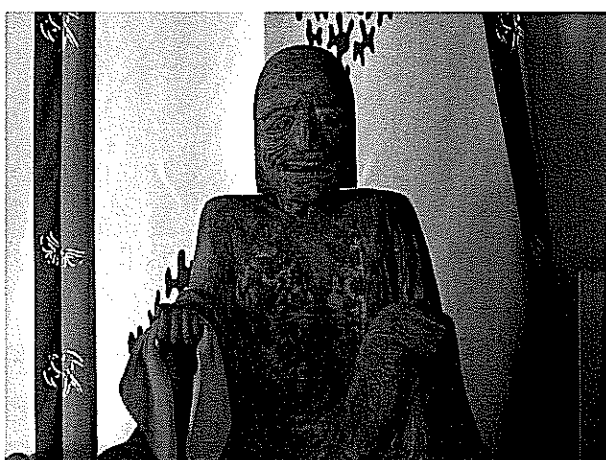
光明寺 木像仁王像（阿像）

「^{こうみょうじもくぞうじゅうおうざぞう}光明寺木造十王坐像」は^{じごく}閻魔大王を中心とした^{さいばんかん}地獄の裁判官の像で、それぞれが^{ほとけ}仏の^{けしん}化身とされています。^{むらまち}地獄信仰は、^{じゅうおうきょう}室町時代の『十王経』によるもので、^{せいさん}地獄の^{せいさん}凄惨さを伝えるため多くの^{せいさん}地獄絵図や^{せいさん}十王像が造られました。この坐像群は^{げんぶん}元文5年（1740）、^{ひぜんながさき}肥前長崎の大^{かわじりたんじまさかつ}仏師・川尻丹治正勝によるもので、^{さいしよく}元来は^{さいしよく}彩色が施されていました。現在市指定文化財となっています。



光明寺 木造十王坐像（一部）

十王像と一緒に祭られている「光明寺木造葬頭河婆坐像」も市指定文化財となっています。葬頭河婆は別名を脱衣婆といい、『十王経』では三途の川のほとりで亡者から着物を奪い取り、衣領樹の上にいる懸衣翁に渡す鬼女として登場します。光明寺の木造は、一見尼僧のような姿をし、手に衣を表現した布を持っています。作者や年代は光明寺木造十王像坐像と同じと考えられます。



津島西光明寺 木造葬頭河婆坐像

(126) 志天満神社

志の氏神で、菅原道真を祭ります。創建は文禄2年(1539)、市内に多くの神社・仏閣が開かれた時期のものです。

(127) 志冥宿稻荷神社

保食神を祭る神社で、有馬氏が丹波福知山(京都府)から久留米に転封された頃の創建といい、社紋に有馬家の家紋を使用することを認められています。一旦志の共同納骨堂に移されますが、御神託により元の位置に戻されました。ここには「妙宿」という古狐が住み着き、西向きに穴が掘られているそうです。この穴に関して、次の様な言い伝えがあります。

2代藩主忠頼が鷹狩りを行った際、ここを参詣しました。その時お宮の由来を尋ねた所、宮守はこう答えました。「このお稲荷様は、先君豊氏が丹波より御入国なされた折、後を慕ってこの国に参り、長く国の境目を守ろうとしてここに居られます。御覧のようにお城に穴を向けて掘っておられます。」これを聞いた忠頼公はさらに尋ねました。「そうであるならば、狐は後ずさりしながら穴に入っているのか(お城に尻を見せずに穴に入っているのか)?」そこでその夜の内に穴の向きを西側に掘り直したということです。



志 冥宿稲荷神社

(128) 津島東毘沙門神社

津島東区の集落北側に位置する、集落内で最も古い神社です。八幡神社が勧請される前は、村の氏神であったと言われています。

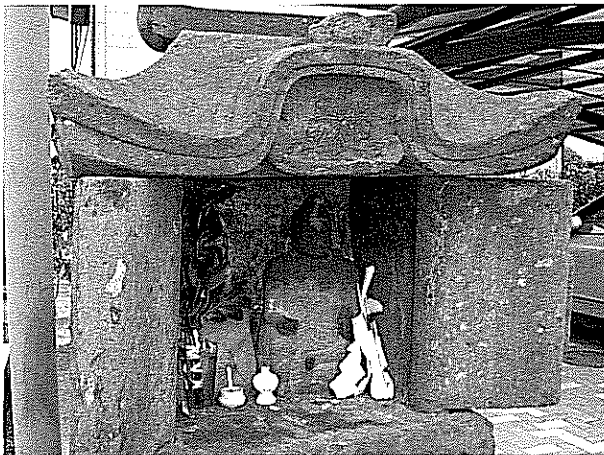
(129) 尾島石造夫婦恵比須坐像

尾島には金屋丁、下町の2ヶ所に夫婦恵比須像があります。

金屋町の夫婦恵比須は天明元年(1781)のもので、男神抱鯛・女神宝珠の定型化されたものです。この様な姿としては市

内で最も古いものです。

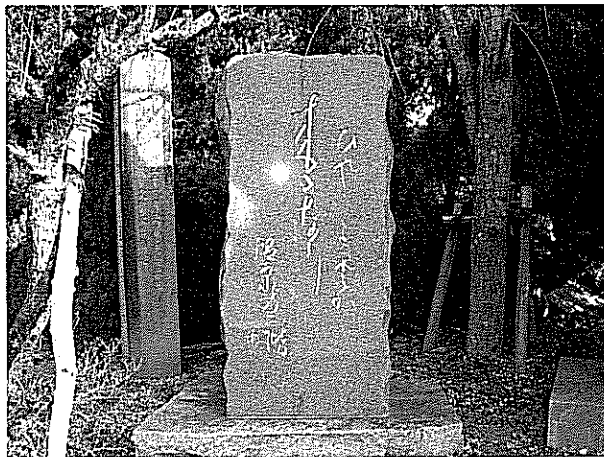
下町の夫婦恵比須は文化4年（1807）製で、女神の手の形が分かりませんが、髪は総髪となっています。



尾島金屋丁 石像夫婦恵比須坐像

(130) 夏目漱石句碑

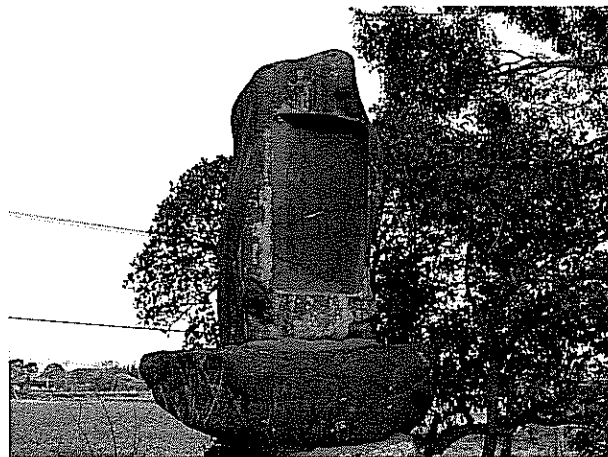
明治の文豪・夏目漱石は明治33年（1900）から3年間イギリスに留学、帰国後教職に就き、この頃から小説家として活動を始めます。彼は漢詩文をよくし、正岡子規と出会って俳句を始めました。漱石は明治29年（1896）、結婚1年目の鏡子夫人を伴い福岡へ旅行、途中船小屋へ1泊し、この時に詠んだ句を子規へ送っています。船小屋にはこの時の句碑が建てられています。



船小屋 夏目漱石句碑

(131) 尾上柴舟歌碑

尾上柴舟は岡山県出身、歌人として金子薫園と共に叙情詩運動を進め、また書家として仮名書では当時第一人者と称された人物です。彼は昭和16年（1941）船小屋を訪れ、いくつかの歌を残しています。矢部川のほとりには、彼の歌碑が地元有志により建てられています。



船小屋 尾上柴舟歌碑

(132) 下川三郎右衛門

江戸時代、尾島町を開いた人物です。彼は折地組大庄屋を隠居後、本尾島に移り住みました。ここは昔から矢部川の水害に悩まされており、この頃も大水害に遇っていました。村人は藩に安全な高台



尾島 下川大明神

への村の移転を願い出ます。三郎右衛門は、街道沿いの市ノ塚松原への村の移転を立案、実行することを許されました。

後に彼の功績を讃える祠が医学者の酒井義篤により建てられ、下川大明神として祭られています。また、尾島の共同納骨堂にも義篤による供養塔が建立されています。

(133) 秋津島浪右衛門

秋津島波右衛門(1697~1743)は下妻郡久郎原村(今の津島東)出身の力士で、幼少の頃から体が大きく力も強かったといえます。

彼には子供の頃の次のような話が伝わっています。

波右衛門は子供の頃から体は大きかったのですが、弱虫で近所の子供達にいじめられてばかりいました。そこで両親は、瀬高の清水観音様にたくましくなるよう願をかけお参りすることを彼にいつけ、それから毎朝2里(約8キロ)の道なりをお参りすることになりました。

こうして満願の49日目、いつものように観音様にお参りをすませた浪右衛門は、帰りの山道で子牛ほどもある大きなカブトムシと出くわしました。一本道なのでここを通らなければ家には帰れません。浪右衛門は泣き出しそうになりましたが、おそろおそろカブトムシに近づきました。するとカブトムシは角を振りかざして浪右衛門を押し倒そうとします。浪右衛門も負けてはならぬとこれを押し返しました。こうして浪右衛門とカブトムシとの押し合いが始まりました。

半刻(約1時間)ほどたったでしょう

か。浪右衛門はやつとのことでカブトムシを道の脇に押し出し、そこを通ることが出来ました。身体中もう汗でびっしょりです。そこで近くの石に腰を下ろし手ぬぐいで汗を拭くことにしました。手ぬぐいはすぐにびしょびしょになりました。浪右衛門は手ぬぐいをしぼるため力を入れてねじりました。すると手ぬぐいはぷつんと切れてしまいました。先ほどのカブトムシは観音様の化身で、浪右衛門は押し合いの間に観音様から力を授かっていたのでした。

浪右衛門は19才の時江戸(現東京都)に上がり、力士となって相撲に精進を重ねます。結果名人の称号を得、天下第一と称せられました。20数年間その偉力を天下に示し、49才で亡くなりました。

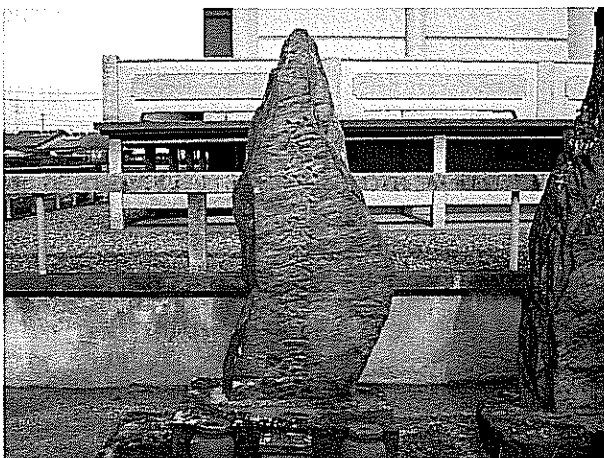
津島東区の東側入口には彼の供養塔が墓と並んで建てられています。これは文政年間(1818~1830)福島町(現八女市)出身の小結・揚羽によって建てられたものです。明治25年(1892)には力士祝川により150年忌の追善供養が行われ、修繕を施された上、玉垣と石段が築かれました。



津島東 秋津島浪右衛門供養塔

(134) 酒井義篤

酒井義篤（1759～1839）は御原郡古飯村（小郡市）出身の西洋医学者です。彼は尾島に「又新堂」を開き、西日本各地から集まった10人前後の弟子を常にかけていました。また文政5年（1822）、黒岩十右衛門と共に筑後地方で始めて刑死した罪人の解剖を行い、翌年『解体図志』を著しています。墓所は尾島共同墓地にあります。



尾島 酒井義篤墓誌

(135) 船小屋を訪れた文人達

船小屋には多くの人達が訪れ、作品を残しています。代表的な人物には次の人々があります。

本莊三郎（1807～1867）は八女市内山出身。崎村と号しました。兄星川が久留米藩校・明善堂の教官となると家業を継ぎ、私塾で子弟教育にも務めました。彼は経済に強い興味を示し、藩が殖産興業を始めるとこれに協力、薬紙製造や製鉄所を興しました。

船曳鉄門（1823～1895）は久留米を代表する国学者・神官です。久留米市大石の大石御祖神社の神官の家に生まれ、叔父の宮崎信敦に国学・和歌を学びまし

た。明治維新後は高良大社の宮司となり、この頃筑後地方の歌壇を指導、一方県からは筑後国史、地誌の編さんを依頼され、多くの業績を残しています。

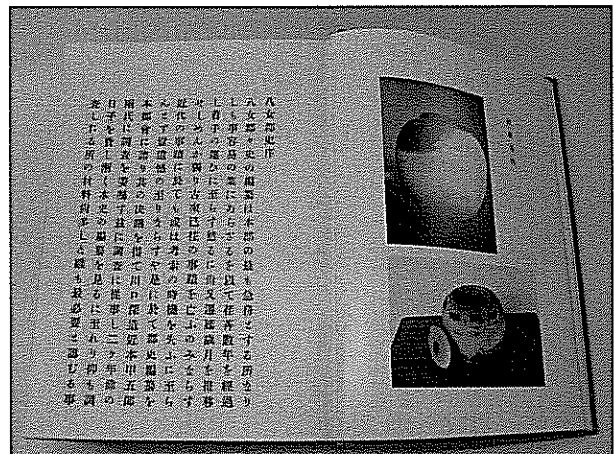
吉嗣拜山（1846～1915）は太宰府出身の画家。画家吉嗣梅僊の子に生まれ、四条派の絵を父梅僊、漢籍を広瀬淡窓、南画を中西耕石に学びました。明治4年（1871）の震災で右手を折り、彼の作品は「左手拜山」と呼ばれています。

宮崎来城（1871～1933）は久留米出身の漢詩人。苦学・貧困の中、作詩を続けますが、時代は小説随筆の隆盛にあり、関東から中国大陸・台湾を放浪、心を乱さず自己の詩情を高めたといえます。

この他にも多くの文人があり、彼らの作品は筑後郷土史研究会の『筑後水洗郷土史』の中にまとめられています。

(136) 近本甲五郎

近本甲五郎（1865～1923）は長く教職を務め、在職中から古文書の収集・調査を行いました。その足跡は熊本県にまで及んでいます。著書には八女郡古戦場、各小学校沿革史、真木保臣を始めとした勤王志士、矢部川水利関係など350冊に及びます。特に『稿本八女郡史』は2年



『稿本八女郡史』

に及ぶ大作で、現在でも郷土史資料として重要なものとなっています。

(137) 船小屋鉦泉の由来

船小屋では昔からわき水が吹き出ており、この上を飛ぶ雀がよく落ちたため、「雀地獄」と呼ばれていました。

文化年間（1804～1818）、ある老人が偶然この水を浴び続けた所、長年の病気が楽になりました。これを受け浴場を作ることになり井戸を掘った所、人夫が水気にあてられ長く作業ができない難工事となりました。浴場が完成すると、鉦泉の評判が広まり、多くの人が集まるようになりました。明治19年の分析の結果、この泉は含有量日本一の含鉄炭酸泉で、胃腸病・貧血症・婦人病・神経痛などに効果があることが分かりました。

その後船小屋は戦傷軍人の湯治場に指定され、多くの文化人にも愛されました。また昭和天皇や秩父宮殿下の訪問の際の宿泊もありました。ここを舞台とした流行歌も多く作られています。



船小屋 雀地獄

(138) 志の由来

志の名は南北朝時代に起源を持ちます。

正平6年（1351）、西征将軍宮・懐良親王を奉じた菊池武光は、関城（南関）・溝口城を攻略、瀬高を平定し、太宰府攻略の作戦を練っていました。この時南筑の五条氏・黒木氏・星野氏・川崎氏などは親王に味方し、志で北朝武士団に大勝したといえます。この合戦で多くの血が流れたためここを「血村」と呼ぶようになり、後に「志村」に改められたといえます。

(139) 甕蒙山

江戸時代のはじめ、志に近本市右衛門という、大変親思いの人がいました。彼の父はかつて過ちを犯し、親類や子供達から疎まれていましたが、一人市右衛門だけは孝養を尽し、父の死に際しても一人大いに悲しんでいました。

その後母も痛風を患い、市右衛門は傍を離れずに仕えました。母が外出する時は背負って送迎し、話を聞く時でも気を使ってお茶や好物のタバコを勧めていました。母が嫁いだ姉のもとで暮らしたいと言うと、彼はこれを叶え、美味しいものが手に入ると彼女へ届けていました。

村人達は、市右衛門を手本にしなければと考え、その孝行ぶりを藩に報告します。藩も彼を賞し、市右衛門は白銀を、母は葉を賜りました。村でも彼を村老に推挙しました。

母の死後、市右衛門は母が雨に濡れるのを嫌ったので、その墓に水田甕を被せ、窓を開けてお参りしました。後の人はその墓を「甕蒙山」と呼びました。

みず
水

た
田

ひられいし
(140) 平霊石

筑後中学校の西にある、平らな大石です。別名を「いぼ神（いぼ観音）さん」といい、マメを石の窪みに入れ、石に溜まっている水を局所につけるとイボを流してくれるという信仰があります。

考古学ではこれは朝鮮半島に起源を持つ「支石墓」と考えられます。昭和29年（1954）、石の下から甕棺が見つかり、中から人骨と4個の陰陽石が出土しました。この石は平霊石の下に埋納されています。

平霊石の周りにはかつて同じような石がいくつもあり、江戸時代末に運び出されたといえます。また筑後中学校建設の際、多くの甕棺が見つかり（未調査）、この一帯が弥生時代の墓域であったと考えられます。



平霊石

きつねづかいせき
(141) 狐塚遺跡

昭和43年（1968）から調査された弥生時代終末期（約1800年前）の遺跡です。当初、郷土史家・岩崎光氏の指導で発掘され、その重要性から九州大学に調査が引き継がれました。ここから出土した土器は、「狐塚式土器」と呼ばれ、この時期の指標土器となっています。



狐塚遺跡

みずたのしょう
(142) 水田荘

水田を中心とした中世の荘園で、太宰府天満宮安楽寺領、成立年代は不明ですが、領主の高辻家（菅原氏）の強い支配下にあり、一族の大鳥居氏などが荘官として下向します。後に大鳥居氏は在地領主化し、領主に強い発言権を有しますが、その要因は中世の武士による横領や半済施行による打撃を荘内名田の再編成で乗り切ったことによると考えられます。

みずたじょうあと
(143) 水田城跡

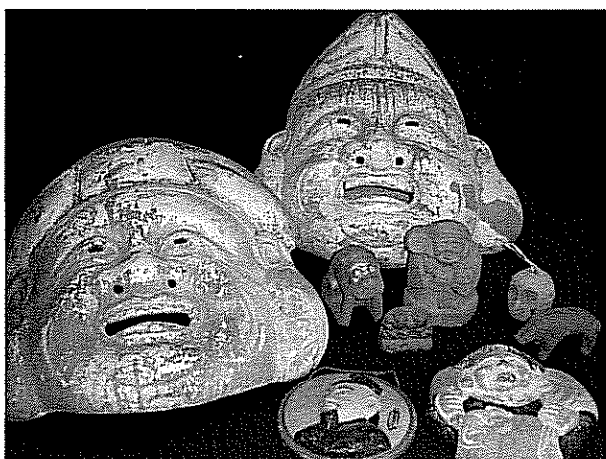
天正年間（1573～1592）、水田藤五郎の居城といい、現在の水田浄弘寺にあったと伝えられます。城には2つの倉があり、寺の東側に「上お倉」、西側には「下お倉」の地名が残っています。また集落の西側に「城ノ崎」の地名があり、水田城との関連が古くから指摘されています。

みずたやき
(144) 水田焼

天正年間（1573～91）、本田能登により興された焼物で、始めは神前に奉納する「かわらけ」を焼き、後に「半田土鍋」と呼ばれる風炉を得意としました。これは近藤家の作品が絶品とされ、大名間の

贈答品や将軍家への献上品とされました。

明治以降、水田焼は日用雑貨や土管、瓦（水田の赤瓦・青瓦）、人形などを作りました。人形は「水田人形」と呼ばれ、京都の伏見人形を参考にしています。小型品は彩色がなければ赤坂人形と区別出来ません。水田人形は主に正月や節句の贈答品にされました。水田焼は相次ぐ窯元の閉窯で、野町の1軒のみとなり、人形も作られていませんが、人形の型はここで保存されています。また水田焼の始祖である本田家には、その歴史を語る「本田家文書」が伝えられています。



水田人形（筑后市郷土資料館蔵）

(145) 山榎窩

嘉永5年～文久2年（1852～1862）、勤王家真木和泉守保臣が謹慎生活を過ごした家です。「山榎」とは「くちなし」のことで、藩政に口を出したために蟄居を命じられたから、以後は何も言わないという意味が込められています。

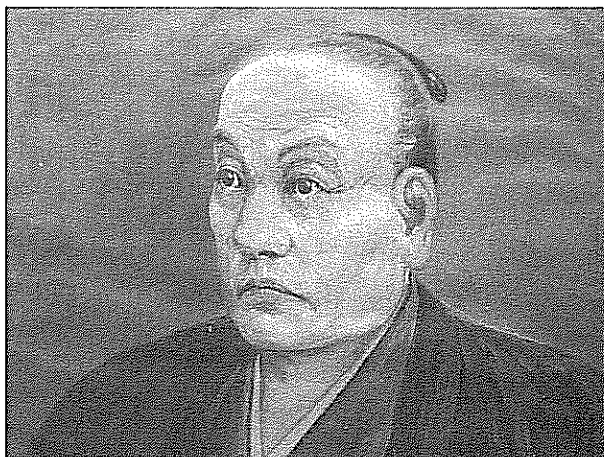
真木保臣（1813～1864）は紫灘と号し、国学・和歌をたしなみ、音楽にも明るい文化人。力士と見まがう体格で、弓術は免許皆伝の人物です。幼くして久留米水天宮の第22代神職を継ぎ、水戸遊学後、藩政改革に関与します。しかし藩主



山榎窩

有馬頼永の死とその後の藩政混乱により、神職を解かれ水田の大鳥居信臣方への蟄居を命じられます。水田では信臣宅の一角に「山榎窩」を建て、親類を含めた一切の面会を禁止されたにも関わらず、青年らの願いを聞き入れて子弟教育を行いながら各地の情報を集め、雌伏の時を過ごしました。

文久2年（1862）、薩摩藩の島津久光の上京を好機と見て脱藩、薩摩を経て京都伏見に入り「寺田屋の変」に遭遇、久留米へ送還されます。久留米では、藩の方針が定まらず保釈と拘束を繰り返し（「保臣捕り」）、翌年藩命を受け久留米藩親兵を率い上京、途中立ち寄った長州藩から信頼を得ます。京都では志士達から



真木保臣 肖像（久留米水天宮蔵）

「今楠公」と謳われ、孝明天皇より褒美を賜るなど目覚しい活躍を見せ、倒幕を進めようとしています。しかし「8月18日の政変」により、長州藩および三条実美ら勤王派の公卿7人が失脚、彼らと共に長州へ退きます（「七脚落ち」）。

元治元年（1864）、長州兵と共に浪士隊（清則義軍）を率い上京、「禁門の変（蛤御門の変）」に及び敗退。天王山に退き、事件の責任を取り自刃しました。

彼の思想は徹底した幕府否定・王政復古にあり、その行動理念は当時隆盛を誇った水戸学よりも南北朝時代の忠臣・楠木正成の姿にあったといえます。明治24年（1891）、正四位を追贈されました。

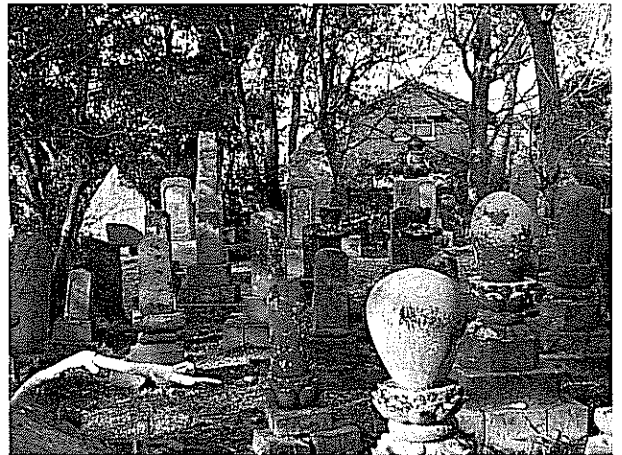
山梶窩は昭和43年（1968）、筑後郷土史研究会・山梶窩保存会により現在地に移築・復元がなされ、県指定史跡となっています。

(146) 来迎寺

水田天満宮と同時期の創建と考えられ、これと強い関係にある寺院です。明治の廃仏毀釈の際、水田天満宮から十一面観音菩薩など迎え入れ、この頃まで太宰府天満宮安楽寺の大鳥居氏の隠居地とされました。境内にはこの他水田天満宮の有



来迎寺 本堂



来迎寺境内 石造物群

力社家や郷土出身の勤王志士の墓を見ることが出来ます。

境内の石造物は、中世の信仰を今に良く伝えています。

「五輪塔」残欠はいずれも室町時代を下らない貴重なもの。完存品は銘文から元和元年（1615）に作られ、後に墓に転用されたと考えられます。

「宝塔」残欠は軸部のみが残り、四面を方形に削り貫き、蓮座仏像座像を浮彫りしますが、仏の姿が同じため四方仏ではないと考えられます。この宝塔残欠は肥後川尻の大慈禅寺のものと似ており、作られた年代は鎌倉から室町時代にかけてと考えられます。

「地藏笠婆塔」は笠がなく、薄肉彫りの座像が刻まれています。これは明応2年（1493）のもので、六地藏像前の地藏信仰を今に伝えています。

六地藏石塔は、室町～江戸時代初期の肥前系のもので、このようなものは、市内に多く見ることができます。

地藏立像は宝珠と錫杖を持つ「延命地藏」で、人々を救済するための姿といえます。この像は宝暦3年（1753）に作られたものです。

「来迎寺住職古墓群」は、最も古いも

のは大永^{だいえい}8年（1528）銘^{めい}の自然石板碑。太宰府別当職大鳥居氏の名を見ることができ、来迎寺の特色が強く表れています。

(147) 浄弘寺

文龜^{ぶんき}3年（1503）、下河^{しもかわ}（吉田^{よしだ}）資之^{すけゆき}が得度^{とくど}し、開いた寺院です。3代正空の頃、檀家^{だんか}は遠く筑前・肥前・肥後^{ひぜん ひご あまくさ}天草^{あまぐさ}にまで及んだといひます。ところが久留米^{くるとめ}藩二代藩主有馬忠頼^{ありまただより}は東本願寺派への転派を命じ、当時の7代玄了^{げんりょう}はこれを拒否。藩は寺に圧迫を加えたため、玄了は柳河藩領へ退出し、8代雲清^{うんせい}より東本願寺派となりました。

境内の五重塔^{きょうぼう}は享保5年（1720）の作で、一層目以外の屋根が八角形となる変わった形のもので、銘文に「本分村石工」とあり、八女市長野の石工集団の活動開始時を考える上で貴重な資料です。



浄弘寺

(148) 下北島大日如来堂

もと禅宗の大喜院宝光寺（放光寺）と^{ぜんしゅう だいきいん ほうこうじ}いい、久留米大善寺の末寺になります。このお堂には多くの仏像があり、本尊の大日如来像は二体、古いものは「応永^{おうえい}」（1394～1428）の銘^{めい}があります。



下北島大日如来堂

(149) 野町日吉神社境内 社日神祠

寛政2年（1790）に勧請^{かんせい}された野町日吉神社、その一角の社日神祠^{しゃにちしんほこら}も同じ年に祭られました。これは市内で最も古く、神像として表現された社日さんとして珍しいものです。神像は右手^{みぎて}に笏^{しやく}、左手に稲穂^{いなほ}を抱え、頭は烏帽子^{えぼし}を着用した姿をしています。この像は、羽犬塚^{はいぬづか}の社日神像と共に民俗的に貴重な資料といえます。祠と神像はともに市指定文化財。

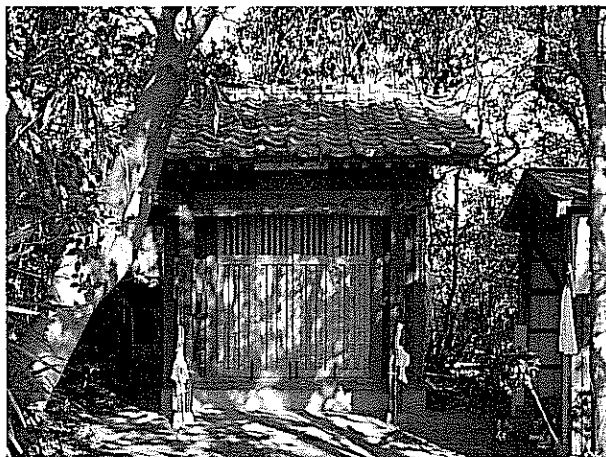


野町日吉神社境内 社日神祠

(150) 上北島印鑰社

筑後国守・道君首名^{ちくごのこくしゅ みちのきみおびと}を祭る神社で、正保4年（1647）、藩主^{はんしゅ}の武運長久^{ぶくわんちやうきゆう}を願い水田天満宮境内に祭ったと伝えられます。

首名は越国（北陸地方一帯）の豪族出身と考えられ、文武4年（700）藤原不比等らと「大宝律令」の制定に参与、和銅5年（712）遣新羅使、帰国後筑後守（肥後守兼任）となり、養老2年（718）任地で亡くなりました。彼は筑後・肥後両国にあって律令に則った統治を行い、灌漑事業を起します。これは人々に喜ばれ、死後、その徳を慕って印鑰社に祭られました。社名の「印」は国守の印鑑、「鑰」は古代の蔵のカギを表し、久留米市大善寺印鑰神社には、首名の墓といわれる「乙名塚」が残されています。



上北島印鑰社

(151) 水田天満宮

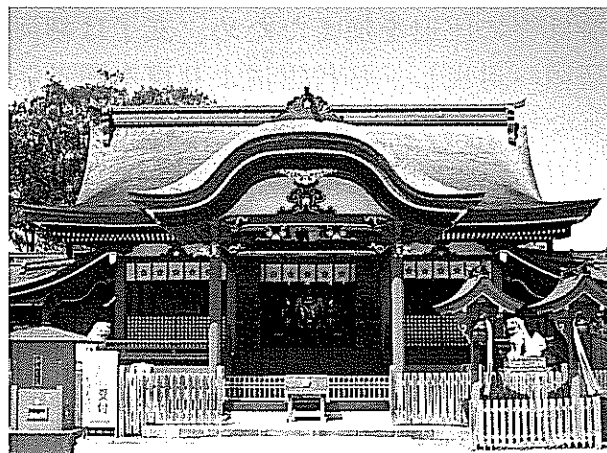
祭神は菅原道真。旧県社で、九州第二位の天満宮です。

社伝では道真の死後（903）、その徳を慕い建てられたといえます。太宰府天満宮は道真の墓所であり、神社としては水田天満宮が最初に建立され、墓所への参拝者が多いため、太宰府にも天満宮が造られたといえます。また、嘉禄2年（1226）後堀川天皇の勅命により菅原為長が再建したともあります。

歴史的には水田一帯は中世太宰府天満

宮安楽寺領であり、老松宮（祭神菅原道真）をここに祭ったのがその起こりで、為長の再建も創建の誤りと考えられます。天満宮と呼ぶようになるのは江戸時代の初めからで、九州第二位の天満宮に相應しく、多くの文化財が伝えられています。

「水田天満宮本殿」は寛文12年（1672）上棟。太宰府天満宮本殿の簡略化ですが、華やかな造形を持ち、九州第二位の天満宮に相應しいものといえます。県指定有形文化財・建造物に指定されています。



水田天満宮 本殿

現在天満宮社殿構内に安置されている「水田天満宮石造狛犬」は、元は境内の高良社（玉垂宮）の前に奉納されていました。慶長15年（1610）の作で、素朴でおとぼけな風貌をしています。この類は



水田天満宮 石造狛犬

ひぜんがたこまいぬ
「肥前型狛犬」といい、水田のものは県指定有形文化財・彫刻に指定されています。

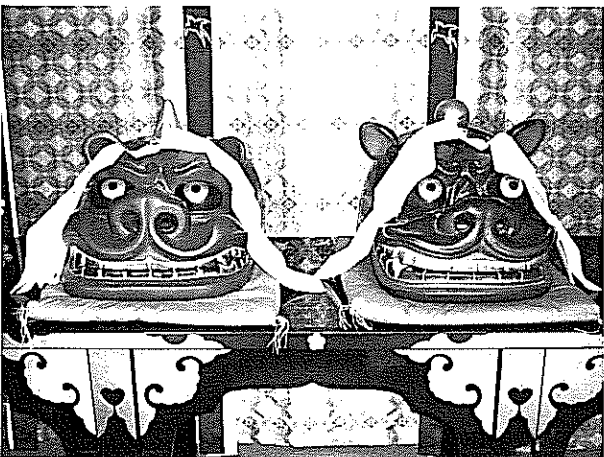
天満宮正面にある「石造鳥居」は、慶長19年(1614)筑後国2代国主田中忠政が花宗川の完成の年に奉納したものです。肥前型鳥居ですが、安永7年(1778)の修理の際、明神型の笠石に変えられています。県指定有形文化財・建造物。



水田天満宮 石造鳥居

けいちやうめいどうろうだいてう だざいふてんまんぐう
「慶長銘燈籠代燈」は太宰府天満宮の慶長年銘石燈籠と同じ様式のもので、現在の物は後の時代に作られた代燈で、実物は9代久留米藩主有馬頼徳が久留米に持ち去ったといわれています。

天満宮に伝わる「木造獅子頭」は、赤獅子と黒獅子の2種あり、赤獅子は誇張された表現をしています。黒獅子の方に



水田天満宮 木造獅子頭

「永正15年(1518)、願主快国・赤女、年嶋家政製作」と銘があります。この獅子頭は、室町時代の筑後地方の標準的な姿を今に伝えており、県指定有形民俗文化財となっています。

また、「木造火王水王面」は天文10年(1541)に作られたもので、火王は阿相、水王は咩相を持つ、一对のもので、この面は御神幸の際に、三又鉾に取り付けられ、行列の先頭を飾りました。これも県指定有形民俗文化財となっています。



水田天満宮 木造火王・水王面

境内周辺の「水田の森」は、クス・イチイガシから成ります。九州ではこのような森や巨木の天然記念物指定は多いですが、平地での樹木の繁茂ぶりは特別です。県指定天然記念物となっています。

水田天満宮の末社、「恋木神社」は別名を木本社。菅原道真附属の神とされますが、神名もその由来も分かりません。

水田天満宮を代表する神事には夏の「千燈明」と秋の「稚児風流」があります。

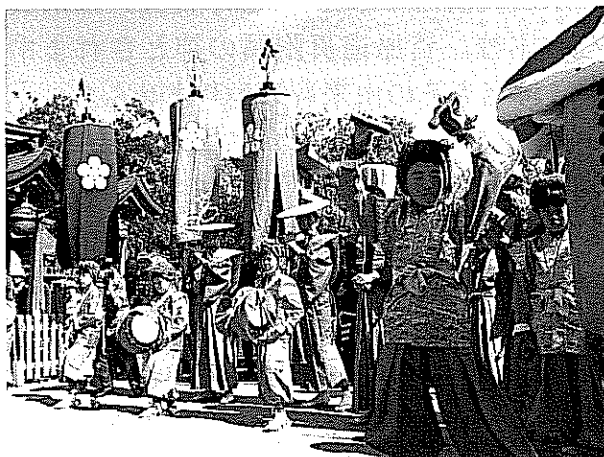
八女三大祭・筑後三大燈明祭とされる「水田の千燈明」は8月25日、天神さまの祭日に行われる火祭です。昼は氏子による「裸ん行」が行われ、禊をすませた後、日没を待ってちょうちんを手に神社に向

かいます。7時から檜や楼門につけられた灯明台に火が点され、幻想的な情景を描き出し、花火も打ち上げられ、人々の目を楽しませています。かつて筑後地方では、「よど」の祭りに多くの千燈明が行われており、特に水田・溝口・酒井田（八女市）のものは3大燈明祭として賑わいました。水田の祭は往時のにぎわいを今に伝えるものとして貴重なものとなっています。県指定無形民俗文化財。



水田天満宮 千灯明

水田天満宮の「稚児風流」は別称「ドイキャンキャン」。風流の多い筑後地方でも古い形態を残すといわれ、若年層から始まる年齢階梯制をもつ珍しいものです。行事は毎年10月に行われ、稚児は赤黄色い髪のような「シャグマ」を被り、さら



水田天満宮 稚児風流

びやかな陣羽織、鮮やかな緋色の「フングミ」（袴）、白足袋・わらじを履き、手甲脚絆のいでたちで、手に小太鼓と鉦を持ち、大太鼓に合わせて社殿や氏子総代の家の前で「ハーエンヤホイ、ヤーホイ」（「栄えあれ」の意）のかけ声に合わせて風流を奉納します。その後稚児を含む500人ほどの行列が神輿とともに、水田下町の「下宮」まで御神行を行います。県指定無形民俗文化財。

(152) 下北島大神宮

祭神は天照皇大御神。正保4年（1647）の創建です。境内に祭られる「瑞頼大明神」は、安永年間（1772～1781）の不作の時下北島の村人を救った庄屋・下川義七を祭ったものです。また、下川氏の祖先・鬼一法眼（牛若丸＝源義経の兵法の師匠）も一緒に祭られています。



下北島大神宮 瑞頼大明神

(153) 上北島天満神社

水田天満宮の末社で、祭神は菅原道真。神前に奉納されている石燈籠の文字は、幕末の勤王志士・真木保臣の揮毫と伝えられています。

のまちかすがじんじゃ
(154) 野町春日神社

寛政9年(1797)に建てられた「こくら」です。昔、村に疫病えきびょうがはやり、多くの死者が出ました。村人達が占うと、溜め池に神様が沈んでいると出ました。若者達が村中の池を寒い中探すと、御神体が見つかりました。村人達はこれをきれいにし、池の近くにお宮を建てお祭りすると、疫病はびたりと止んだと言います。

みずたなかまちいたび
(155) 水田中町板碑

「慶長七年(1607)、久誉滋長」の銘を持つ板碑で、来迎寺らいこうじに関係すると思われれます。しかし折地おりじの正観寺しょうくわんじにも同様の板碑があり、注意の必要がある遺物です。

だいち ろくじぞう
(156) 大地の六地藏

上北島印鑰社の横に祭られており、ばらばらにあったものを組み直し、古い形式にまとめられています。銘文には永禄5年(1562)と記され、2つある龕部はいずれも古く、室町時代むろまちのものと考えられます。特に完形を保っている方は久留米市寺町宗安寺の大永6年銘(1526)のものと大変似通っています。

じぞう
(157) かめかぶり地蔵

かつて上北島にあり、その名の通り素焼きすやの甕をかぶっていました。この周囲では以前多くの宝篋印塔ほうきょういんとうが出土し、踏んだり触ったりするとよく腹痛を起こしたとあり、線香を上げ、塩をふってあやまると腹痛は止んだと言います。

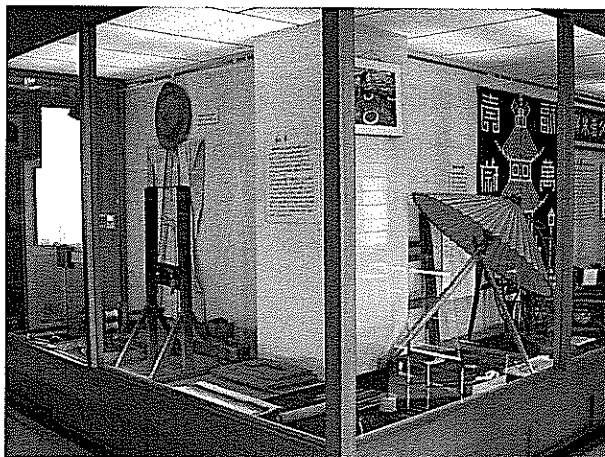
じょうざきけもんじよ
(158) 城崎家文書

みずたてんまんぐう
水田天満宮に関連の深い城崎家に伝わ

る近世文書。その中には水田ちつきよに蟄居ちつきよを命じられた真木保臣まきやすおみが水田天満宮に奉納した『菅家文草』かんげぶんそうが含まれています。

みずたわがさ
(159) 水田和傘

かつて筑後では、和傘がさかんに作られていました。契機となったのは明治16年、有馬家当主頼威よりしげが士族の生活援助のため、久留米くろめに赤松社あかまつしゃを操業したことに始まります。赤松社は久留米特産かすりの緋あかや籃胎漆器らんたいしつきのほか和傘にも着目、良質な品物の生産に務めました。結果、筑後の和傘業は大きな発展を遂げ、特に水田は和傘の町として知られるようになります。水田の油屋あぶらやは製造元として数々の賞を受け、組合の発展にも大きく貢献しました。水田和傘といってもその原料や部品は八女郡各地で分業され、品質管理を行う協同組合いずみは和泉に設置されました。しかし、戦後の西洋傘の流行が大打撃となり、現在は途絶えてしまっています。



水田和傘資料 (郷土資料館蔵)

(160) 水田の勤王志士

筑後からは真木保臣まきやすおみの薫陶くんとうを受けた多くの若者が志士として活躍しています。おとりいおとりいのぶおみ
大鳥居信臣(1817~1863)は保臣の

次弟で、水田天満宮・大鳥居家を継ぎました。保臣の蟄居後は彼の身柄を預かり、彼とその家族をよく助けたといひます。保臣脱藩の折、公用と称し一足先に藩を出ますが途中で拘束、久留米へ戻される途中の黒崎（北九州市）で、駕籠の中で自刃します。彼の遺志は息子の次郎・管吉、甥の宮崎土太郎に引き継がれました。

瀨上兄弟の兄・郁太郎（1837～1867）は、兄の死後父の勧めにより外科医術を学び、江戸遊学中諸藩の志士と交遊を深めました。帰国後は藩校明善堂の教官となり、一方で真木保臣・平野国臣と国事を談じました。文久2年（1862）長州へ脱藩するも捕らわれ、翌年許されるや上京し、勤王活動に奔走しました。

弟の謙三（1841～1866）は水田蟄居中の保臣に師事、彼が藩を脱する際にはその従者となりました。京に入り「寺田屋の変」に遭遇、久留米に戻されます。その後藩の親兵に選ばれ上京、三条実美の衛士に選ばれ、「8月18日の政変」以後もこの傍に付き従いました。

兄・郁太郎は「禁門の変」以降長州藩と薩摩藩の和解を模索、慶応元年（1865）幕吏に捕らわれます。ところが突如許されて帰国、同志は弟謙三と共にを5卿の



瀨上兄弟墓所（水田）

動静を探る密偵となったと疑いました。謙三は兄の潔白を信じ、義憤自刃。郁太郎は潜伏を余儀無くされます。しかし慶応3年（1867）に山門郡広瀬村山中で暗殺され、その耳は太宰府へ送られました。

この他門弟角大鳥居照三雄（1837～1873）は、保臣の水田脱出の際には、瀨上郁太郎と長州に赴き久坂玄瑞と連絡を取り、文久3年（1863）保臣と共に藩の親兵として上京、「8月18日の政変」後京で幕府の動静を調べ帰国し、久留米藩により牢に入れられます。維新後、「大楽源太郎事件」に巻き込まれ入牢。明治6年（1873）病を得て死去。水田来迎寺の墓には「角照雄墓」と書かれています。

門弟莊山敏功（1840～1907）は久留米藩親兵となり、真木菊四郎と共に長州藩の大砲購入を手伝い、維新後は公職に就き地域の発展に貢献、明治40年に死去。墓所は水田にあります。

門弟下川根三郎（1842～1892）も藩の親兵として上京、「8月18日の政変」後、帰国し入牢。慶応3年（1866）許され、以後は地域の発展に活躍しました。

（161）大鳥居信全墓所

大鳥居信全（1822～1871）は17才で太宰府天満宮安楽寺の大鳥居家27代として筑前に下向し、後に家名を西高辻に改めます。彼は太宰府天満宮安楽寺の充実に務めますが、明治元年（1868）の上洛の際、廃仏毀釈の空気を感取り、寺を廃して太宰府天満宮に一本化、以後も太宰府天満宮発展に貢献しました。

彼の墓は水田の来迎寺にあり、その墓誌には「西高辻従五位 菅原信全」と記されています。

こ
古

じま
島

しまだひがんだいせき
(162) 島田彼岸田遺跡

福岡県教育委員会が平成12年(2000)に調査した、中世の屋敷跡です。ここは屋敷をクリークで囲み、内部もクリークで仕切られていました。中世、筑後地方の平地の城館はこのような水城であり、クリークが農業灌漑以外にも利用されていたことを示す貴重な遺跡です。

しもむたやかた
(163) 下牟田館

この館を開いたのは中富入道了三といわれ、水田天満宮大鳥居氏の分家にあたり、戦国末期に下牟田85町を領有、領内に井田上玉垂命神社を勧請しました。この神社と水田天満宮とのつながりは深く、江戸末期まで天満宮の御神幸が玉垂命神社境内の松の木まで行われていました。屋敷跡には現在も中富入道の子孫の方が住んでいます。また入道の墓と伝えられる板碑も屋敷地内に残されています。

おりじくみだいしょうや しもがわけ
(164) 折地組大庄屋 下川家

久留米藩政初期に、折地組の大庄屋を務めた一族です。その祖先は源義経の兵法の師・吉岡鬼一法眼といわれています。尾島町の開墾を行った三郎右衛門も折地

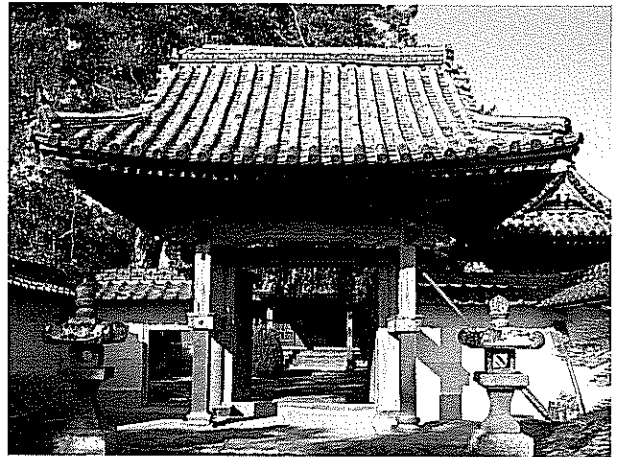


下川家墓所 吉岡鬼一法眼銅像

組の大庄屋職を務めたといえます。

しょうかんじ
(165) 正観寺

折地地区にある浄土宗の寺院です。天文15年(1546)の開山、寺号は奈良時代の高僧・行基菩薩の作と伝えられる正観音像を本尊としたので「正観音寺」と号しました。



正観寺 山門

じょうねんじ
(166) 常念寺

古島にある浄土宗の寺院です。開祖・清光を讀える石碑によると、もとは平家の武士・越中次郎兵衛盛次(のち金阿)の庵寺で、彼の死後も念仏が行われ、天文3年(1534)巖誉が開基したといえます。筑後地方の浄土寺院では古くから続



常念寺 本堂

き、かつては久留米の善導寺ぜんどうじに次ぐ賑わいほこを誇ほこりました。明治の神仏分離しんぶつぶんりの際、大鳥居信全おおとりいしんぜん揮毫きごうの梵字ぼんじなど多くの仏具を水田天満宮から引き取っています。残念なことに昭和55年（1980）火災にあい、多くの寺物が失われています。

(167) 浄光寺跡じょうこうじあと

井田上集落のはずれに地蔵じぞうさんが祭られています。ここにはかつて浄土宗浄光寺じょうどしゆうがありました。浄光寺は万治3年（1660）にこの地を離れたことが文書により伝えられています。

(168) 中島観音堂なかしまかんのんどう

島田の中島納骨堂なかしまのなかじまのなかじまにあり、多くの仏像が祭られています。ここには十一面観音像じゅういちめんかんのん、三十三面観音像さんじゅうさんめんかんのんのほか、久昌寺きゅうしょうじの薬師如来像やくしにょらい、脇持わきもちの日光にっこう・月光菩薩像がっこうぼさつ、十二神像じふにしんぞう、中島薬師堂なかじまやくしどうの薬師瑠璃光如来像やくしるりこうにょらい、弘法大師像くわんげだいてらなどが祭られています。久昌寺きゅうしょうじは水田来迎寺みずたらいこうじとの関係が深く、天正年間てんしょう大鳥居氏おおとりいから寺領を受けていました。元和年間げんな（1615～1624）までは寺住じじゆうがいたことが分かっています。しかし、その所在地は今でははっきりしません。



中島観音堂

(169) 道島観音堂どうじまかんのんどう

島田しまだにあり、男女2体の観音像かんのんぞうが祭られています。かつてこの近くに法釈寺ほうしゃくじという寺があり、観音像が祭られていたといわれており、この寺との関係が指摘されています。

(170) 折地太神宮おりじだいじんぐう

別名を「伊勢の宮」。折地の氏神うじがみで、祭神は天照大神。この神社の額は、幕末の太宰府別当職だざいふべつとうしやく・大鳥居信全おおとりいしんぜんによる揮毫きごうです。かつては毎年8月16日に相撲が奉納され、この日この館に足をいれれば出世すると言われていました。

(171) 古島老松神社こじまおいまつじんしゃ

古島の氏神すがわらのみちがねで、祭神は菅原道真すがわらのみちざね。創建伝承には、吉岡鬼一法眼よしおかきいちほうがんに由来するものもありますが、社伝には平家の武士・越中次郎兵衛盛次へいけ（のち金阿きんあ）によるとされ、文暦元年（1234）に勧請かんじゆうされたといわれています。後の修理の際に多くの棟記むねがきが見つかり、その中には当時の大工さんの落書きなどもありました。

ここに奉納ほうのうされていた「肥前型狛犬」へんは元和3年（1617）の凝灰岩製ぎようかいがんせい。水田の



古島 老松神社

ものと同じくおとぼけな顔をしています
が、20センチ前後と小さく、特徴的な前
足の削り貫きがなされていません。現在
は筑後市郷土資料館にて保管され、県指
定有形民俗文化財となっています。

(172) 北牟田玉垂神社

島田にある旧北牟田下村の氏神で、祭
神は高良大菩薩（武内宿弥）。永正8年
（1511）創建と伝えられます。北牟田村
は室町時代から水田荘関連の文書にその
名を見ることができます。

(173) 中島天満神社

島田にある旧中島村の氏神で、祭神は
菅原道真。元和4年（1618）の創建とい
います。中島村も北牟田村と同じく室町
時代から水田荘関連の文書にその名を見
ることができます。

(174) 井上玉垂神社

旧井上村の氏神で、祭神は武内宿称、
寛永11年（1634）に庄屋の下川氏により
勧請されたといわれます。井上村は中世後
半から水田荘関連の文書に登場します。

境内にあった板碑は、元和4年（1618）
中富入道が現世安穩を願って建てた大乘



井上 玉垂神社

典碑で、「釈迦如来」の梵字が刻まれてい
ます。また、入道が「菅原氏」ではなく
「藤原氏」と記している点も注目されます。

(175) 井田上玉垂命神社

祭神は武内宿称ら4柱。創建年代は
建長3年（1251）大鳥居法印、建治元年
（1277）中富入道了山勧請の2説があり
ます。この松は、かつて水田天満宮の
御神幸の目的地であり、その様子は大鳥
居信全の『水田天満宮御神幸絵巻』にも
描かれています。

境内にあった「三神名併刻塔」には稲
の神である「倉稲魂命」、風の神の
「級長戸邊命」、「オオツチノカミ」と同じ
と思われる「土祖神」の名が刻まれてお
り、地元では「社日神」としてお祭りし
ています。



井田 三神名併刻塔

(176) 井田下御霊神社

祭神は早良親王ら7柱。創建年代は
建治2年（1276）とも慶長6年（1601）
とも伝えられています。

(177) 北牟田六地藏

島田にあり、大永7年（1527）の銘を

持ちます。寛文10年（1670）の記録に「竿石れんげ石笠石斗り」とあり、早くに地蔵像が失われていたことが分かります。

(178) 井田下六地蔵石塔

江戸時代中期の地蔵像で、手にはそれぞれ異なる仏具を持ちます。この六地蔵の竿石は、筑後地方の一石造りでなく、佐賀地方の二石造りとなっています。

(179) 井上の「ふだらくさん」

井田の東屋敷観音堂のそばにある板碑で次のような言い伝えがあります。

むかし、ある若者が病にかかりました。彼は病が周りの人にうつってはいけない、そして自分のように病に苦しむ人が二度とでないよう、村が繁栄していくようにと願い、自ら穴を掘りその中で暮らし始めました。村人達は若者の気持ちに打たれ、彼によく尽しました。若者はカンを持っており、お腹が空くとこれを鳴らし、村人達は若者に差し入れを行いました。若者が亡くなると村人達は塚を作り、「ふだらくさん」と呼んで、毎年お祭りを行うようになりました。

その後井田では、火災や流行病が少な



井上の「ふだらくさん」

くなくなったといえます。

(180) 江崎権之丞

江戸時代、久留米藩に仕えた武士で、職を退き故郷の折地に帰りました。折地には柳川と福島（八女市）を結ぶ「福島往還」が村のはずれを通っていました。権之丞はこの道沿いに商家を始めることを藩に願い出ます。当時久留米藩は、新しい家を建てることを禁止していましたが、この願いをゆるし、道沿いに12戸の商家からなる造出村が生まれました。現在、権之丞の功績を讃える石碑が造出の中に建てられています。

(181) 大藪三河守基足

大藪三河守基足（1816～1861）は下牟田村の祠宮の家生まれ、藩校の明善堂教官。真木保臣の学友であり、保臣の水田塾居後、彼のもとを度々訪れました。勤王家として山梶窩に祭られています。その事蹟は伝えられていません。

(182) 中島忠蔵

中島忠蔵（1843～1922）は島田出身の農業研究家で、三化螟虫研究の糸口を見つけ、後の益田素平の研究に大きく貢献しました。明治30年（1897）宮崎県の招聘に応じ、南那珂郡飫肥町に転居、農事改良に尽しました。

(183) 吉武友作

吉武友作（1850～1917）は、若い頃から藨草生産に携わり、柳川藩の御用鍛冶武藤家に入出入りしながら、藨草用の鎌の改良の研究を重ねました。明治30年代、

やねふきかま
屋根葺鎌をヒントに始めてい き かま藺切り鎌を製作。これは筑後一円の人々に喜ばれ、広く使われるようになりました。

たなかせいじろう
(184) 田中静次郎

田中静次郎(1881~1979)は、若くしてござ織り機の研究にはげ励み、25才で「足踏花筵機織機」「足踏莫産機織機」を発明します。これはそれまでの織機に代り、莫産の生産量を著しく増大させました。その後も「糸経中継織機」、「足踏製筵機」、「廻転形製筵機」、昭和31年「全自動製筵機」を発明し、いぐさかこうぎょう藺草加工業の発展に大きく寄与しました。

さかもとともぞう
(185) 坂本友蔵

坂本友蔵(1893~1962)は折地出身の郷土史家で詩歌人。ふだんは農業、種物業を営み、神仏への信仰が篤い人物でした。彼は筑後西国33ヶ所めぐりの案内書を刊行。藺草の栽培を始めた大正院の研究を行い、筑後郷土史研究会を発足させました。詩歌人としても多くの作品を残し、観音信仰の精神が流れる作風を特徴とします。死後、折地しょうかんじ正観寺に彼を讃えた石碑が建てられています。



折地正観寺 坂本友蔵顕彰碑

しもがわひでき
(186) 下川秀樹

下川秀樹(1907~1980)は古島出身。京都大学文学部史学科を卒業後、教職につきます。昭和12年(1937)召集がかかかかりその年の杭州湾上陸作戦に参加、火野葦平の『土と兵隊』の砲兵将校のモデルとなりました。終戦後水田村村長、筑后市初代市長に就任しました。また、初代ちくこきょうどしけんきゅうかい筑後郷土史研究会会長も務めています。

こじま かっぱ
(187) 古島の河童

むかし古島には「二ツ橋の河童」という、威勢のよく腕つぶしの強い河童が住んでいました。その頃このあたりにはどこにでも河童が住み、縄張り争いのけんかが絶えませんでした。河童たちはけんかの度に二ツ橋の河童に加勢を頼みに行きました。けんか好きの河童は喜んで出かけていき、このあたりにその名を轟かせていたといひます。村人たちは二ツ橋の河童を怖がり、子供達が川へ泳ぎに行く時は「二ツ橋の河童に引かれないように」と言い聞かせていたそうです。

せいでん あらごろう
(188) 井田の荒五郎

かつて下牟田の若宮神社に祭られていた上半身裸で忿怒の相をした神像です。荒五郎は河童とする説と、荒御霊(はげしく祟りをもたらず強い霊を神様として祭ったもの)とみる説の二つがあります。しかし、井田の荒五郎は、古くから農業に欠かせなかった牛馬の守護神として人々に慕われていました。残念なことに、この若宮神社は平成3年の台風19号により大きく傷んだため、解体されました。

しも
下

つま
妻

(189) 常用遺跡

筑後市南部で古くから知られている弥生時代前期～中期の集落遺跡です。平成8年(1996)から本格的な調査が一部で実施されています。



常用長田遺跡

(190) 富安遺跡

富安集落の東側に位置する弥生時代の遺跡です。調査はまだ行われていません。

(191) 梅島遺跡

常用の西側、字梅島を中心とした弥生時代後期の遺跡です。ここからは筑後地方によく見られる「周溝状遺構」が多く確認されました。形状が一定でないこと



梅島遺跡

から、この遺構が作られ始めた頃のものではないかと見る学者もいます。

(192) 下妻郡

奈良～江戸時代末まで、市の南西部は「下妻郡」が置かれていました。奈良・平安時代は各郡に「郡衙」(役所)が設けられますが、下妻郡に関しては全く分かっていません。歴史地理学から郡衙の候補地は、大字和泉から若菜一帯と大字下妻が挙げられています。その理由として、前者には同時期の大規模集落遺跡「若菜森坊遺跡」などが所在すること、後者には大字名の「下妻」のほか字名に「郡女」「中道」「蔵屋敷」などが残されていることが挙げられます。

(193) 中牟田館跡

中牟田館は平家の武士、長島助高・盛高兄弟の居館です。彼らは源平合戦に参加せず、平家の家人として地方にいたものと考えられます。鎌倉幕府3代将軍実朝の代には66町あまりの土地を支配し、水田荘とも関係を持っていたことが伝えられています。ここには現在、二人を祀った助高・盛高天神が祀られています。



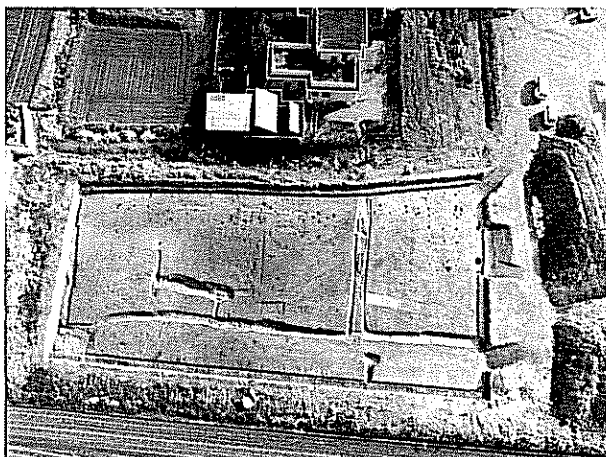
中牟田館跡 (助高・盛高天神)

しもつまのしょう
(194) 下妻荘

だざいふてんまんぐうあんらくじ
太宰府天満宮安楽寺領の荘園で、大字下妻が中心と思われます。文献などから鎌倉時代初期には成立しており、鎌倉末から南北朝時代に武士の横領を受けます。水田荘に大鳥居氏が下向すると、その支配下に入り戦国時代まで存続しました。

なかおりじうちぐりいせき
(195) 中折地内栗遺跡

へいせい
平成14年(2002)調査。15世紀を中心とした集落遺跡で、当時の水路、生産空間(畑?)が見つかり、多くの土器や陶磁器が出土しました。このような遺跡は佐賀平野に多く見られ、多くの共通点を見い出すことができます。



中折地内栗遺跡

なかむたじょう
(196) 中牟田城跡

おおとも つかもとだいぜん
中牟田天満神社付近にあった城で、大友氏配下塚本大膳の居城です。ここには肥前の龍造寺氏に備え、大友配下の武将が輪番で詰めていたといわれます。

よしだだいぜんじょう
(197) 吉田大膳城跡

現在の馬間田福部神社にあり、吉田氏代々の居城と伝えられていますが、詳し

いことはわかりません。



馬間田福部神社(吉田大膳城跡)

いぐちきいのかみぼしよ
(198) 井口紀伊守墓所

井口紀伊守は馬間田西端に所在した「馬間田城」の城主ですが、詳しい事蹟は分かっていません。井口観音堂のそばにある宝篋印塔は、井口紀伊守の墓所と伝えられており、この周辺の井口姓は、みな紀伊守の子孫だと言われています。そのひとつに紀伊守夫妻の位牌が伝わっており、延宝7年(1679)死去とあります。これは年代が合わないことから、子孫の物と考えられます。また宝篋印塔の銘文も元禄12年(1699)とあるので、供養塔と考えた方がよさそうです。



井口紀伊守墓所

とみやすしもばんしょあと
(199) 富安下番所跡

富安にはかつて穀留番所が置かれ、今寺番所の配下として領内の治安にあたっていました。ここには警備の足軽が配備されていましたが、現在はどのあたりに番所があったかなど分かっていません。

なかむたてんまんじんじゃ
(200) 中牟田天満神社

中牟田の氏神で、仁平元年(1151)、塚本大膳の勧請した八幡神社が、明治頃から天満神社になっています。境内には天正9年(1581)銘板碑などが伝えられています。楼門内に祀られている「肥前型狛犬」は彫りが浅く、他の物と比べると上出来とは言えません。作風から江戸時代中頃に制作されたものと思われま



中牟田天満神社

かみ
(201) しめの神

下妻の老松神社の境内に祀られている神様神様です。もとは下妻共同納骨堂近くの「しんぜ屋敷」に祀られ、下妻の集落を開いたと伝えられています。

さいこうじ
(202) 西光寺

中牟田にある浄土宗の寺院です。かつ

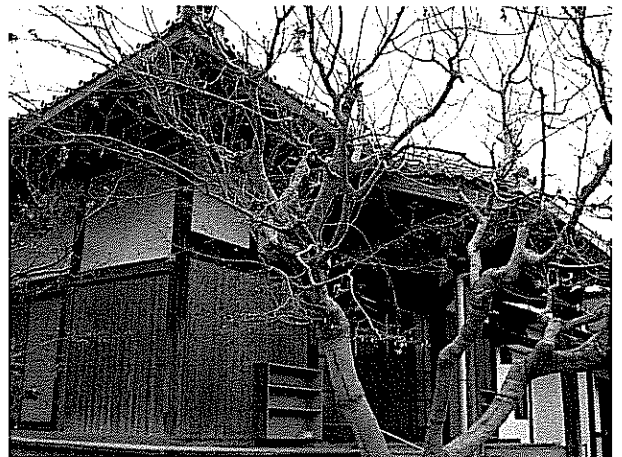
ては中牟田天満神社に近い「阿弥陀屋敷」にあった「養林庵」といい、神社とほぼ同時期に天台宗の寺院として建立、行基菩薩御作の仏像もあったといひます。文明年間(1469~1487)に浄土宗の寺院となり、天文4年(1535)、行誓上人により西光寺として中興されます。その後、大友氏と龍造寺氏の戦火に巻き込まれ焼失、現在の地に移りました。



西光寺

ちこうじ
(203) 地光寺

中折地にある浄土宗の寺院で、天文5年(1536)然誓上人により開かれたと伝えられます。境内には中世末から近世初期の板碑を見ることができます。



地光寺 本堂

かわぐちやくしどう
(204) 川口薬師堂

もと川口家敷地内で祭られたものです。この薬師如来はもとは宝寿寺の本尊であったといいますが、宝寿寺がどのような寺院であったか、なぜ薬師像が川口家に伝えられたのかは分かっていません。

ほっしょうじあと
(205) 発勝寺跡

昭和39年(1964)まで常用に所在した浄土宗の寺院です。この寺の寺物は、現在庄島の共同納骨堂に祭られています。ここには肥前唐津藩主寺沢広高・堅高親子の位牌が三宅藤右衛門によって祭られました。彼は寺沢家に仕えた三宅藤兵衛の子です。藤兵衛は富岡番代として肥後天草領のキリシタンを厳しく弾圧。結果、天草四郎らによる「島原の乱」を誘発し、武力による鎮圧を試み、本渡で戦死しました。藤右衛門は寺沢氏の改易後、山門郡瀬高村に浪居、正保2年(1645)肥後藩に出仕しています。また、境内には「法華経一石一字塔」があり、寺が解散となった時、下から9俵分の小石が出土しました。その後、文字の読めるものを集め、一部が水田の郷土資料館に、大半は常用の共同納骨堂に納められています。



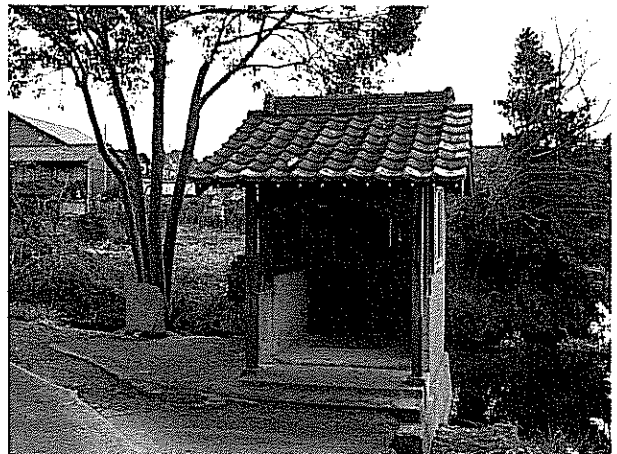
発勝寺寺田跡 (旧常用公民館跡)

りょうこくじあと
(206) 了国寺跡

富安の阿弥陀堂の場所に、所在したといわれる寺院ですが、詳しいことは伝わっていません。

ままだえいろくじゅうにねんめいいたび
(207) 馬間田永禄十二年銘板碑

馬間田の集落内にある板碑で、永禄12年(1569)福征寺の僧侶によって建てられたものです。碑の上部に大きな円相が刻まれており、地元では「めのまるさま」と呼ばれて、目の病気に御利益があると信仰されています。福征寺については何も伝わっていません。



福征寺跡

たいしょういん
(208) 大正院

大正院(?~1604)は、諸国行脚の途中、常用に立ち寄り、ここで新しい産業であった蘭草を栽培し始めたといえます。しかし、育成に必要な水の量に不安を覚え、馬間田に苗田を移して人々に蘭草の栽培法を広めて行きました。江戸時代の終わりには、この地域の蘭草業は特産の一つとして大きく成長をとげています。

大正院の功績を伝える文献や石碑は、矢部川の大洪水や火災により失われてしまいました。しかし、その墓は常用の共

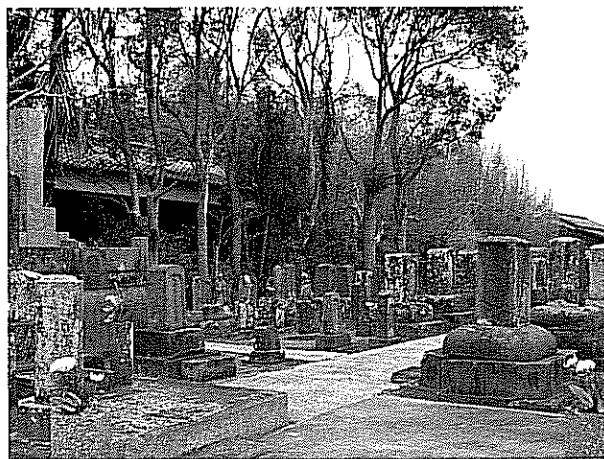
同納骨堂に移され、現在に伝えられています。また、「蘭草の神様」として毎年10月8日には大正院祭が行われています。



常用 大正院墓所

(209) ^{なかおりじぐみだいしょうや} 中折地組大庄屋 ^{おおたぐろけ} 太田黒家

太田黒家は折地の下川家の後を受け、明治2年(1869)まで大庄屋を務めました。その先祖は肥後出身で、下川家とは縁戚に当たるといいます。最後の太庄屋・太田黒子之吉は、下妻村が成立するとその初代村長となり、明治初めの動乱期に地域をよく指導しました。



地光寺 太田黒家墓所

(210) ^{みずたけんじ} 水田謙次

水田謙次(1831~1864)は庄屋の家

に生まれ、^{たかはしそへい}高橋素平、次いで^{みずた}水田山樞窩の真木保臣の下で修学・武道に励みます。長じて^{なかおりじ}中折地組総代・下妻・^{くちなしのや}富安村庄屋職を務めますが、この間も山樞窩を訪問、近隣の勤王志士たちと連絡を取っていました。後に、勤王活動を開始、京都の^{ちやうしゆう}長州藩邸に潜伏後、水戸の筑波山で拳兵、生死不明となりました。明治2年(1869)、^{くろめ}久留米藩は彼を^{たた}讀え、^{りやうぜん}京都靈山に碑を建てます。明治35年(1903)、追贈され従五位。^{たいしやう}大正2年(1913)になって、^{みと}彼が^{たけだこうらんさい}元治元年(1864)、水戸藩の^{かすみかうら}武田耕雲齋らと霞ヶ浦で拳兵、戦死したことが分かりました。下妻には謙次の薫陶を受けた人々により、石碑が建てられています。



下妻 水田謙次碑

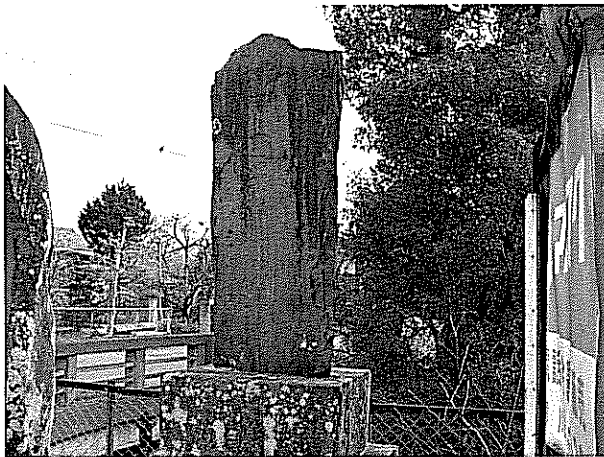
(211) ^{こがかんじ} 古賀簡二

古賀簡二(1839~1862)は^{つねもち}常用出身。始め兄嫁の井村姓、後に^{はっとり}服部家の家長となり、これを名乗りました。彼は水田の^{のぶおみ}大鳥居信臣に学び、謹慎中の真木保臣と出会って、勤王の志を抱くようになります。文久2年(1862)、保臣が水田を出たことを知り同志と共に脱藩、京都へ向かい、この時から姓を古賀へ戻しました。彼らは保臣一向と大阪で合流、薩摩藩の

きゆうしんてききんのうは
急進的勤王派と落ち合うため伏見に入り、
「寺田屋事件」に遭遇します。簡二は保臣
らと共に投降し、大阪の久留米藩邸に送
られます。この間風邪をひいていた簡二
は体調を崩し、23才の若さで亡くなりま
した。明治2年(1869)、久留米藩は彼
を讃え、京都霊山に碑を建てます。明治
35年(1903)、追贈され正五位。

(212) 水田寛作

ぶんか
文化14年(1817)、しもつま くる めほん
下妻村(久留米藩)
と上流の本郷村(柳川藩)の間に水争い
が起こり、下妻一帯に水が流されなくな
る事件が起こりました。久留米藩は問題
解決の調停に失敗し、大門口から下妻へ
新しい水路を築きますが、これも設計ミ
スにより水がうまく流れず、人々は水不
足に大変悩まされていました。水田寛作
は明治2年(1869)下妻村庄屋、同8年
(1875)下妻・馬間田・富安の戸長に
就任、水問題を解決するために奔走しま
す。彼は周辺の村々の了解を取り新溝の
水路を塞ぎ、紛争前の水路を復旧させ、
水問題は60年ぶりに解決することができ
ました。寛作はこのために私財のほとん
どを使ったといいます。村人は下妻に碑
を建て、彼の功績を今に伝えています。



下妻 水田寛作碑

(213) 與田準一と『赤い鳥』

たいしやう
大正時代、児童中心主義という芸術教
育運動が提唱され、その一つに『赤い鳥』
という雑誌があります。大正末に下妻尋
常小学校の教諭となった與田準一(1905
~1997)は、これに生徒の作品を投稿、
3年間で40人・137篇の作品が掲載され
ました。選者の1人・北原白秋は、これ
らの作品に温かく感動的な評価を贈って
います。後に準一は上京、白秋に師事し、
児童文学作家として活躍、多くの賞を受
賞しました。

(214) モヘジ観音

つねもちてんまんじんじゃけいだい
常用天満神社境内に祀られている観音
様です。むかし、この観音様がなくなる
事件が起き、村中で火災や災難が続くよ
うになりました。しばらくしてお宮の前
の堀の中から観音様が見つかり、村の女
達によってきれいにされ、お堂に戻され
ました。するとそれまで続いていた災難
が止んだといいます。この観音様は今で
も火災除けの神様として、毎年8月12日
に女性たちによってお祭りが行われてい
ます。



常用天満神社 モヘジ観音

(215) やんぼっさん

常用^{つねもち}踏み切りのそばに祀られている小さな祠を「やんぼっさん」といいます。昔ここには自然石があり、柴^{しば}が生い茂^{しげ}つてりおり、ここの枝を折ったりすると「さわり」があると、人々の噂^{うわさ}になっていきました。人々は「考えさん」という人に、なぜそのような事が起こるのか聞いてみました。すると、ここで亡くなった「やんぼっさん」の祟^{たたり}りということが分かりました。そこでここに祠を作り、丁寧に祀りするようにしたということです。



常用 やんぼっさん

(216) 水天宮の鏡

中牟田^{なかもた}にある水天宮^{すいてんぐう}には、御神体^{ごしんたい}として鏡が祀^{まつ}つてあります。ある時、ドロボウがこの鏡を盗^{ぬす}みだしました。ドロボウが鏡を覗^{のぞ}き込むと、歪^{ゆが}んだ自分の顔が写し出されています。驚^{おど}いたドロボウは鏡を投げ捨^すてて逃げ出^にしていきました。通りかかった人が鏡を拾^{あま}うと「厄御前^{あまごぜん}」と墨^{すみ}で書いてあったので、水天宮に持っていったということです。

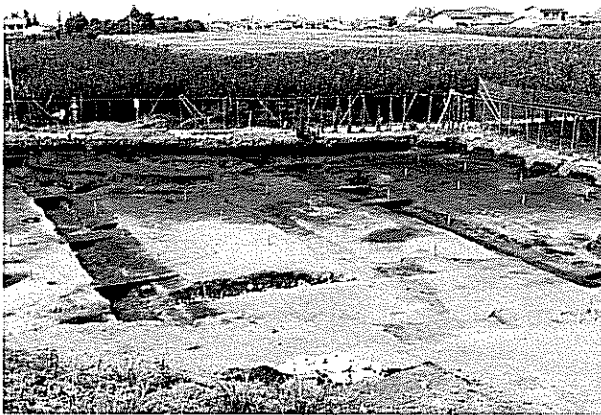
こう
広

いき
域

(217) 西海道跡

奈良時代は天皇を中心とした中央集権国家の建設が行われます。その一環として各地を官道で結び、伝令の馬を交換するための駅家が設けられました。これは中央からの命令が速やかに地方へ伝えられるためと、地方での叛乱に対し素早く軍隊を送るのに必要不可欠なものでした。

九州に作られた官道は「西海道」と呼ばれ、筑後市の中心を縦断することが確認されています。また、市域には「葛野駅家」があったという説があり、候補地として羽犬塚が挙げられています。



西海道跡 (羽犬塚山ノ前遺跡)

(218) 薩摩街道



薩摩街道 (赤坂付近)

中世から近世の街道の一つで、「坊津街道」「肥後往還」「肥後大道」とも呼ばれています。「薩摩街道」の呼び名は、薩摩藩が参勤交代の際によく利用したことによります。街道筋は時代により変わり、道幅も車1台が通れるほどでしたが、戦時中に物資輸送の名目で広げられています。現在は薩摩街道を元にした国道209号が物流の重要路線となっています。

(219) 福島往還

筑後国守田中吉政が、居城柳川と各拠点をつなぐために整備した道路の一つで、柳川から水田を抜け、八女福島城へと続いています。物流は山ノ井川・花宗川の水運が利用されたため、在郷町などの発展は見られませんでした。

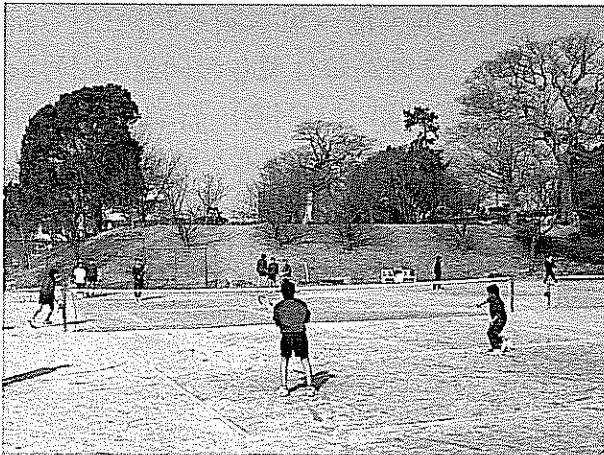


福島往還 (水田小学校付近)

(220) 柳河田中藩

関ヶ原の戦い(1600)で石田光成を捕らえた功績により筑後国守となった田中吉政は柳河を居城としました。このため田中家は柳河藩とも筑後藩とも呼ばれます。吉政は入国後各地で土木工事を起し、市域では山ノ井・花宗川の改修や福島往還の整備が行われました。しかし、二代

ただまさ
目忠政のお家騒動もあり、忠政の死後改
易となっています。



柳川城 (天守跡)

くるめありまはん
(221) 久留米有馬藩

たなか
田中家断絶後、上筑後の領主として有
馬豊氏が入封、久留米城を居城としまし
た。久留米藩は田中藩の事業を引き継ぎ、
市内では新たに西牟田町の復旧、尾島町
の開墾などを行います。しかし藩の成立
当初から大事件に巻き込まれ、17世紀末
から財政難が表面化、一揆や空米事件を
ひき起こします。9代藩主頼徳は御庭焼
の柳原焼の焼成を赤坂焼の緒方家に任せ、
領内の石造美術品を持ち去るなど筑後市
と深い関係を持ちます (現在石造美術品
は散逸)。幕末には改革を目指し有馬頼永



久留米城 (篠山城)

が10代藩主に就任しますが早世、真木保
臣に代表される尊王・佐幕の政論も大き
く、混乱のまま明治を迎えました。

やまのいつつみ
(222) 山ノ井堤

やめしうちやま ほしのがわ ぶんりゅう
八女市内山で星野川より分流し、筑後
市の中心を流れる山ノ井川は別名「山ノ
井堤」とも呼ばれる人工河川です。江戸
時代には若菜・富重・江口に井堰が設け
られ地区の水田を潤しまいたが、水害に
見舞われることが多く、昭和44年 (1969)
現在の姿に改修されました。



山ノ井川 (羽犬塚付近)

はなむねがわ
(223) 花宗川

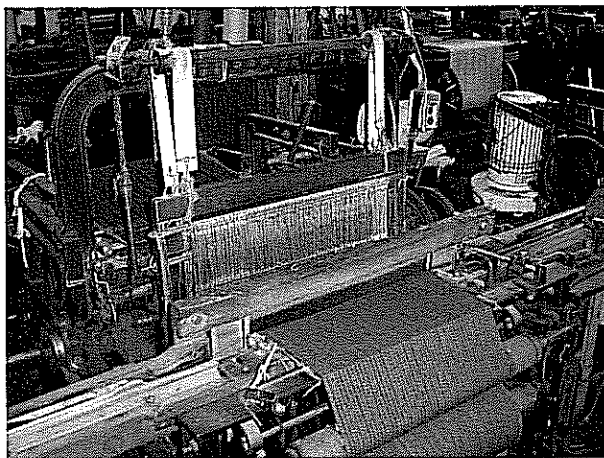
やめしつえ はなむねいせき やべがわ ぶん
八女市津江の花宗井堰で矢部川から分
流し筑後川へと注ぐ人口河川で、典型的
な天井川です。この工事は柳河藩主立花
宗茂が着手、その後筑後国守田中吉政に
引き継がれ完成したといい、宗茂を讃え
てこの名がつけました。取水口の花宗井
堰は矢部川の井堰で最も古く、管理は後
の久留米藩にとって最も重要で、流域の
村々には取水に関する細かな取り決めが
なされていました。現在でも花宗川は八
女市・筑後市・三潞郡の重要な用水河川
となっています。



花宗川 (富久付近)

(224) 久留米かすり

木綿を原料に、経糸・緯糸のかすり
 (白色) 部分を糸でくくり、藍で染め製織
 する織物です。寛永末 (1800年頃) 久留
 米の井上伝により考案され、農家の復業
 として久留米・八女郡・三潴郡を中心に
 製作されました。その素朴さと丈夫さは
 西南戦争によって全国に広まりました。
 戦後は生活様式の変化により生産量は減
 少しました。昭和51年 (1976) 国の伝統
 的工芸品に指定。筑后市から広川町にか
 けては生産の中心となっています。



久留米かすり工場 (西牟田)

(225) 南筑軌道

明治36年 (1903) には開業した、羽犬塚

から福島を通り内山を結んだ鉄道で当初
 の名称は「南筑馬車鉄道」。後に黒木軌道
 と合併し、羽犬塚～黒木間を約90分で結
 びました。その路線は現在の国道442号沿
 いで、大正4年 (1915) 石油ガス発動
 機機関車を導入、「ポンポン軌道」と呼ば
 れ親しまれました。昭和15年 (1940)
 国鉄矢部線の開通に伴い閉業しました。



南筑軌道跡 (停車場付近)

(226) 三潴軌道

明治41年 (1908) には開業した、羽犬塚
 から榎津・若津 (大川市) を結ぶ鉄道で、
 支線は榎津から柳川。地元有志により開
 業し、人員と木材を運搬しました。路線
 は現在の国道442号沿いになり、市内の
 停留所は羽犬塚・長崎・富久・四ヶ所に



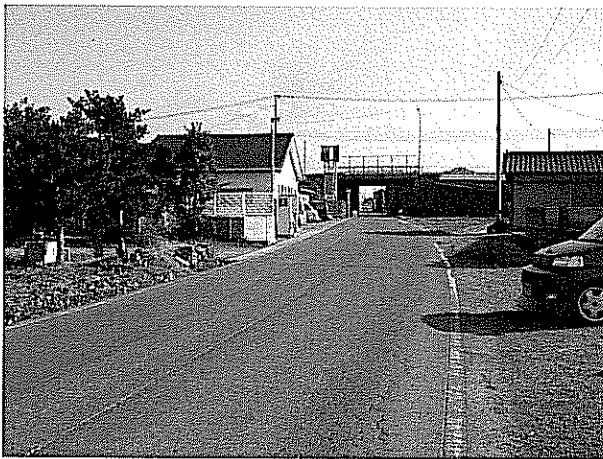
三潴軌道跡 (和泉付近)

ありました。久留米へ直接乗り入れ出来なかったため経営が苦しく、昭和5年(1930)閉業しました。

(227) 国鉄矢部線

羽犬塚と黒木を結んだ鉄道です。大正15年(1926)に出された計画では、羽犬塚から大分県竹田を結ぶ、林・鉦業の発展と観光を目的とした経済路線として申請されました。しかし、久留米～熊本の路線計画、添田線との優先順位決定などもあり、羽犬塚～矢部間を着工することが決定したのは昭和11年。その後も太平洋戦争などの余波を受け工事は度々中断、開通は昭和20年(1945)2月でした。

矢部線は主に物資輸送を行う路線として活躍しましたが、日向神ダムの完成(1960)以降輸送量は減少、平走道路の整備が進むと乗客はバスや自家用車に移り赤字路線化、昭和60年(1985)廃止となりました。



矢部線跡 (野町付近)

(228) カササギ

カササギは朝鮮半島原産の鳥で、現地では「カッチ」、佐賀では「カチガラス」、筑後では「コウライガラス」「コウゲガラ

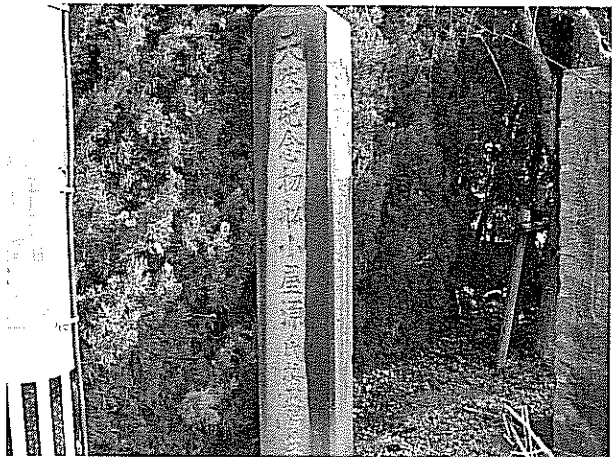
ス」とも呼ばれています。その渡来については、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、立花宗茂(佐賀では鍋島直茂)が持ち帰ったと言われています。山地を越えることが出来ず以前は佐賀県南部・筑後地方で見られませんでした。近年の造成で山が削られたため、生息地域が拡大しています。佐賀県・福岡県の一部では国の指定天然記念物。



カササギ

(229) 船小屋のゲンジボタル

ゲンジボタルは5月頃から現れる最も大型のホタルで、幼虫はきれいな川に住みカワニナという貝を食べ、川底で越冬し、春に土手に穴を掘りサナギとなります。現在では農薬や生活排水による水質



船小屋源氏蛍発生地之碑

あつか 悪化、^{こがんこうじ}護岸工事による土手のコンクリート化によってその^{せいそくち}生息地は大きく減少しています。船小屋はゲンジボタルの発生地として早くから天然記念物に指定されていましたが、他の地域と同じようにその数が減少しつつあり、船小屋ゲンジボタル保存会などにより、その^{せいそくかんきょう}生息環境の^{ふくげんどりよく}復元努力がなされています。

(230) よど

^{ちくご}筑後地方で^{きゅうれき}旧暦の6月に行われた^{なごし}夏越祭の^{そうしやう}総称で、^{じんじやぶつかく}神社仏閣の^{せんとうみやう}区別はありません。以前は各地で千燈明が行われ、「かめの葉まんじゅう」や「こうばし」などを^{しんぶつ}神仏に^{そな}供えていました。また各所で出店がでるなどたいへんにぎやかなものとなっています。

ふ ろ く

筑後市内指定文化財一覧表

筑後市の祭り一覧表

筑後市略年表

さくいん

参考文献一覧表

筑後市内指定文化財一覧

区分	名称	種別	所在地	銘文(築造、創始年代)	所有者/管理者	指定年月日	備考
国	久留米餅	無形文化財	筑後市ほか4市町村		久留米餅 技術保持者会	昭和32年 4月25日	久留米井上伝女創始
	石人山古墳	史跡	筑後市大字一条 八女郡広川町大字一条		広川町	昭和16年 3月27日	八女古墳群
	カササギ生息地	天然記念物	筑後市ほか (旧三瀬郡を含む市町村)		筑後市ほか	大正12年 3月 7日	
	船小屋ゲンジボタル生息地	天然記念物	筑後市大字尾島・溝口・ 北長田・津島・瀬高町		農林水産省 日田営業所	昭和16年 3月27日	南筑橋より中之島公園西端までの間
県	水田天満宮本殿	建造物	筑後市大字水田 水田天満宮	寛文12年(1672)再建	水田天満宮	昭和36年 4月18日	平成4年(1992)解体修理
	水田の石造鳥居	建造物	筑後市大字水田 水田天満宮	慶長15年(1610)	水田天満宮	昭和36年10月21日	筑後岡主田中忠政奉納
	光明寺の石造九重塔	建造物	筑後市大字津島 光明寺		光明寺	昭和36年10月21日	伝 平重盛建立 平宗清奉納
	坂東寺の石造五重塔	建造物	筑後市大字熊野 坂東寺	貞永元年(1232)	坂東寺	昭和36年10月21日	
	熊野神社の眼鏡橋	建造物	筑後市大字熊野 熊野神社	元禄10年(1697)	熊野神社	昭和57年 4月 1日	県下第二の古い有銘眼鏡橋
	寛元寺文書	書籍	筑後市大字西牟田1791 寛元寺		寛元寺	昭和50年 8月14日	
	滑石経	考古資料	筑後市大字水田12-1 筑後市郷土資料館		筑後郷土史研究会	昭和30年 3月 6日	王平(壬平)3年(1153)銘 小塔共伴
	山崎窩	史跡	筑後市大字水田242-1	嘉永6年(1853)	筑後市	昭和44年10月20日	勤王家真木和泉守保臣隠居地
	水田の森(楠・イチイガシ)	天然記念物	筑後市大字水田 水田天満宮		水田天満宮	昭和36年10月21日	
	筑後の手すき和紙	無形文化財	筑後市 八女市		手すき和紙保存会	昭和47年11月18日	文禄4年(1595)福王寺住職 日源創始
	掛川(花ゴザ織り)	無形文化財	筑後市大字富久794 松永トヨ子		松永トヨ子	平成 8年 7月 3日	
	木造獅子頭	有形民俗文化財	筑後市大字水田 水田天満宮	永正15年(1518)	水田天満宮	昭和36年11月14日	
	木造火玉水玉面	有形民俗文化財	筑後市大字水田 水田天満宮	天文10年(1541)	水田天満宮	昭和36年11月14日	
	石造狛犬	有形民俗文化財	筑後市大字水田 水田天満宮	慶長15年(1510)	水田天満宮	昭和36年10月21日	肥前型狛犬
	石造狛犬	有形民俗文化財	筑後市大字水田12-1 筑後市郷土資料館	元和3年(1617)	筑後市郷土資料館 (預託)	昭和37年 7月26日	筑後市大字古島 老松神社 肥前型狛犬
	稚児風流	無形民俗文化財	筑後市大字水田 水田天満宮		水田天満宮	昭和31年 1月19日	10月25日 筑後地方でも古い形態を残す
	千灯明	無形民俗文化財	筑後市大字水田 水田天満宮		水田天満宮	昭和35年12月21日	八女三大祭、八女三大千燈明 祭、8月25日
	熊野神社鬼の脩正会	無形民俗文化財	筑後市大字熊野 熊野神社		熊野神社	昭和44年10月20日	1月5日
	久富の盆綱曳き行事	無形民俗文化財	筑後市大字久富 熊野神社		久富観音堂 盆綱ひき保存会	平成 8年 7月 3日	8月14日 寛永3年、寛永20年創始の2説
	市	木造仁王像	彫刻	筑後市大字津島 光明寺	正徳5年(1715)再興 天保4年(1833)再建	光明寺	平成15年 6月 4日
木造十五坐像 木造然御頭河婆坐像		彫刻	筑後市大字津島 光明寺	元文5年(1740)	光明寺	平成15年 6月 4日	長崎大仏師川尻丹治正勝作造
欠塚古墳		史跡	筑後市大字前津1784-B		筑後市	平成 4年12月14日	八女古墳群
壱門神社社殿		天然記念物	筑後市大字溝口 壱門神社		壱門神社	平成15年 6月 4日	
社日神石・神像		有形民俗文化財	筑後市大字野町 日吉神社	寛政2年(1790)	野町行政区	昭和63年 1月29日	市内最古の社日神神像
恵比須石祠・神像		有形民俗文化財	筑後市大字羽火塚 六所宮	享保18年(1733・石祠) 正平12年(1357・神像)	恵比須保存会	昭和63年 1月29日	国内最古の有銘双対恵比須神像 1月10日恵比須大祭
壱門神社千燈明		無形民俗文化財	筑後市大字溝口 壱門神社		壱門神社・壱門神 社千燈明保存会	平成15年 6月 4日	八女三大千燈明祭 敬老の日

筑後市の祭り 一覧表

名 称	日 時	場 所	そ の 他
石人祭り	4月第1日曜日	筑後市一条 石人山古墳	石人山古墳は国指定史跡、広川町は秋に開催
日源上人例祭	4月13日	筑後市溝口 福王寺	筑後手すき和紙の開祖日源上人を偲ぶ
山梶窩祭	5月17日	筑後市水田 山梶窩	真木保臣ら久留米藩勤王家50人の慰霊祭
船古屋温泉螢・若楠まつり	5月下旬	筑後市船小屋 中之島公園	ゲンジボタルは国指定天然記念物
筑後・かすり市	6月第1土・日曜日	筑後市	久留米餅は国指定重要無形文化財
蕉窓忌	6月10日	筑後市溝口 光讚寺	溝口出身の勤王家古松簡二、横枕覚助を祭る
赤坂七夕夏祭り	8月第1土曜日	筑後市蔵敷 赤坂神社	
江口の獅子回し	8月1日	筑後市江口	
久富の盆綱曳き行事	8月14日	筑後市久富	県指定無形民俗文化財、盂蘭盆行事
水田天満宮 千灯明祭	8月25日	筑後市水田 水田天満宮	県指定無形民俗文化財、秋季例祭、五穀豊穡祭、八女3大光明祭、八女3大祭
壱門神社 千燈明祭	敬老の日	筑後市溝口 壱門神社	市指定無形民俗文化財、八女3大光明祭
大正院祭	10月8日	筑後市常用 共同納骨堂	筑後蘭草の祖・大正院の功績を偲ぶ
益田素平翁顕彰会	10月17日	筑後市下北島 JA筑後	三化冥虫研究者益田素平の功績を偲ぶ
水田天満宮 稚児風流	10月25日	筑後市水田 水田天満宮	県指定無形民俗文化財
壱門神社 きせる祭り	12月13日	筑後市溝口 壱門神社	戦国武将溝口氏の故事に由来
熊野神社 鬼の修正会	1月5日	筑後市熊野 熊野神社	県指定無形民俗文化財、追儺祭
恵比須大祭	1月10日	筑後市羽犬塚 六所宮	
粟島神社大祭	3月3日	筑後市羽犬塚 六所宮	
西牟田三柱神社の稚児浮立	3月中旬	筑後市西牟田 三柱神社	久留米市三瀬町西牟田三島神社から筑後市西牟田三柱神社への御神幸祭。現在は中断

筑後市略年表(時代区分は従来の学説に従う)

西 暦	元号(南・北)	筑後市の出来ごと	日本の主な出来ごと
B.C.3~1万年頃		竊取赤坂遺跡・鶴田遺跡群 (筑後市内で旧石器がみられる)	後期旧石器時代(岩宿遺跡、群馬県)
B.C.1.2万年頃			縄文土器の発生(縄文時代) (豆粒紋土器、長崎県)
B.C.8.000年頃		裏山遺跡・志遺跡群・鶴田遺跡群(押型紋土器)	
B.C.5.200年頃		長崎坊田・空山・石塚遺跡?(筒煙式・野口式土器)	
B.C.400年頃			弥生時代の始まり
B.C.200年頃		この頃常用遺跡群、津島九反坪遺跡など	この頃八女市室岡遺跡・亀ノ甲遺跡など
B.C.54			奴国王、中国後漢王朝より金印を賜る
A.D.238		この頃、狐塚遺跡、竊取森ノ木遺跡など	邪馬台国女王卑弥呼、中国魏王朝へ朝貢
(3世紀後半)			古墳時代の始まり
450頃		この頃石人山古墳造られる	
460頃		この頃瑞王寺古墳造られる	
480頃		この頃欠塚古墳造られる	
527	(櫻林21)		この頃倭王・武が中国へ使者を送る
645	大化元		磐井の乱 大化の改新
(7世紀後半)		この頃より日本各地で官道が整備される(西海道)	
701	大宝元		「大宝律令」発布
710	和銅3		平城京(奈良)へ遷都
713	和銅6		道君首名、筑後・肥後守に着任(～718)
740	天平12		東大寺大仏開眼供養
794	延暦13	この頃行基菩薩、筑後国各地に伝承を残す	平安京遷都
903	延喜3	水田天満宮、創建伝承(1226再建が本来の創建か)	菅原道真没
927	延長5	喜野駅跡が整備される?	「延喜式」制定、駅伝・駅馬割を定める
1047	永承2	下妻荘、太宰府天満宮安楽寺に寄進	
1083	永保3	良田荘、太宰府天満宮安楽寺に寄進	後三年の役
1097	承徳元	万才天満神社勧請される	
1131	天承元	広川荘成立、1138(保延4)熊野山に寄進	
1151	仁平元	塚本大膳、中牟田八幡大菩薩建立	
1153	仁平3	若菜清石経埋納?	
1185	文治元	この前後より平家伝承	平家、環の浦で滅亡
1192	建久3		鎌倉幕府成立
1243	寛元元	西牟田家廟、西牟田寛元寺建立	
1276	建治2	西牟田永家ら、博多防寇建艦、博多警固番役を務める	
1281	弘安4	西牟田永家、肥前島原に軍功を挙げる	弘安の役
1302	乾元元	西牟田八幡明神(松尾神社)建立 西牟田永家、靈鷲寺建立	
1334	建武元		建武の親政
1336	建武3・延元元	足利尊氏、鶴田に陣を張る	南北朝動乱(～1393)、懐良親王九州下向
1351	正平6・観応2	懐良親王、肥後菊池氏と筑前・筑後制圧、溝口城落城	
1364	正平19・貞治3		豊後国守護大友氏、筑後国守護に就任
1369	正平24・応安2	水田荘、境界に老松神社を建立し、広川荘と争いになる	
1371	建徳2・応安4		今川了俊、九州探題として下向
1373	文中2・応安6	今川了俊、尾島で菊池勢と戦い、浅山小次郎重綱戦死	
1381	弘和元・永徳元	豊後大友氏、肥後菊池氏と溝口に戦う	
1396	応永3	この頃より豊後大友氏、肥後菊池氏が筑後国を争う	
1405	応永12	九州探題波川満朝、肥後菊池氏討伐の為西牟田に出陣	
1432	永享4		肥後菊池氏、豊後大友氏と共に筑後国半国の守護となる(～1462)
1443	嘉吉3	水田来迎寺、この頃開山	
1464	寛正5	江口雷神社、熊野坂東寺より勧請	
1467	応仁元		応仁の乱
1501	文亀元	水田浄弘寺、開山	
1511	永正8	北牟田玉垂神社(島田)勧請	
1522	大永2	西牟田真光寺、開山	
1523	大永3	西牟田靈鷲寺、勧願寺となる	
1525	大永5	この頃より豊後大友氏が筑後国を支配	
1533	天文2	古島常念寺、開山	
1534	天文3	庄島安養寺、開山	
1535	天文4	中牟田西光寺再興、中折地地光寺開山	
1539	天文8	常用興満寺、開山	
1542	天文11	溝口光徳寺、開山	
1546	天文15	折地正観寺、開山	

西 暦	元号(南・北)	筑後市の出来ごと	日本の主な出来ごと
1589	永禄12	この頃より肥前龍造寺氏と豊後大友氏、筑後国で激しく争う	筑前博多焼失
1585	天正13	羽犬塚頼良寺、開山	豊臣秀吉関白となる
1586	天正14	藤原島津氏北上、西牟田氏城島城に破れ、西牟田町炎上	
1587	天正15	豊臣秀吉九州仕置、下斐郡は立花宗茂、その他は毛利秀包の領地となる	
1593	文禄2	志天満神社、建立	
1595	文禄4	清口福王寺、日蓮により再興、筑後手すき和紙興る	
1596	慶長元	羽犬塚宗岳寺、久留米尊明寺の僧により開山	
1600	慶長5	黒田如水、柳河の立花宗茂を伐つため水田に出陣	豊臣秀吉叛、関ヶ原の戦い
1601	慶長6	田中吉政、筑後国主となり柳河城に入城	
1604	慶長9	野印日吉神社、創建	
1605	慶長10	羽犬塚平井家、鎮物司となる	徳川秀忠将軍に就任
1612	慶長17	鶴田宗清寺、尾島より転居	キリシタン禁教となる
1614	慶長19	田中忠政、水田天満宮へ石造鳥居を寄進	大坂冬の陣
1615	元和元	長浜野村熊野神社、室岡熊野神社より勧請	大坂夏の陣、豊臣家滅亡
1617	元和3	長崎熊野神社、熊野坂東寺より勧請	日光東照社竣工
1618	元和4	長浜野村玉垂神社、中島天満神社(島田)勧請	
1620	元和6	柳河田中藩断絶、市域は久留米有馬藩の領地となる	大坂城改修、徳川秀忠の息女入内
1621	元和7	四ヶ所八幡神社、久留米高良山より勧請	
1626	寛永3	和泉了源寺、再興	
1630	寛永7	和泉熊野神社、高江熊野神社、熊野坂東寺より勧請	
1633	寛永10	中折地八幡神社、瀬高広田八幡神社より勧請	
1634	寛永11	井上玉垂神社、勧請	長崎出島が完成
1637	寛永14		天草・島原の乱
1640	寛永17	新清天満神社、水田天満宮より勧請	
1647	正保4	上北島印鑑神社、下北島伊勢宮、北長田老松神社創建 有馬忠類、領内の一向宗寺院へ東本願寺派へ転派を強要	
1654	承応3	有馬忠類により西牟田町の復興が始められる 水田浄弘寺、転派を拒み柳川藩領長田へ転居、西原熊野神社創建 羽犬塚で鶴原島市(市の初見)	
1661	寛文元	久郎原(津島東)八幡神社、瀬高広田八幡宮より勧請	松崎藩(小都市)成立
1665	寛文5	水田天満宮社殿再建(現在の社殿)	
1672	寛文12	尾島町開かれる。この時市ノ塚より刀剣出土する。尾島天満神社創建	
1674	延宝2	常用興濟寺尾島へ移転、今寺(津島西)光明寺再興	
1675	延宝3	西牟田霊鷲寺、松崎へ移転再興、藤島熊野神社、熊野坂東寺より勧請	
1680	延宝8	西牟田野儒医・西以三、「筑後地誌」を著す	
1682	天和2		
1684	貞享元		松崎藩改易
1685	貞享2	矢部川に花宗井堰ができる	
1689	元禄2	尾島に治水工事に用いた石船小屋できる(船小屋のおこり)	
1692	元禄5	千間満龍齋される	
1700	元禄13	鷲敷天満神社できる	
1702	元禄15	水田浄弘寺、東本願寺派寺院として再興	赤穂浪士討ち入り
1711	正徳元	万才天満神社、中興	
1722	享保7	半田土鍋、老中・若年寄らへの定例贈品となる	
1728	享保13	享保一揆おこる	
1741	寛保元	松崎・府中・羽犬塚・上野宿に宿願種が定められる	
1749	寛延2	羽犬塚に御茶屋できる	
1750	寛延3	中島安兵衛、久留米用水を完成させる	
1754	宝暦4	宝暦一揆おこる	岡山東洋・小杉玄通、日本初の死体解剖
1759	宝暦9	有馬頼一、羽犬塚御茶屋に逗留、以後在国中は慣例化	日田に代官所が置かれる
1768	明和5	羽犬塚六所堂再興する	
1784	天明4	二本松に郷場がはじめて置かれる	
1812	文化9	伊能忠敬一乗～羽犬塚～今寺(津島西)を測量 水田の次郎吉、赤坂にて陶器を焼き始め、赤坂焼興る	
1817	文化14	本郷と下斐に水争いが起る	広瀬淡窓、日田に私塾・咸宜園を開く
1822	文政5	尾島の酒井義経、水田の洲上量源ら刑死体を解剖し、「解体図志」を著す	
1823	文政6	赤坂三原藩御用窯となる、一乗長照寺再興	シーボルト来日
1825	文政8	船小屋に藍染井戸を穿つ	異国船打ち払い令。会沢正志斎、「新橋」を著す
1827	文政10	八女の山形屋喜右衛門、二本松の花宗川に橋を架ける	精山陽、「日本外史」を著す
1828	文政11	大園により赤坂焼三原窯壊滅、その他にも彼曹基大	シーボルト事件
1832	天保3	松尾藩池(井原堤)の用水を巡り西牟田・鷲敷村争う 柳原に御庭焼が始まり、赤坂三原窯が御用を勤める。	天保飢饉。安藤広重「東海道五十三次」完成
1835	天保6	赤坂三原窯にて柳原焼きの焼成も行うようになる	

西 暦	元号(南-北)	筑後市の出来ごと	日本の主な出来ごと
1852	嘉永5	真木保臣、藩政改革に失敗。水田の大島居徳臣のもとに預けられ監居する	
1853	嘉永6	水田に山徳駕ができ、多くの青年が真木保臣に教えを請う。	
1858	安政5	真木保臣、山徳駕で「大夢記」を著し関南を鎮じる。	井伊直弼大老に就任。日米修好通商条約調印。安政の大獄はじまる
1860	万延元	筑前の平野国臣、肥後の松村深蔵山徳駕を来訪	松田門外の宴
1861	文久元	平野国臣、久留米の原道太山徳駕を来訪。真木保臣「義學三策」を草す	イギリス公司襲撃事件。黒女和宮江戸へ下向。
1862	文久2	真木保臣、平野国臣ら羽犬塚で薩摩藩士久保利通と面談後、保臣と門弟ら脱藩し伏見寺田屋で拘束され、久留米に送還される。	寺田屋事件。朝廷、親兵設置の命を幕府に伝える。
		水田天満宮の大島居徳臣、脱藩に失敗し切腹	
1863	文久3	真木保臣赦免。その後の「保臣捕り」起き、門弟らと再度拘束される。	得軍徳川家茂上洛。長州藩、下関で外国船を砲撃。長州藩奇兵隊を設立。
		各人の周旋により再び放され久留米藩親兵を率い上京、「8月18日の政変案」により長州へ移る。久留米藩に帰国した勤王派は拘束される。	薩英戦争。天竺組の乱(大和襲撃)。八月十八日の政変。生野の宴。
1864	元治元	古松龍二・水田龍二、筑波山襲撃に参加。測上龍太郎池田屋事件に遭遇。	天狗党の乱(筑波山襲撃)。池田屋事件。禁門の宴。第一次長州征伐。
		真木保臣ら「禁門の宴」に参加。	
1865	慶応元	測上龍三ら五卿と太宰府へ移る。測上龍太郎釈放され髪部と疑われる。	高杉晋作馬場襲撃。第二次長州征伐。薩長同盟。
1866	慶応2	長州征伐参加の翌後藩兵大雨により羽犬塚に足留め	得軍家茂死去。第二次長州征伐により小倉城落城。孝明天皇崩御。
		長州に破れた小倉藩士ら、熊本へ向かうため羽犬塚通過	
		測上龍三、兄の潔白を示すため自刃	
1867	慶応3	測上龍太郎、新徴相脱走りに暗殺。幽閉中の真木保臣の門弟ら放される。	大政奉還
1869	明治2	久留米藩版籍奉還、市内各地で鹿仏農積おこる	版籍奉還。東京遷都。戊辰戦争終結。
1870	明治3	太宰源太郎事件、久留米藩勤王派ことごとく収監される	軍政改革開始。
1871	明治4	鹿澤藩県、市域は久留米県、ついで三洲県となる	戸籍法制定。通貨に円が採用(一両=一円)。散髪、刀刀の自由。
1872	明治5	郵便路線開通、羽犬塚に切手販売所できる	学制。太閤屋の採用。
1873	明治6	各地に小学校が誕生。佐賀の乱おき、一条や羽犬塚に影響。	徴兵制の採用。仇討ち禁止令。キリスト教解禁。筑前竹槍一揆。
1876	明治9	福岡県成立。水田寛作、横枕党助・尋木精一らと下妻の水問題を解決。	廃刀令。神風連の乱。秋月の乱。
1877	明治10	西南戦争おき、久留米に向かう負傷者が羽犬塚を多数通過。これにより久留米がすりが全国に知られるようになる	西南戦争。
		益田素平、三化蠅虫を発見し、駆除法を考案する	
1880	明治13	筑後稲株騒動おこる	
1883	明治16	久留米の赤松社が和傘の生産を始める	
1888	明治21	福島・若津港県道(後の国道442号)開通	
1889	明治22	市町村制施行、羽犬塚・二川・古川・水田・下妻村など成立	大日本帝国憲法発布。
1891	明治24	鉄道が開通し、羽犬塚駅開業	大津事件。
1892	明治25	この頃常用の古賀幸七の考案した製が広く普及する	
1896	明治29	夏目漱石、船小屋に遊ぶ	
1903	明治36	南筑馬車鉄道(羽犬塚-福島-山内)開通	
1904	明治37	日露戦争、市域でも多くの戦死者を出す	日露戦争
1908	明治41	水田村・下妻村・二川村が合併し水田村成立	
1910	明治43	筑後和傘同行組合設立。和傘に事務所を設ける	大逆事件。朝鮮併合。
1914	大正3	山徳駕が復元され、記念碑が建てられる	第一次世界大戦
1915	大正4	羽犬塚村が羽犬塚町となる	対露21カ条の要求
1924	大正13	下妻小学校生徒の作品が「赤い鳥」に投稿・掲載される	メートル法実施。
1928	昭和3	船小屋駅が開設される	強作露爆死事件
1937	昭和12	西牟田駅が開設される	薩清衝突事件(日中戦争勃発)。杭州湾上陸作戦(火野驥平「土と兵隊」)
1945	昭和20	米軍機と撃墜した日本軍機が上原々に墜落。久留米空襲の際、学徒動員の八女高女生徒が死亡。国鉄矢部線開通。	広島・長崎に原爆投下。終戦。改正衆議院選挙法公布。
1949	昭和24	昭和天皇巡幸、羽犬塚中で奉迎。上北島の苗代視察、船小屋に宿泊	
1951	昭和26	水田村郷土史研究会(のち筑後郷土史研究会)が発会	サンフランシスコ講和会議にて対日平和条約・日米安全保障条約調印。
1953	昭和28	西牟田村が西牟田町となる	NHKテレビ放送開始。朝鮮休戦協定。奄美群島復帰
1954	昭和29	羽犬塚町・水田村・古川村が合併し、筑後市が誕生	ビキニ環礁沖で第五福竜丸被爆。学校給食法、自衛隊法制定。
1958	昭和33	現在の筑後市が誕生する	南極観測隊越冬で上陸できず、樺太犬が置き去り。関門トンネル開通。
1963	昭和38	市内初の信号機が山ノ井の交差点にできる	北九州市成立。三池炭坑炭じん爆発事故。ケネディ大統領暗殺。
1969	昭和44	山徳駕が現在の形に復元される	アポロ11号月面着陸。公害による健康被害が問題化。
1975	昭和50	九州新幹道福岡-熊本間開通する	新幹線岡山-博多間開業。沖縄国際海洋博。昭和天皇夫妻初の米國訪問。
1980	昭和55	古川小学校が理科教育でソニー賞を受賞	校内暴力問題化。韓国光州事件。有明湾の地盤沈下が問題化。
1981	昭和56	筑後市郷土資料館、勤労婦人センター「ソコア」完成	中国残留孤児がはじめて来日。ヤンパル(クイナ)発見。
1984	昭和59	九州新幹線鹿児島ルート案発表	筑後大塚完成
1985	昭和60	国鉄矢部線廃止。文化財保護専門委員会設置。	男女雇用機会均等法公布。日航機墜落事故。内閣制度100周年。
1987	昭和62	第1回石人まつり開催	国鉄分割民営化。酸性雨が問題となる
1992	平成4	台風被害により水田天満宮解体修理	バブル景気終焉。PKOとして自衛隊カンボジア派遣
1995	平成7	欠塚古墳が公園整備される	地下鉄サリン事件。高速増殖炉もんじゅ事故
1998	平成10	「筑後市史」完成	

さくいん

凡 例

1. 本書で取り上げた文化財や歴史に関連のある名称を、あいうえお順に並べています。
2. 太字は本書で項目を設けたもの、その他は文章内に記されたものです。斜字体のものは市外の文化財です。
3. 市外に所在する文化財には、名称の後に所在地（都道府県、県内のは平成16年4月までの市町村名）を記載しています。
4. カッコ内の記載は、分類、時代、指定の順となっています。
 - 分 類 … 地理、考古、歴史、団体、工芸、絵画、彫刻、書籍（墨跡・書籍）、建造物、事件、人物、伝承、宗教（信仰）、交通（運輸）、教育、水利、産業、景観
 - 時 代 … 先（先史時代、旧石器・縄文・弥生・古墳時代）
古（古代、飛鳥・奈良・源平争乱以前の平安時代）
中（中世、源平争乱期の平安・鎌倉・室町・戦国時代）
近（近世、安土・桃山・江戸時代）
代（近代・現代、明治維新以降）
 - 指 定 … 指定を受けた分類に準じる

さくいん

あ			
赤井手 (平家伝承) (伝承)	37	今村竹堂 (八女、人物・教育、近)	31
赤い鳥 (書籍、代)	79	祝川 (?) (人物、代)	54
赤坂人形 (工芸、近～)	11、59	磐井の乱 (八女、事件、先)	8
赤坂神社 (宗教、近～)	11	岩崎光 (人物、代)	48、58
赤坂の化け猫 (伝承、近)	12	岩戸山古墳 (八女、考古、国史跡)	8
赤坂のハゼ林 (景観、近～)	11	陰陽石 (考古、先)	58
赤坂焼 (工芸、近～代)	10、22、83	倉稲魂神 (うかのみたまのみこと) (宗教)	70
赤松社 (久留米、工芸、代)	65	保食神 (うけもちのかみ) (宗教)	52
秋津島浪右衛門 (人物、近)	54	牛若丸 (=源義経) (京都、人物、中)	64
秋津島浪右衛門供養塔 (墳墓、近)	54	梅島遺跡 (考古、先)	74
秋松 (藤島) の一里塚 (交通、近)	28	真山遺跡 (考古、先)	48
安芸毛利氏 (広島、人物、近)	19	真山公園 (地理)	48
明智光秀 (岐阜、人物、近)	19	雲清 (宗教、近)	61
揚羽 (八女) (人物、近)	54	駅家 (交通、古)	82
浅山小次郎重綱 (京都?人物、中)	49、50	江口井堰 (水利、近)	22、83
足利尊氏 (京都、人物、中)	46	江口雷神社 (宗教、古～)	21
足踏莫産織機 (工芸、代)	72	江口組大庄屋田中家 (歴史・人物、近)	22
足踏製蓮機 (工芸、代)	72	江口の獅子舞 (宗教)	21
足踏花蓮織機 (工芸、代)	72	江崎権之丞 (人物、近)	71
油屋 (工芸、代～)	65	江崎権之丞顕彰碑 (建造物、代)	71
天草四郎時貞 (熊本、人物、近)	77	越中次郎兵衛盛次 (=金阿) (宗教、中)	68、69
天堤 (水利、近～)	10	江間加賀守平範雅 (人物・工芸、中)	40
天照皇大御神 (=天照大神) (宗教)	64、69	衣領樹 (宗教、中)	51
阿弥陀屋敷 (地理)	76	円教坊 (三遊、宗教、中)	4
荒木氏 (久留米、歴史、中)	2	円墳 (考古、先)	8
有馬忠頼 (久留米、人物、近)	3、22、52、61	お梅さん (伝承)	12
有馬豊氏 (久留米、人物、近)	14、42、52、82	大石御祖神社 (久留米、宗教)	55
有馬頼成 (久留米、人物、近～代)	65	大久保利通 (鹿児島、人物、近～代)	22、27
有馬頼永 (久留米、人物、近)	59、83	太田黒子之吉 (人物、近～代)	78
有馬頼徳 (久留米、人物、近)	10、31、63、83	大友親世 (大分、人物、中)	49
安徳天皇 (兵庫、人物、中)	41	大友鶴吉 (人物・宗教、代)	23
安養寺 (宗教、中～)	20	大友鶴吉・田中弥太郎胸像 (彫刻、代)	23
安養寺永正15年銘板碑 (建造物、中)	20	大鳥居吉吉 (人物、代)	66
家型石棺 (考古、先)	8	大鳥居氏 (太宰府) (人物、中～)	60、61、66
石田光成 (滋賀、人物、近)	82	大鳥居氏 (水田) (人物、中～)	58、66、68、69、74
井口観音堂 (宗教)	75	大鳥居次郎 (人物、代)	66
井口紀伊守 (人物、中)	75	大鳥居信全 (太宰府、人物、近～代)	66、69、70
井口紀伊守墓所 (墳墓、近)	75	大鳥居信全墓所 (墳墓、代)	66
的 (いくは) 臣 (浮羽、歴史、先)	9	大鳥居信臣 (理兵衛) (人物、近)	59、65、78
石組炉 (考古)	18、48	大藪三河守基足 (宗教、近)	71
石塚寺跡 (歴史、古?)	19	大山積命 (宗教)	6
伊豆三島 (静岡、地理)	2	緒方家 (工芸、近)	10、83
和泉山の狐 (伝承)	34	小河荘 (瀬高、歴史、中)	48
伊勢平氏 (三重、人物、中)	41	置津彦命 (宗教)	11
市右衛門 (人物、近)	38、68	置津姫命 (宗教)	11
一条和泉守 (広川、人物、中)	10	押型文土器 (考古、先)	48
一条和泉守墓所 (彫刻、中)	10	尾島石造夫婦恵比須坐像 (宗教、近)	52
一条の一里塚 (交通、近)	28	尾島金屋丁夫婦恵比須像 (宗教、近)	52
一条町 (歴史、近)	9	尾島下町夫婦恵比須像 (宗教、近)	53
市ノ塚 (伝承、中)	41、49、50	尾島町 (交通、近)	40、49、53、83
糸経中継織機 (工芸、代)	72	御茶屋 (歴史・交通、近)	26、38
井上三綱 (さんこう・みつな) (絵画、代)	42、45	御茶屋のソテツ (自然)	27
井上玉垂神社 (宗教、近～)	70	御茶屋守 (歴史、近)	26
井上玉垂神社元和四年銘板碑 (建造物、近)	70	乙名塚 (久留米、墳墓、古)	62
井上伝 (久留米、工芸、近)	84	落とし穴 (遺構、先)	2、48
井上の「ふだらくさん」 (伝承)	71	御庭焼 (工芸、近)	10、83
井上村 (地理、中～代)	70	尾上柴舟 (岡山、人物、代)	53
伊能忠敬 (千葉、人物、近)	27	尾上柴舟歌碑 (建築、代)	53
井原堤 (水利、近～)	10	折地組大庄屋下川家 (歴史、近)	53、68、78
いぼ神さん (いぼ観音さん) (宗教)	58	折地太神宮 (=伊勢の宮) (宗教)	69
今川了俊 (静岡、人物、中)	50	か	
今寺の一里塚 (交通、近)	28	廻転形製蓮機 (工芸、代)	72
今寺穀留番所 (交通、近)	40、49	欠塚古墳 (考古、先、市史跡)	8、9、10
今楠公 (=真木保臣) (久留米、人物、近)	60	欠塚の狐 (伝承)	12

さくいん

欠塚の仏堂 (宗教、近～)	9	久恵の河童 (伝承)	46
カササギ (景観、近～)	85	久恵八幡宮 (宗教・中～)	43
葛野駅屋 (かずらのうまや) (交通、古)	26、82	久坂玄瑞 (山口、人物、近)	66
カチガラス (佐賀、景観、近～)	85	榑原寿一郎利長 (=玄哲) (人物、近)	29
滑石経 (宗教、古、県考古)	21	楠本正成 (京都、人物、中)	60
カッチ (韓国、景観)	85	久保殿 (人物、中)	6
金子蕭園 (東京、人物、代)	53	久保三島神社 (宗教、中～)	6
懐良親王 (征西将軍宮) (矢部、人物、中)	40、56	熊野観音堂 (宗教、中～)	16
狩野左京之進 (小郡、人物、近～代)	3	熊野観音堂元亀四年銘板碑 (宗教、中～)	16
蒲池焼 (柳川、工芸、近)	14	熊野琴平神社 (宗教、近～)	15
橋え口 (交通、近)	9、49	熊野山 (和歌山、宗教、古～)	14、15
鎌倉幕府 (歴史、中)	2	熊野神社鬼の修正会 (宗教、県無民)	15
紙方御用控 (書籍、近)	44	熊野神社石造眼鏡橋 (建築、近、県建造物)	15
上蒲池氏 (立花、歴史、中)	10	熊野神社六地藏石幢 (彫刻、近)	15
上川端御田神社 (博多区、宗教、古～)	30	黒岩十右衛門 (人物、近)	55
上北島印鑰社 (宗教、近～)	61、65	蔵数遺跡 (考古、先)	14
上北島天満神社 (宗教)	64	蔵数長原山遺跡 (考古、先)	8
上北島天満神社石燈籠 (建造物、近)	64	蔵数の子持勾玉 (考古、先)	14
上北島 (北島) の一里塚 (交通、近)	28	蔵数東野屋敷遺跡 (考古、先)	14
上富久の観音堂 (宗教)	19	蔵数森ノ木遺跡 (考古、先)	14
かめかぶり地蔵 (伝承)	65	久留米かすり (工芸、近～、国無形文化財)	84
魏蒙山 (伝承、近)	56	久留米空米事件 (大阪、事件、近)	83
魏棺 (遺構、先)	8、58	久留米享保一揆 (事件、近)	83
川合下番所 (八女、歴史、近)	50	久留米高良山 (久留米、地理)	19
川口薬師堂 (宗教)	77	久留米城 (藤山城) (久留米、歴史、近)	31
川口薬師堂薬師如来像 (彫刻)	77	久留米水天宮 (久留米、宗教、中)	59
川尻丹治正勝 (長崎、工芸、近)	51	久留米藩 (歴史、近)	3、10、11、26、 36、40、71、83
菅家文草 (書籍、近)	65	久留米藩親兵隊 (歴史、近)	11、59、66
寛元寺 (宗教、中～)	3	久留米藩難事件 (太楽源太郎事件) (事件、代)	33、42、66
寛元寺天満神社 (宗教、中～)	5	久留米宝暦一揆 (事件、近)	83
寛元寺本堂天井画 (美術、近)	3	久留米原村 (地理、?～代)	54
寛元寺文書 (歴史、中、県書籍)	3	桑鶴恵比須像 (彫刻、代～)	45
願長寺 (宗教、近～)	29	継志堂 (八女、教育、近)	33
官道 (交通、古)	82	げけ女 (伝承)	23
奇雲霊社 (宗教)	37	懸衣翁 (宗教、中～)	51
祇園祭 (宗教)	5	けんぎゅうさん (伝承)	21
菊池武敏 (熊本、人物、中)	46	元冠 (福岡、事件、中)	2
菊池武朝 (熊本、人物、中)	49、50	元冠防壁 (福岡、歴史、中、国史跡)	2
菊池武光 (熊本、人物、中)	40、49、56	迎新使 (福岡、歴史、古)	62
北島 (上北島) の一里塚 (交通、近)	28	玄哲 (=榑原寿一郎利長) (宗教、近)	29
北長田老松神社庚申塔 (彫刻、近)	45	源平争乱 (事件、中)	2
北長田のあやつり人形と紙燈籠 (宗教)	46	厳替 (宗教、中)	68
北原白秋 (大川、人物、代)	79	玄了 (宗教、中)	61
北牟田玉垂神社 (宗教、中～)	70	弘安の役 (事件、中)	2
北牟田村 (地理、中～代)	70	コウゲガラス (景観、近～)	85
北牟田六地藏 (建造物、中)	70	光厳寺 (宗教、～近)	21
木質宿 (交通)	27	高札場 (=制札場) (歴史、近)	27
狐塚遺跡 (考古、先)	58	光譜寺 (宗教、中～)	41、42
狐塚式土器 (考古、先)	58	光譜寺石刻大師座像 (彫刻)	41
祈禱院下番所 (八女、歴史、近)	50	光譜寺大日如来像 (彫刻)	41
九州仕置 (事件、中)	2、9、19、40	隆参ヤネ (伝承)	44
九州探題 (佐賀、歴史、中)	50	光塚坊 (宗教、中)	16
久昌寺 (宗教)	69	杭州湾上陸作戦 (中国、事件、代)	72
久昌寺十二神像 (彫刻)	69	上妻学 (八女、教育、近)	31
久昌寺日光・月光菩薩像 (彫刻)	69	上妻郡 (歴史、古～近)	9、19、36
久昌寺薬師如来像 (彫刻)	69	上妻・下妻郡境石 (交通、近)	36
久伝 (宗教、近)	28	稿本八女郡史 (書籍、代)	46、55
牛馬会所 (歴史、近)	27	光明寺 (宗教、古～)	23、41、50
行基大菩薩 (大阪、伝承、古)	50、68、76	光明寺石造九重塔 (建造物、中、県建造物)	41、51
行西 (=西牟田家綱) (宗教、中)	3	光明寺木像十王坐像 (彫刻、近、市彫刻)	51
行替 (宗教、中)	76	光明寺木像千手観音菩薩立像 (彫刻、古?)	50
清水観音 (瀬高) (宗教、古～)	54	光明寺木像葬頭河婆坐像 (彫刻、近、市彫刻)	51
キリシタン大名 (歴史、中～近)	9	光明寺木像仁王立像 (彫刻、近、市彫刻)	51
近阿 (=越中次郎兵衛盛次) (宗教、中)	68、69	興満寺 (尾島) (宗教、近～)	49、50
森門の変 (蛤御門の変) (京都、事件、近)	30、60、66		

さくいん

興満寺浅山小次郎重綱墓所 (墳墓、中)	50	志前田遺跡 (考古、先)	48
興満寺津留崎石見守墓所 (墳墓、中)	50	志冥宿禰荷神社 (宗教、近)	51
興満寺 (常用) (宗教、中～近)	49、50	しめの神 (伝承)	75
孝明天皇 (京都、人物、近)	60	下川義七 (人物、近)	64
コウライガラス (景観、近～)	85	下川大明神 (宗教、近)	54
高良大社 (久留米、宗教、中～)	55	下川三郎右衛門 (人物、近)	49、53、68
古賀簡二 (人物、近)	78	下川三郎右衛門供養塔 (墳墓、近)	54
後柏原天王 (京都、人物、中)	4	下川 (吉田) 資之 (人物、中)	61
五却思惟如来 (やせほとけさん) (彫刻)	41	下川秀樹 (人物、代)	72
国鉄添田線 (添田、交通、代)	85	下川根三郎 (人物、近)	66
国鉄矢部線 (交通、代)	84、85	下北島大神宮 (宗教、近～)	64
御家人 (歴史、中)	2	下北島大日如来堂 (宗教、中～)	61
甕 (こしき) (考古)	18	下北島大日如来堂大日如来像 (彫刻、中)	61
古島老松神社 (宗教、中～)	69	下妻老松神社 (宗教)	76
古島老松神社肥前型狛犬 (彫刻、近、県有民)	69	下妻郡 (歴史、古～近)	18、36、48、74
古島の河童 (伝承)	72	下妻郡衙 (歴史、古)	18、74
湖州鏡 (考古、中)	18	下妻荘 (歴史、中)	75
後土御門天皇 (京都、人物、中)	4	下宮久八幡宮 (宗教)	20
後奈良天皇 (京都、人物、中)	4	下牟田館 (歴史、中～)	68
後二条天皇 (京都、人物、中)	4	下牟田若宮神社 (宗教、～代)	72
後堀川天皇 (京都、人物、中)	62	シャグマ (民俗)	64
金光明寺 (宗教、古)	51	社日神 (宗教)	70
近藤家 (工芸、中～)	58	十王経 (宗教、中～)	51
さ		周溝状遺構 (考古、先)	2、74
西海道跡 (考古、古)	26、36、82	十三仏 (宗教、中～)	9
西光寺 (宗教、古～)	76	珠文鏡 (考古、先)	8
在郷町 (歴史、近)	9、82	正観寺 (宗教、中～)	65、68
最澄 (=伝教大師) (京都、宗教、古)	15	正観音像 (彫刻)	68
最福寺跡 (宗教、中)	20	正観音寺 (宗教、中)	68
酒井田の千燈明祭 (八女、宗教)	43、64	正覚寺跡 (宗教、中～近)	3、4
酒井義篤 (人物、近)	54、55	松源寺 (宗教、中～代)	3
酒井義篤墓所 (墳墓、近)	55	浄弘寺 (宗教、中～)	58、61
坂本繁二郎 (久留米、絵画、代)	46	浄光寺跡 (宗教、～近)	69
坂本友蔵 (人物、代)	72	浄弘寺石造五重塔 (建築、近)	61
坂本友蔵頭彫碑 (建造物、代)	72	城崎家文書 (書籍、近)	65
笹瀬館 (大木、歴史、中)	2	城島城 (城島、歴史、中～近)	2
薩摩街道 (交通、中～代)	9、36、40、82	浄土真宗東本願寺派 (宗教)	61
薩摩島津氏 (鹿児島、人物、中～近)	2、32、37	葬頭河婆 (宗教、中)	51
薩摩日記 (書籍、近)	22	浄清 (宗教、中)	20
薩摩藩 (鹿児島、歴史、近)	66	小代遊 (熊本、工芸、近～)	10
佐野家 (佐賀、人物、近)	19	常念寺 (宗教、中～)	68
早良親王 (宗教)	70	聖武天皇 (奈良、人物、古)	50
三化性蛭虫 (自然)	23	莊山敏功 (人物、近)	66
参勤交代 (歴史、近)	26	叙情詩運動 (事件、代)	53
三光坊 (山光坊) 墓所 (墳墓、中)	16	昭和天皇 (東京、人物、代)	56
山梶窩 (史跡、近、県史跡)	59、60、71、78	真光寺 (宗教、中～)	2、4
山梶窩保存会 (団体、代～)	60	新庄組大庄屋 (八女、歴史、近)	44
三条実美 (京都、人物、近)	60、66	しんせ屋敷 (地理)	76
三途の川 (宗教、中)	51	沼別義軍 (長州浪士隊) (京都、事件、近)	60
三八山新四国 (宗教、代)	23	人馬継立役 (歴史・交通、近)	27
四ヶ所遺跡 (考古)	18	人馬問屋 (歴史、近)	22、27
四ヶ所古四ヶ所遺跡 (考古、中～近)	18	人物壇輪 (考古、先)	8
支石墓 (考古、先)	58	神仏分離 (事件、代)	69
七脚落ち (山口、事件、近)	60	神仏分離 (事件、代)	15
地頭 (職) (歴史、中)	2	瑞瀬大明神 (宗教、近)	64
児童文学主義 (教育)	79	瑞王寺古墳 (考古、先)	8
級長戸辺命 (しなとへのみこと) (宗教)	70	水天宮の鏡 (伝承)	80
島津久光 (鹿児島、人物、近)	59	菅原為長 (京都、人物、中)	62
島山吉衛門 (人物、近)	19	菅原道真 (宗教、古)	5、6、21、51、62、69、70
島田彼岸田遺跡 (考古、中)	68	助高・盛高天神 (宗教)	74
島原の乱 (熊本・長崎、事件、近)	77	素盞鳴尊 (宗教)	5、6
消水潜龍 (人物、近)	41	雀地獄 (伝承、近)	56
志遺跡群 (考古、先)	48	角大鳥居照三雄 (人物、近)	66
志天満神社 (宗教、中)	51	正空 (宗教、中)	61
志の由来 (伝承、中)	56		

さくいん

清慶 (宗教、中)	41	高辻家 (菅原氏) (京都、人物、古～)	58
清光 (宗教、中)	68	高橋次郎 (人物、中)	6
制札場 (=高札場) (歴史、近)	27	高橋泰平 (八女、教育、近)	78
征西将軍宮 (懐良親王) (矢部、人物、中)	40	高家郷 (歴史、古)	19
井田上地藏 (宗教)	69	武内宿弥 (宗教)	70
井田上玉垂命神社 (宗教、中～)	68、70	武田耕雲斎 (茨城、人物、近)	78
井田上玉垂命神社三神名併刻塔 (建造物)	70	太宰府 (太宰府、歴史、古～中)	56
井田下御霊神社 (宗教、中?～)	70	太宰府天満宮 (太宰府、宗教、古～)	62、66
井田下六地藏石塔 (建造物、近)	71	太宰府天満宮安楽寺 (太宰府、宗教、古～)	58、60、62、66、74
井田の荒五郎 (宗教、～代)	72	太宰府天満宮石造慶長銘燈籠代燈 (建造物、近、県建造物)	63
井田東屋敷観音堂 (宗教)	71	太宰府天満宮本殿 (建築、宗教、近、国重文)	62
井田東屋敷観音堂板碑 (建造物)	71	太宰府別当職 (太宰府、歴史、中～近)	61
盛徳町 (歴史、近)	9	多々良浜の戦い (東区、事件、中)	46
西南戦争 (事件、代)	84	立花宗茂 (柳川、人物、近)	83、85
施餓鬼行事 (宗教)	16	竪穴系横口式石室 (考古、先)	9
石人 (考古、先)	8	竪穴式住居 (考古、先～古)	18、26
石人堂 (宗教・伝承、代～)	8	田中安芸守利勝 (=宗慶・江口) (人物、近)	22
石人山古墳 (考古、先、国史跡)	8	田中家 (坂東寺焼) (工芸、近)	14
石帯 (考古、古)	18	田中家古墓群 (江口) (墳墓、近～)	22
瀬高荘 (瀬高、歴史、中)	48	田中家古墓群 (上富久) (墳墓、中)	21
鯉魚溜池 (三游、水利、近～)	10	田中家古墓群享祿3年銘板碑 (上富久) (墳墓、中)	21
千間溝 (水利、近～)	10	田中静次郎 (工芸、代)	72
全自動製蓆機 (工芸、代)	72	田中忠政 (柳川、人物、近)	63、82
千畳敷の故事 (伝承)	24	田中天満神社 (宗教、中～)	6
仙談塚 (宗教・伝承)	24	田中天満神社西以三押巻板書 (書籍、近)	6
仙談塚の観音堂 (宗教・伝承)	24	田中利家 (人物、近)	22
善導寺 (久留米、宗教、中)	28、69	田中利実 (人物、近)	22
前方後円墳 (考古、先)	8、9	田中弥太郎 (宗教、代)	23
然登 (宗教、中)	76	田中吉政 (柳川、人物、近)	22、82
宗安寺 (久留米、宗教、近)	65	七夕神社 (宗教、近～)	10
宗円 (人物・宗教、中)	4	玉鶴姫 (平家伝承) (伝承)	37
惣会所 (歴史、近)	27	玉鶴霊社 (宗教、近)	37
宗岳寺 (宗教、近)	28	溜井 (水利)	48
宗岳寺一石五輪塔 (彫刻、中)	29	ダラキさん (伝承)	32
宗岳寺地藏三尊板碑 (彫刻、中)	29	たらちねの井戸 (地理)	21
宗岳寺有耳五輪塔 (羽犬の墓) (建築、近)	28	垂井長左衛門 (伝承)	51
宗岳寺六地藏石塔 (彫刻、近)	29	湛慶 (丹波) (久留米、工芸、近)	46
宗慶 (=田中安芸守利勝) (人物・宗教、近)	22	壇の浦の戦い (山口、事件、中)	37、41
装飾古墳 (考古、先)	8	丹波福知山 (京都、地理)	42
宗清寺 (宗教・伝承、中～)	41、49	近本市右衛門 (人物、近)	56
宗西寺跡 (宗教、中)	15	近本甲五郎 (人物、代)	55
宗清廟 (墳墓・伝承、中)	41	筑後稲株騒動 (事件、代)	23
宗津溜池 (三游、水利、近～)	10	筑後上蒲池氏 (立花、人物、中)	43
曽畑式土器 (考古、先)	18	筑後川崎氏 (八女、人物、中)	56
た		筑後郷土史研究会 (団体、代～)	44、60、72
大工の徳さん (伝承)	12	筑後草野氏 (久留米、人物、中)	19
大慈禅寺 (熊本、宗教)	45、60	筑後黒木氏 (黒木、人物、中)	56
大正院 (工芸、近)	72、77	筑後五条氏 (矢部、人物、中)	56
大正院祭 (宗教)	78	筑後西国三十三ヶ所案内御詠歌 (書籍、代)	72
大正院墓所 (墳墓、代)	77	筑後三宿 (交通、近)	26
大濠寺 (久留米、宗教、古～)	61	筑後三大千燈明祭 (宗教)	43、63、64
大濠寺印鑑神社 (久留米、宗教、古～)	62	筑後市郷土資料館 (建造物、代)	48、77
大地の六地藏 (宗教、中)	65	筑後十五将 (歴史、中)	2、10
太平洋戦争 (事件、代)	85	筑後水洗郷土史 (書籍、代)	55
大宝律令 (奈良、事件、古)	62	筑後地鑑 (書籍、近)	4
太楽源太郎事件 (久留米藩難事件) (事件、代)	33、42、45、66	筑後星野氏 (星野、人物、中)	56
平重盛 (兵庫、人物・伝承、中～)	41、51	筑後の手すき和紙 (工芸、近～、県無文)	42
平知盛 (兵庫、人物・伝承、中～)	41	筑葉君 (歴史、先)	8、9
平宗清 (三重、人物・伝承、中～)	41、49、51	筑葉君磐井 (八女、人物、先)	8
高井良氏 (人物、中)	24	筑葉君の奥津城 (歴史、先)	8
高江遺跡 (考古、先・中)	18	筑前宝満・岩屋城攻防戦 (太宰府、事件、近)	22
高江窯跡 (考古、古)	18	地光寺 (宗教、中～)	76
高江天満神社 (宗教)	21	稚児風流 (水田) (=ドイキャンキャン)	64
高江の狐 (伝承)	23		
高江廃寺 (宗教)	19		

さくいん

	(宗教、県無民)	中島観音堂十一面観音像 (彫刻)	69
秩父宮 (東京、人物、代)	56	長島助高 (人物、中)	74
智徳城 (広川、歴史、中)	10	中島忠蔵 (人物、代)	71
乳婦観音 (伝承、中～)	3	中島天満神社 (宗教、近～)	70
長間 (=松島若狭守長則) (宗教、中)	20	中島村 (地理、中～代)	70
長州征伐 (山口、事件、近)	41	長島盛高 (人物、中)	74
長州藩 (山口、歴史、近)	59、60、66	中島薬師堂弘法大師像 (彫刻)	69
長照寺 (宗教、中～)	9、11	中島薬師堂薬師瑠璃光如来像 (彫刻)	69
長寿寺 (三游、宗教、近～)	4	中富入道 (人物、近)	70
朝鮮出兵 (事件、近)	85	中富入道了三 (人物、中)	68
物額 (歴史、中)	4	中富入道了三墓所 (墳墓、中)	68
塚本大膳 (人物、中)	75、76	長田河原の戦い (伝承、中)	46
筑波山義拳 (天狗党の乱) (茨木、事件、近)	41、78	長田の紺屋 (こいや) (工芸、中～代)	40
津島九反坪遺跡 (考古、先)	48	長田宿 (交通、中～近)	40
津島西五柱神社 (宗教、古～)	48	中西耕石 (芦屋、人物、代)	55
津島東八幡神社 (宗教)	48、52	長野石工 (八女、工芸、近～)	61
津島東毘沙門神社 (宗教)	52	長浜遺跡 (考古・工芸、近)	38
土と兵隊 (書籍、代)	72	長浜玉垂神社 (宗教、近)	38
土祖神 (つちのそのかみ) (宗教)	70	長浜屋敷跡 (考古、近)	38
常用遺跡 (考古、先)	74	長松右京 (人物、中)	4
常用天満神社 (宗教)	79	中牟田城跡 (歴史、中)	75
津留崎石見守 (大分、人物、中)	50	中牟田水天宮 (宗教)	80
鶴田遺跡群 (考古、先～中)	48	中牟田天満神社 (宗教、古～)	75、76
鶴田天満神社 (宗教)	43	中牟田天満神社天正九年銘板碑 (建造物、中)	76
鶴田陶司 (人物、近)	11	中牟田天満神社肥前型狛犬 (建造物、近)	76
鉄製馬具 (考古、先)	8	中牟田館跡 (歴史、中)	74
鉄砲キセル (伝承)	44	中村彦次 (人物、代)	33
ててっぼっぼ (工芸、近～)	11	中山忠光 (京都、人物、近)	11
寺田屋の変 (京都、事件、近)	11、59、66、79	流天満神社 (宗教、中)	5
伝教大師 (=最澄) (和歌山、人物・宗教、古)	15	流天満神社永禄元年銘板碑 (彫刻、中)	5
天狗党の乱 (筑波山義拳) (茨木、事件、近)	41、78	夏目漱石 (熊本、人物、代)	53
天井川 (地理)	83	夏目漱石句碑 (建築、代)	53
天誅組の乱 (奈良、事件、近)	11	七つ墓 (伝承)	24
天王山 (京都、地理)	60	鍋島直茂 (佐賀、人物、近)	85
田佛遺跡 (考古、先)	2	生津城 (三游、歴史、中)	2
伝馬 (歴史、古)	26	生津村 (三游、歴史、中～近)	4
ドイキャンキャン (=稚児風流 (水田))	64	南筑軌道 (交通、代)	84
	(宗教、県無民)	南筑馬車軌道 (交通、代)	84
とうさん祭り (宗教)	31	西以三 (三游、人物、近)	4、6
堂島観音堂 (宗教)	69	西以三墓所 (墳墓、近)	4
道手 (地理)	33	西古賀館 (三游、歴史、中)	2
道手の小太郎 (伝承)	33	西高辻家 (太宰府、人物、代～)	66
徳随寺 (宗教、中～)	16	西牟田家親 (人物、中～近)	2
殿棟墓地 (溝口氏墓所) (墳墓、近)	41	西牟田家綱 (=行西) (人物、中)	3、5、6
富岡番代 (熊本、歴史、近)	77	西牟田家綱夫人 (人物、中)	4
富重井堰 (水利、近)	22、83	西牟田家永 (人物、中)	2
富久家屋敷跡 (歴史、近)	19	西牟田永家 (人物、中)	4、5
富久与右衛門 (人物、近)	19	西牟田郷 (歴史、中)	2、10
富安阿弥陀堂 (宗教)	77	西牟田三ヶ寺 (歴史、中～近)	3、5
富安遺跡 (考古、先)	74	西牟田氏 (歴史、中)	2、21、24
富安下番所 (歴史、近)	50、76	西牟田城跡 (歴史、中)	2、21
巴形銅器 (考古)	18	西牟田の稚児浮立 (宗教、代)	5
豊臣秀吉 (大阪、人物、中～近)	2、9、19、29、30	西牟田本村館 (三游、歴史、中)	2
	32、37、40、85	西牟田町 (地理、中～)	2、83
鳥型埴輪 (考古、先)	8	西牟田館 (歴史、中)	2、4
な		西牟田弥次郎家綱夫妻墓所 (墳墓、中)	3
中折地内栗遺跡 (考古、中)	75	二反田長者屋敷跡 (歴史、近)	19
中折地組大庄屋太田黒家 (歴史、近)	44、78	二反田長者屋敷石碑 (歴史、近)	19
長崎遺跡 (考古、先)	18	二反田長者屋敷門戸 (歴史、近)	19
長崎仏師 (長崎、工芸、近)	51	日源 (宗教・工芸、近)	42
長崎坊田遺跡 (考古、中)	18、19	日親 (宗教、中)	42
長崎坊田・空山石塚遺跡 (考古、先)	18	日修 (宗教、近)	42
中島安平 (人物・水利、近)	14	二本松郷場跡 (運輸、近)	36
中島観音堂 (宗教)	69	二本松白瀧神社 (宗教・伝承)	37
中島観音堂三十三面観音像 (彫刻)	69	二本松殿 (伝承、中)	16

さくいん

二本松六部碑 (墳墓、近)	38	火野葦平 (北九州、人物、代)	72
布目瓦 (考古、古)	20	火之迦具土神 (宗教)	31
野口式土器 (考古、先)	18	百歳坊 (伝承・宗教)	30
野町春日神社 (宗教、近)	65	日向神ダム (熊本、水利、代)	85
野町八幡神社 (宗教、近～)	38	平井鎮物司 (工芸、近)	37
野町日吉神社 (宗教、近～)	61	平井宇太 (人物・工芸、近)	37
野町日吉神社境内社日神祠	61	平田半兵衛 (三游、人物・水利、近)	10
(宗教、近、市有民)		平地式住居 (考古)	26
野町日吉神社境内社日神像	61	平野国臣 (福岡、人物、近)	66
(宗教、近、市有民)		平靈石 (考古、先)	58
は		蛭池館 (大木、歴史、中)	2
羽犬塚秋葉神社 (宗教、近)	31	広川荘 (歴史、中)	14、15、19
羽犬塚秋葉神社石燈籠銘文 (書籍、近)	31	広瀬淡窓 (日田、人物、代)	55
羽犬塚社日神像 (宗教、近)	61	広田荘 (歴史、古?)	48
羽犬塚宿 (交通、中～近)	26	広田八幡宮 (瀬高、宗教)	48、49
羽犬塚中道遺跡 (考古、古)	26	広田原 (瀬高、地理)	48
羽犬塚六所宮 (宗教、古)	26、30	福王寺 (宗教・工芸、中～)	42
羽犬塚六所神社 (宗教、古～)	26、30	福王寺文書 (書籍、近)	42
羽犬塚六所神社正平塔 (建築、中)	31	福岡青年師範学校 (教育、代)	31
羽犬塚六所神社中町蛭子神像 (彫刻、中、市有民)	30	福島往還 (交通、近)	36、38、70、82
羽犬塚六所神社中町蛭子祠 (建築、中、市有民)	30	福島の燈籠人形 (八女、宗教、国重民)	46
羽犬塚六所大権現 (宗教、古～)	30	福征寺 (宗教)	77
羽犬の伝承 (伝承、近)	32	福岡館 (大木、歴史、中)	2
羽犬の墓 (宗岳寺有耳五輪塔) (建築、近)	28	ぶさい天 (宗教)	24
廃仏毀釈 (事件、代)	60、66	藤島の一里塚 (交通、近)	27
箱式石棺 (遺構、先)	8、10、18	藤原家綱 (=西牟田家綱) (人物、中)	2
裸ん行 (宗教)	63	藤原武資 (人物、古)	43
旅籠 (交通)	27	藤原不比等 (奈良、人物、古)	62
八月十八日の政変 (京都、事件、近)	30、60、66	伏見人形 (京都、工芸、近～)	59
ハッサクさん (宗教・伝承)	32	二ツ橋の河童 (伝承)	72
八色玉依姫 (宗教)	5	補陀落渡海 (補陀落信仰) (宗教)	32
花宗非屋 (水利、近～)	83	測上郁太郎 (人物、近)	66
花宗川 (水利、近～)	21、82、83	測上謙三 (人物、近)	66
土祖 (はにおや) 神 (宗教・工芸)	11	淵ノ上村跡 (地理、近)	22
埴輪 (考古、先)	8	府中宿 (久留米、交通、近)	26
蛤御門の変 (禁門の変) (京都、事件、近)	30、60、66	船小屋 (交通、中～)	40、53
林熊野神社 (宗教)	32	船小屋鋤泉の由来 (伝承、近)	56
原田植物園 (教育、代)	11	船小屋ゲンジボタル保存会 (団体、代～)	85
原田万吉 (人物、代)	11	船小屋のゲンジボタル (景観)	85
半済施行 (事件、中)	58	船曳鉄門 (久留米、人物、代)	55
版箱奉還 (事件、代)	50	古松筒二 (人物、近～代)	41、45
半田土鍋 (工芸、近)	14、58	古松筒二墓所 (墳墓、代)	41
坂東寺 (宗教、古～)	16、20、21	古宮 (伝承)	43
坂東寺縁起 (書籍)	30	フングミ (民俗)	64
坂東寺熊野神社 (宗教、古～)	14、15	豊後大友氏 (大分、歴史、中)	2、14、22、24、40、50、75、76
坂東寺石造五重塔 (彫刻、中、県建遺物)	15	豊後鶴崎城 (大分、歴史、中)	50
坂東寺焼 (工芸、近)	14	平家 (京都、人物、中)	2、37
坂東寺焼記念碑 (彫刻、代)	14	平家伝承 (伝承)	37
肥後大道 (交通、中～代)	82	平家堂 (地理)	37
肥後街道 (交通、中～代)	82	百済 (ペクチェ) (韓国、歴史、先)	8
肥後隈元城 (熊本、歴史、中)	22	辺春城 (立花、歴史、中)	49
肥後系六地藏 (彫刻)	6	宝光寺 (放光寺) (宗教、中～)	61
英彦山権現 (添田、宗教)	24	法釈寺 (宗教)	69
左手拜山 (絵画、代)	55	宝寿寺 (宗教)	77
久富の盆綱曳き (宗教、近～、県無民)	16	宝勝院 (宗教、近～代)	23
久富用水 (水利、近～)	14	宝勝寺跡 (宗教、～代)	77
肥前型狛犬 (彫刻)	62	宝勝寺寺沢堅高位牌 (歴史、近)	77
肥前型六地藏 (建造物)	28	宝勝寺寺沢広高位牌 (歴史、近)	77
肥前鷹島 (長崎、地理)	2	宝勝寺法華経一石一字塔 (建造物)	77
肥前鍋島氏 (佐賀、歴史、中～近)	2	宝莊殿院 (京都、宗教、古)	2
肥前蓮池 (佐賀、地理)	2	坊津街道 (交通、中～代)	82
肥前蓮池講 (佐賀、歴史、近)	19	堀川天皇 (京都、人物、古)	21
肥前龍造寺氏 (佐賀、歴史、中)	2、10、16、44、50、75、76	本願寺頭如 (大阪、宗教、近)	29
非道井堰 (読み不詳) (水利、近)	44	本莊三郎 (八女、人物、代)	55

さくいん

本荘星川 (八女、人物、代)	55	水引地蔵 (彫刻・伝承、中)	4
本田家文書 (書籍、近)	59	三潞軌道 (交通、代)	84
本田能登 (人物、中)	58	三潞郡 (歴史、古～)	19
ボンボン軌道 (交通、代)	84	三潞郡田川村 (三潞、地理)	22
本町三島神社 (三潞、宗教、中～)	5	三潞荘 (歴史、中)	2
ま		溝口竈門神社 (宗教、古)	43、44
前非手一件品々書留 (書籍、近)	44	溝口竈門神社社叢 (景観、市天然)	43
前津遺跡 (考古、先～古)	26	溝口竈門神社千燈明祭 (宗教、市無民)	43、64
前津一部一石宝塔 (宗教)	32	溝口竈門神社キセル祭 (宗教)	43
前津熊野神社 (宗教、近)	31	溝口紙庄屋 (歴史、近)	44
前津熊野神社宝篋印塔 (建築、中)	31	溝口共同納骨堂壁画 (絵画、代)	42
前津鯉ノ谷遺跡 (考古、先)	8	溝口氏 (人物、中)	40
前津中ノ玉遺跡 (考古、古)	26	溝口重正 (伝承、中)	44
真木菊四郎 (久留米、人物、近)	66	溝口氏墓所 (殿様墓地) (近世) (墳墓、近)	40
真木直人 (外記) (人物、近～代)	3、30	溝口氏累代墓所 (中世) (墳墓、中)	40
真木保臣 (人物、近)	11、22、27、30、 45、55、59、64、 65、71、78、83	溝口城跡 (歴史、中)	40、43、44、56
	52	溝口西庄屋 (歴史、近)	45
正岡子規 (香川、人物、代)		溝口常陸介高房 (人物、中)	43
樹形 (交通、近)	9、28、49	溝口宝満神社 (宗教、古)	43
益田素平 (人物、代)	22、71	溝口宗清 (伝承)	40
益田素平陶像 (彫刻、代)	23	溝口館跡 (歴史、近)	40
益田素平生家跡 (歴史、代)	23	溝口六地蔵 (彫刻)	44
益田素平墓所 (墳墓、代)	23	三谷家 (小郡、美術、近)	3
町三柱神社 (宗教、代～)	5	道君首名 (久留米、人物、古)	61
松尾池 (水利、近)	10	水戸学 (茨城、教育、近)	60
松崎宿 (小郡、交通、近)	26	源義経 (=牛若丸) (京都、人物、中)	64、68
松崎藩 (小郡、歴史、近)	4	源頼朝 (静岡、人物、中)	41
松島若狭守長則 (=長間) (人物、近)	20	水沼君 (三潞、歴史、先)	8
松永川 (地理)	48	三原富次 (工芸、近)	10、11
馬間田永禄十二年銘板碑 (めのまるさま)	77	三宅藤右衛門 (人物、近)	77
	(建造物、中)	三宅藤兵衛 (熊本、人物、近)	77
馬間田城 (歴史、中)	75	宮崎士太郎 (人物、代)	55
馬間田福部神社 (宗教)	75	宮崎信教 (大木、人物、代)	55
万才天満神社 (宗教、古)	21	宮崎来城 (久留米、人物、代)	66
万才のおこり (伝承、中)	24	妙見さん (宗教)	21
万才橋 (地理)	24	妙光寺跡 (宗教、近)	41、42
万才薬師堂 (宗教)	20	冥宿 (宗教、近)	52
三河松下城 (愛知、歴史、中)	20	名田の再編成 (事件、中)	58
水田颯 (=水田焔) (工芸、近)	56	明八社 (宗教)	21
水田寛作 (人物、近～代)	79	武藤家 (柳川、工芸、近)	71
水田謙次 (人物、近)	78	明治維新 (事件、代)	55
水田恋木神社 (木本社) (宗教、?)	63	明善堂 (久留米、教育、近)	55、66、71
水田下町下宮 (宗教)	64	夫婦恵比須像 (彫刻)	30、45
水田城跡 (歴史、中)	58	めのまるさま (馬間田永禄十二年銘板碑)	77
水田天満宮 (宗教、中～)	60、61、62、65、 68、69、70		(建造物、中)
水田天満宮御幸絵巻 (絵画、近)	70	毛利 (小早川) 秀包 (人物、近)	9
水田天満宮石造慶長銘燈籠代燈 (建造物、近)	63	元祿数の観音堂 (宗教・中～)	15
水田天満宮石造狛犬 (彫刻、近、県彫刻)	62	モヘジ観音 (宗教)	79
水田天満宮石造鳥居 (建造物、近、県建造物)	63	や	
水田天満宮千燈明祭 (宗教、県無民)	43、63	矢賀部家文書 (八女、書籍、近)	42
水田天満宮本殿 (建築、近、県建造物)	62	保臣捕り (久留米、事件、近)	59
水田天満宮木像火玉水玉面 (宗教、中、県有民)	63	保臣の水田脱出 (事件、近)	11、22、30、66、 78
水田天満宮木像獅子頭 (宗教、中、県有民)	63	保臣の水田塾居 (事件、近)	71
水田藤五郎 (人物、中)	58	やせほとけさん (五却思惟如来) (彫刻)	41、59
水田中町板碑 (建造物、近)	65	柳河藩 (後立花氏) (柳川、歴史、近)	49
水田人形 (工芸、近)	59	柳河藩 (前立花氏) (柳川、歴史、近)	83
水田荘 (歴史、中)	19、58、74	柳河藩 (田中氏) (柳川、歴史、近)	26、82
水田の赤瓦 (工芸、近～代)	20、59	柳原焔 (久留米、工芸、近)	10、83
水田の次郎吉 (工芸、近)	10	山鹿燈籠 (熊本、宗教、県重無民)	46
水田の森 (景観、県天然)	63	山口嘉助 (人物、近)	22
水田焼 (工芸、中～)	58	山口嘉兵衛 (=吉武助左衛門) (人物、近～代)	22
水田和傘 (工芸、代)	65	山下城 (立花、歴史、中～近)	10
水田和傘資料 (工芸、代)	65	大和義孝 (奈良、事件、近)	11、49
		山ノ井川 (水利、近～)	24、82、83

さくいん

山ノ井川口遺跡 (考古、古)	36
山ノ井堤 (水利、近～)	83
山の地藏さん (宗教・伝承、中～)	15
八女三大祭 (宗教)	46
八女市庁舎銅板壁画 (八女、美術、代)	63
八女福島城 (八女、歴史、近)	82
弥吉上縁入道館 (歴史、中)	2
やんぼっさん (伝承)	80
又新堂 (教育、近)	23
与一兵衛 (伝承)	55
用水神社 (宗教、近～)	15
養林庵 (宗教、古)	76
横枕覚助 (人物、近～代)	45
横枕覚助供養塔 (墳墓、代)	45
横枕家文書 (書籍、代)	45
横枕兎平 (人物、近～代)	45
横溝氏 (人物、近)	44
横溝氏 (大木、歴史、中)	2
横溝館 (大木、歴史、中)	2
吉岡鬼一法眼 (伝承、中)	64、68、69
吉武助左衛門 (=山口嘉兵衛) (人物、近～代)	22
吉武友作 (工芸、近～代)	71
吉田氏 (歴史、中)	75
吉田 (下川) 資之 (人物、中)	61
吉田大膳城 (歴史、中)	75
吉嗣拜山 (太宰府、人物、代)	55
吉嗣梅屋 (太宰府、人物、近)	55
與田準一 (人物、代)	79
與田準一と「赤い鳥」(教育、代)	79
よど (宗教)	64、86
夜啼橋 (伝承)	24
四十八窟 (水利、近～代)	15
ら	
来迎寺 (宗教、中～)	60、65、66、69
来迎寺五輪塔残欠 (建築、中)	60
来迎寺延命地藏笠婆塔 (建築、中)	60
来迎寺地藏立像 (彫刻、近)	60
来迎寺十一面観音菩薩像 (彫刻)	60
来迎寺住職古墓群 (墳墓、中～)	60
来迎寺宝塔残欠 (建築、中)	60
来迎寺六地藏石塔 (建築、中～近)	60
律令 (歴史、古)	26、62
龍造寺隆信 (佐賀、人物、中)	44、49
了源寺 (宗教、中)	30
了空 (宗教、中)	30
了国寺跡 (宗教)	77
靈鷲寺 (小郡、宗教、近～)	4
靈鷲寺跡 (宗教、中～近)	3、4
靈山 (リョウゼン) 清閑寺 (京都、宗教)	11、78、79
繪旨 (歴史、中)	4
六助どん (伝承)	6
独沈 (ろくちん) さん (宗教、近)	32
わ	
若菜井堰 (水利、近)	22、83
若菜森坊遺跡 (考古、古)	18、74
若菜八幡宮 (宗教)	21
鷲寺松尾神社 (宗教、中～)	5
鷲寺松尾神社永正十五年銘板碑 (建造物、中)	6
鷲寺松尾神社元亀四年銘板碑 (建造物、中)	6
鷲寺松尾神社六地藏石幢 (建造物、中)	6
和ロウソク (工芸、近～代)	11

参考文献

書名・論文名	編著者	刊行年 出版社(者)
・『真木和泉守遺文』	真木保臣先生顕彰会	1913 真木保臣先生顕彰会
・『筑後国史(筑後将士軍談)』	矢野一貞	1927 筑後週刊行会
・『福岡縣神社誌』	大日本神祇會福岡縣支部	1944 大日本神祇會福岡縣支部
・『洲上兄弟』	筑後郷土史研究会	1955 筑後郷土史研究会
・『水田村郷土史』	右田 乙次郎	1957 筑後郷土史研究会
・『先人の面影 久留米人物伝』	久留米市	1961 久留米市
・『大脚・柏戸間を迎えて 日本第一 秋津島浪右衛門の伝記』	右田 乙次郎	1963 筑後郷土史研究会
・『裏山遺跡 調査概報』	筑後市教育委員会	1966 筑後市教育委員会
・『八女・山門』	岩崎 光	1968 八女山門社会研究会
・『山橋高忠士伝』	右田 乙次郎・編	1968 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市神社仏閣調査所 旧八女郡水田村編』	右田 乙次郎・編	1968 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市神社仏閣調査所 旧八女郡古川村編』	右田 乙次郎・編	1969 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『久留米藩溝口紙匠屋 紙方御用扣』	右田 乙次郎・編	1970 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『狐塚遺跡』	小田 富士雄・編	1970 筑後市教育委員会
・『下川の流れ』	下川 順一	1971 下川 順一
・『三瀬郡内諸家系図』	鶴久 二郎	1971 鶴久 二郎
・『久留米領古城之書付』		1971 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『明和四年ヨリ文政七年迄 下妻郡新溝村前井手一件品々書留』	右田 乙次郎・編	1971 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『古川むらの生いたちの記』	右田 乙次郎・編	1971 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『益田素平翁功績録』		1972 益田素平翁七十周年記念事業委員会
・『西牟田むらの生いたちの記』	右田 乙次郎・編	1972 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市神社仏閣調査所 第3集 西牟田編』	右田 乙次郎・編	1972 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『明治二己年三月 下川正三郎 殉国隊一件』	右田 乙次郎	1972 筑後郷土史研究会
・『水田の半田土鍋焼』	右田 乙次郎・編	1973 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市神社仏閣調査所 坂東寺編』	右田 乙次郎・編	1974 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市神社仏閣調査所 竜化山徳随寺編』	右田 乙次郎・編	1974 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市神社仏閣調査所 第六集』	右田 乙次郎・編	1975 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市むらの生いたちの記 第3集』	右田 乙次郎・編	1976 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市文化財』		1976 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後赤坂焼』	右田 乙次郎・編	1977 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市むらの生いたちの記 第4集 三原家と赤坂焼』	右田 乙次郎・編	1977 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『八院合戦の結末と水田会见黒田如水加藤清正の由来』	田中 寿・右田 乙次郎・編	1977 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市の史跡』	右田 乙次郎	1977 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後が生んだ先覚者 古松簡二伝』	酒井 藤男	1978 古松先生顕彰会
・『宿場町羽塚』	右田 乙次郎	1978 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『赤坂・蔵敷むらの生いたちの記』	右田 乙次郎	1978 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『福岡県遺跡等分布地図』(大川市・筑後市・三瀬郡編)		1979 福岡県教育委員会
・『筑後市文化財めぐり』	右田 乙次郎	1979 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後の史跡 山橋高』	右田 乙次郎・編	1979 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『久留米藩中折地組賦税史料』	右田 乙次郎・編	1980 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後古島郷土史』	右田 乙次郎・編	1980 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『寛延記』(複製版)	吉賀 幸雄・編	1981 久留米郷土研究会
・『寛文十年久留米藩社方開墓』	吉賀 幸雄・編	1981 久留米郷土研究会
・『羽犬塚 江崎伍三郎家に残る 久留米藩頼永公の大俵令』	右田 乙次郎・編	1981 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『水田校区郷土史』	右田 乙次郎・編	1981 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『福岡県百科事典』	西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部	1982 西日本新聞社
・『寛文十年久留米藩寺院開墓』	古賀 幸雄	1982 久留米郷土研究会
・『筑後市むらの生いたちの記 改訂古川編・西牟田編』	右田 乙次郎	1982 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後市内に残る五つの町』	右田 乙次郎	1982 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後国郡乱実記』	右田 乙次郎	1983 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後二川郷土史』	右田 乙次郎・編	1983 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『宝暦四年戌一月吉日 萬控帳』	右田 乙次郎・編	1983 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後和紙をはじめた日源上人』	右田 乙次郎	1984 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『瑞王寺古墳』	川述 昭人	1984 筑後市教育委員会
・『筑後農民生活史』	近本 喜禰	1985 筑後郷土史研究会
・『三瀬町史』	三瀬町史編さん委員会	1985 三瀬町史刊行委員会
・『筑後羽犬塚郷土史』	右田 乙次郎・編	1985 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『筑後下妻郷土史』	右田 乙次郎・編	1985 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『ひろかわの郷土史』	町政30周年記念郷土資料編集委員会	1986 広川町教育委員会
・『筑後水洗郷土史』	右田 乙次郎・編	1986 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『前津中の玉遺跡』	川述 昭人・編	1987 筑後市教育委員会
・『藩史大事典 九州編』	木村 礎・藤野 保・村上 直	1988 雄山閣出版株式会社
・『茶迎寺墓塔群』	筑後中学校歴史考古学部	1988 筑後中学校歴史考古学部
・『筑後市の冒険(筑後中学校区の巻)』	筑後中学校歴史考古学部	1988 筑後中学校歴史考古学部

・『筑後松原郷土史』	右田 乙次郎	1988	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
・『田佛遺跡』	川迷 昭人	1988	筑後市教育委員会
・『稿本・筑後市の石造美術』	坂田 健一	1989	坂田 健一
・『増補 西海忠士小伝』(復刻版)		1989	鶴久 次郎
・『筑後郷土史研究会誌』 十四号		1989	筑後郷土史研究会
・『(仮)横枕家文書目録』		1989	筑後市教育委員会
・『坂東寺墓塔群』		1990	羽犬塚中学校考古学部
・『蔵敷遺跡群』	羽犬塚中学校考古学部	1990	筑後市教育委員会
・『ちくご100年につぼん100年 百一歳翁問書』	佐々木 隆彦・編	1990	筑後市教育委員会
・『高江遺跡』	下川 歌史	1991	西日本新聞社
・『中学生が調べた郷土の信仰遺物』	永見 秀徳	1991	筑後市教育委員会
・『梅島遺跡』	坂田 健一・編	1992	坂田 健一
・『八女市史』	永見 秀徳	1992	筑後市教育委員会
・『古代遺跡の紹介』(『教育筑後』37号)	八女市史編さん専門委員会	1993	八女市
・『高江原口遺跡』	永見 秀徳	1993	筑後市教育委員会
・『久富市ノ玉遺跡』	赤司 善彦	1993	福岡県教育委員会
・『久塚古墳』	赤司 善彦	1993	福岡県教育委員会
・『榎崎遺跡』	佐田 茂・編	1993	筑後市教育委員会
・『四ヶ所古四ヶ所遺跡』	小林 勇作	1993	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群Ⅰ』	小林 勇作	1994	筑後市教育委員会
・『久富島居遺跡』	小林 勇作・編	1994	筑後市教育委員会
・『真木保臣』(ふくおか人物誌 5)	山口 宗之	1994	筑後市教育委員会
・『福岡県の城』	廣崎 篤夫	1995	西日本新聞社
・『福岡県文化財目録』(平成6年度版)		1995	海鳥社
・『筑後東部地区遺跡群Ⅱ』		1995	福岡県教育委員会
・『蔵敷赤坂遺跡』	小林 勇作	1995	筑後市教育委員会
・『筑後西部地区遺跡群』	小林 勇作	1995	筑後市教育委員会
・『筑後北部第2地区遺跡群』	小林 勇作	1995	筑後市教育委員会
・『羽犬塚射場ノ本遺跡』		1995	筑後市教育委員会
・『筑後市坊の津街道をゆく』	近本 喜楨	1997	筑後市中央公民館
・『所州えびす紀行 恵比須の中の筑後』	坂田 健一	1998	坂田 健一
・『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1998	筑後市
・『久富大門口遺跡』	小林 勇作・編	1998	筑後市教育委員会
・『徳久中牟田遺跡』	柴田 剛	1999	筑後市教育委員会
・『筑後市内遺跡群』	永見 秀徳・編	1999	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群』	立石 真二・編	1999	筑後市教育委員会
・『前津中ノ玉遺跡Ⅱ』	上村 英士	1999	筑後市教育委員会
・『長崎坊田遺跡』	小林 勇作	1999	筑後市教育委員会
・『大木町文化財・史蹟めぐり 2000年版』	大木町文化財パンフレット作成部会	2000	大木町教育委員会
・『羽犬塚寺ノ磁遺跡』	立石 真二	2000	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群Ⅲ』	柴田 剛	2000	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群Ⅱ』	永見 秀徳	2000	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群Ⅲ』	立石 真二	2000	筑後市教育委員会
・『上北島花畑遺跡』	小林 勇作	2000	筑後市教育委員会
・『筑後西部地区遺跡群Ⅱ』	小林 勇作・編	2000	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群Ⅳ』	上村 英士	2000	筑後市教育委員会
・『上北島塚ノ本遺跡』	立石 真二	2001	筑後市教育委員会
・『筑後北部第2地区遺跡群Ⅱ』	小林 勇作	2001	筑後市教育委員会
・『筑後市内遺跡群Ⅱ』	小林 勇作・編	2001	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群Ⅳ』	立石 真二	2001	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群Ⅴ』	永見 秀徳・編	2001	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群Ⅳ』	上村 英士・編	2001	筑後市教育委員会
・『筑後市文化財分布地図』	永見 秀徳・編	2001	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群Ⅷ』	柴田 剛	2002	筑後市教育委員会
・『上北島篠島遺跡』	上村 英士	2002	筑後市教育委員会
・『尾島町廻遺跡』	小林 勇作	2002	筑後市教育委員会
・『久富綿打遺跡』	小林 勇作	2002	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群Ⅴ』	上村 英士	2002	筑後市教育委員会
・『津島九反坪遺跡』	立石 真二・編	2002	筑後市教育委員会
・『筑後市内遺跡群Ⅲ』	上村 英士・編	2002	筑後市教育委員会
・『筑後市内遺跡群Ⅳ』	小林 勇作	2002	筑後市教育委員会
・『西牟田上京手遺跡』	立石 真二	2003	筑後市教育委員会
・『羽犬塚中道遺跡Ⅰ』	立石 真二	2003	筑後市教育委員会
・『羽犬塚山ノ前遺跡』	上村 英士	2003	筑後市教育委員会

・『羽犬塚源々野遺跡』	小林 勇作	2003	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群VI』	永見 秀徳	2003	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群VII』	永見 秀徳・編	2003	筑後市教育委員会
・『筑後市内遺跡群V』	狭川 真一	2003	筑後市教育委員会・(財)元興寺文化財研究所
・『水田天満宮本殿保存修理工事報告書』	佐藤 正彦・編	2003	筑後市教育委員会
・『ちくご文化財だより』(1996~2002 5分冊)		2003	筑後市教育委員会
・『中折地内栗遺跡』	立石 真二	2004	筑後市教育委員会
・『前津柳ノ内遺跡』	上村 英士	2004	筑後市教育委員会
・『山ノ井南野遺跡』	小林 勇作	2004	筑後市教育委員会
・『筑後西部第2地区遺跡群VIII』	小林 勇作・編	2004	筑後市教育委員会
・『筑後東部地区遺跡群IX』	橋本 英将・佐藤 亜聖・他	2004	筑後市教育委員会・(財)元興寺文化財研究所
・『筑後市文化財分布地図』(改訂版)	永見 秀徳・編	2004	筑後市教育委員会
・『真木保臣伝』		2004	筑後市教育委員会・山橋高保存会
・『明治維新の先達 真木和泉守』	小川 常人		水天宮・真木和泉守先生崇敬会
・『山橋窩に祀られる50人の志士』	山口 光郎		

後記

筑後市制50周年を記念して『筑後市の文化財・平成16年度版』を刊行することとなり、こうして皆様の手許にお届けすることとなりました。社会教育の充実を求められながらも近年の財政状況の中において、このような機会に恵まれたことは文化行政を担う我々にとっても大変喜ばしいものであります。しかしながら、この冊子は多くの問題点を抱えていることも事実です。ここではあえてそのことを記し、今後の課題として警鐘を鳴らす意味でそのことを記させていただきます。

当初の計画では、この冊子は市制50周年とは別の形で作業が進められていました。そこで編集がとった作業行程は、1・文献資料による文化財の有無の確認、2・現地踏査、3・寺社仏閣への聞き取り調査、4・執筆という流れでした。幸い、筑後市には筑後郷土史研究会による多くの文献があり、特に旧羽犬塚町、水田村、古川村に関しては充実した環境が整っていました。また、先人達により寄贈された郷土に関連する書籍の量も、誇りを持って示すことのできる冊数を有しています。こうして文献資料の確認後、市内の踏査を始めた頃にこの冊子が50周年事業に組み込まれることが決まりました。事業を進めるにあたり、早急にたたき台となるものが必要となり、作業行程の2・3は大きく割愛されることとなりました。また、予算上、大きく割愛された項目も存在しています。では何が問題なのか、おおまかではありますが、少し述べさせていただきます。

まず、考古学資料。これは従来から「遺跡だより」などで紹介する機会も多く、大半を削りました。この中には市内にある未調査の古墳や、古代交通や中世水田荘・長田荘を考える上で重要な「鶴田遺跡群」なども含まれます。

次に神社仏閣関係。文献一覧を見ると充実した調査がなされているようにも見えますが、絵馬や仏像の銘文・伝承など、不足部分も多く見られます。また、市内から転出した寺院もあれば新たに開かれた寺院もあり、その確認調査が残されたままです。市内各所に設けられているお堂や地藏像・板碑なども、近年のほ場整備により形状が変化したり移動していたりしております。例えば、旧文化財分布地図に記載されている馬間田の「毘沙門天祠」は所在不明となっております。

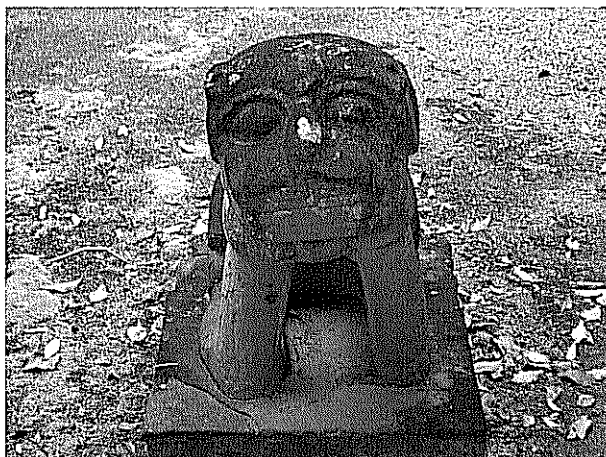
近・現代資料に関しては、文化財として認められるのかという部分もあり、多くを割愛しました。市内には明治に作られたJR九州の所有する「レンガ橋梁」や、太平洋戦争の悲劇を伝える「寺原三夫軍曹慰霊碑」、この他市内各地に「日露戦争」の惨状を伝える慰霊塔があります。また、市内の近代化を支えた各産業や著名人なども多くを外しておりますし、伝承関係についても、ここに紹介したものが全てではありません。

逆に、筑後市の特色を示すものとして、中世の状況、水利、交通関係の記述は多くなっています。しかし、水利関係は門外漢ということもあり充実できたとは言えず、水田寛作と共に下妻の水問題の解決に尽力し耕地整備に励んだ「尋木精一」など、外さざるを得なかった項目も存在しております。

現在筑後市では埋蔵文化財を扱った「ちくご遺跡だより」に変わり、文化財全般を題材とした「ちつご文化財だより」が不定期ながら刊行されております。残念ながら、この紙面において今回紹介できなかった歴史や文化財を取り上げていくことには限界がありますし、文化財イベントにおいてこれを紹介していくこともまた困難であります。これら紹介できなかった多くの物を、なんらかの形で皆様の前に紹介できる機会ができるよう、今後も努力を進めていく所存であります。

今回の編集において感じたことは、故・右田乙次郎氏の業績の大きさです。氏の経歴は「八十三才の人生記録」（『筑後郷土史研究会誌・14号』1989）に自伝として紹介されています。氏は明治39年（1906）樋口吉蔵・イヨの5男として熊本市に生まれ、幼くして両親と死別、所々の苦勞の末季兄末喜の

養子先である下川家にて成人、昭和2年（1927）より小学校教員として58才まで地域の教育に勤めました。この間、妻ヨシエの実家の跡継ぎとなり右田姓を名乗るようになります。氏は昭和13年（1938）頃から郷土史会の発起人の一人、坂本友蔵氏と郷土史会の設立について話すことが多かったといえます。しかし、時代は太平洋戦争へ向かっており、会の発足は昭和26年（1951）となりました。名称は水田村郷土史研究会。当時は水田小学校に事務所が置かれ、初代会長には下川秀樹、氏は事務担当となります。会はその後村外からの入会者も多くなり、28年（1953）には筑後郷土史研究会と名称を改めます。その後会を中心とした郷土史調査は活発に行われ、氏を中心とした会の刊行物は自叙伝の記された時点で60冊を越え、会の収集した資料は筑後市郷土資料館に納められました。氏は昭和38年（1963）より福岡県の民俗資料緊急調査にも携わっており、その業績は市内・市外を問わず、素晴らしいものを残されています。昭和54年（1979）福岡県地方史研究協議会常任委員、56年（1981）筑後郷土資料館運営委員、58年（1983）郷土史会会長、60年（1985）筑後市文化財専門委員会会長、62年（1987）筑後市史編さん委員長となり、市史の完成した平成10年（1998）に他界されました。今回の刊行において参考とした文献も、その多くが氏が中心となって編集されたものです。これらは今でも筑後市の文化財行政にあって、なくてはならないものとなっております。氏の遺徳を讃えると共に今後の文化財行政の発展を誓う意味で、この書を氏に捧げます。



水田天満宮 石造肥前型狛犬

筑後市の文化財

—平成16年度版—

平成17年3月31日 初版発行

平成17年7月31日 第2版発行

刊行 筑後市教育委員会
〒833-8601 筑後市大字山ノ井898
☎ (0942) 53-4111

(非売品)